

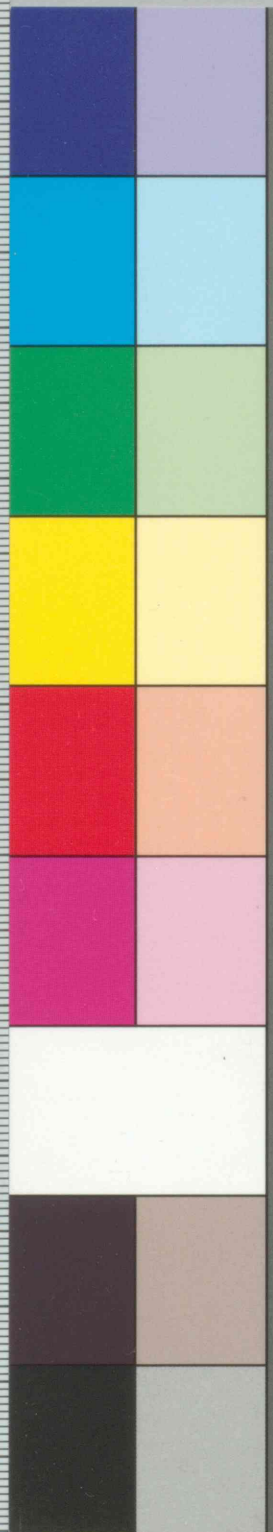
訂五  
新  
日  
本  
讀  
本  
古  
本  
義  
別  
編  
九



375.9  
Y019  
資料室

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22

Kodak Color Control Patches



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

41442  
教科書文庫

4
810
<del>200030</del>
<del>41-1934</del>
<del>1705</del>

2000301705

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22

資料室

375.9

4019

昭和九年十一月二十六日  
中學校國語漢文科·實業學校國語科用

文部省檢定濟

訂五

新

日

本

讀

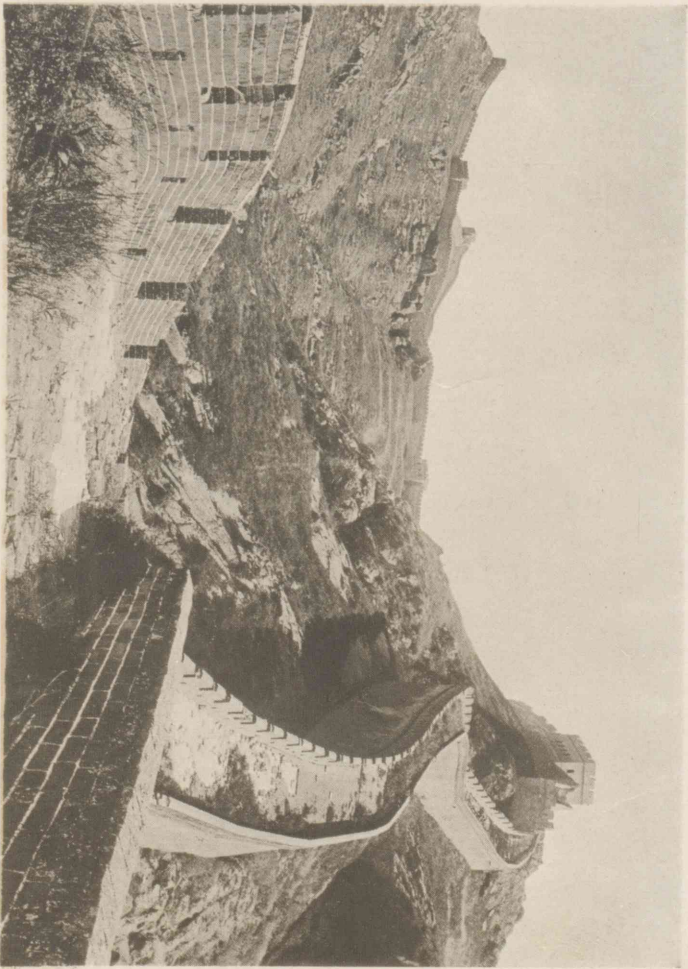
本

修文館發行



廣島大學圖書印

広島大学  
教  
34992  
圖書



(照參課二第)

城長の里萬

### 編纂趣意要項

國語教育の目的はまづ國語を正しく且つ完全に把握せしめ、次いで國語によつて表現された國民精神と國民文化とを徹底的に理解せしめるにあると信じます。

この目的を達成する爲に

- 一 現代の生命のさながらに動いてゐる現代文の精神を確實に味得せしめたい。
- 二 現代まで流れて來た源泉に棹さして前代文の精神を完全に理解せしめたい。
- 三 かくて國民精神を反射してゐる國語の運用に徹底せしめ、

世界の面前に於てそれを磨きあげる基礎を造りたい。  
 以上三旗幟を目標となし、古今の代表作家の名篇について探訪  
 厳選し、それを適宜に鹽梅排列しました。

かくて國語愛から國家愛への道程を残す所なく榮しつゝ、中等  
 學校に於ける國語教育の完成に貢献したいと祈つて止まないの  
 てあります。

昭和九年七月

編者識

卷九 目次

十	明 淨 直	五十嵐 力	一
キ	萬里の長城(抄)	土井 晚翠	二
三	英雄出でてよ	鶴見 祐輔	七
四	春 は 曙	(枕草子)	
一四	季		三四
二	香爐峰の雪		三五
三	にくきもの		三六
五	大原御幸	(平家物語)	三六

六 徒然草抄

一 静かに思へば

三

二 名利につかはれて

三

三 人の心すなほならねば

四

七 袖ひぢて

(諸家)

四

八 東下り

(伊勢物語)

四

一 都鳥

五

二 小野の雪

四

九 藤村の言葉

島崎藤村

五

十 元祿の三文豪

藤井紫影

五

十一 鼠の文使ひ

井原西鶴

五

十二 奥の細道

松尾芭蕉

六

十三 山路きて

(諸家)

七

十四 曾我會稽山

近松門左衛門

七

十五 山の文學と水の文學

久松潛一

八

十六 落花の雪

(太平記)

八

十七 雅文抄

一 花月の遊

(花月草紙)

一五

二 初雁をきく

(うけらが花)

一六

三 壬子試筆の詞

(駿臺雜話)

一七

十八 讀書の意義

阿部次郎

一五

十九 國家の盛衰

大町桂月

一五

日本民族の信念

河野省三 二五

附録

近古文學

編者 二五

目次 終



五十嵐力  
米澤市の人、明治七  
年生、文學博士、早  
稲田大學教授、  
文武天皇  
第四十二代  
宣命

訂五 新日本讀本 卷九

一明 淨直

五十嵐 力

文武天皇が、御即位の際に下された宣命の中に、左の詞がある。  
是を以て百官人等四方の食國を治めまつれと任せ給へる  
國々の宰等に至るまでに天皇が朝廷の敷き給ひ行ひ給へ  
る國の法を過ち犯す事なく、明き淨き直き誠の心もちてい  
やすみくゝて緩怠ることなく務め結りて仕へまつれと  
詔り給ふ大命を諸聞食へと詔る。

我等はこの宣命にある「明き、淨き、直き心」といふのが、日本人の  
性質中の核となり、中心となるものであらうと思ふ。この詞は、

日本書紀  
三十卷、神武以降持  
統天皇の御代までの  
事蹟を漢文で記した  
歴史書

抽象的

代々の詔勅に幾度も繰返されてゐる。しかも重きを置いて繰返されてゐる。その他、古事記、日本紀、萬葉集などに於ても、重々しい場合に幾度も用ひられてゐる。これは、畢竟我等の祖先が心の中に深く感じたこと、大和民族に最も濃厚に最も多量に賦與された性質が、自然に口を衝いて屢發したのではあるまいか。世に大和民族の特性と稱される現實、光明活動向上中庸、快活、忠孝、清廉、勇武、義俠、風雅などの諸性質は、おほむねこの明淨直の三大性質を基本として説明されるらしく、殊に三種の神器が、この三大性質の標章として遺憾なきやうにおもはれる。次に、抽象的ではあるが、一通りその理由を説明して見たいと思ふ。鏡の性は明で、その徳は玲瓏透徹に物を映すにある。日本人は、鏡のやうな明き心を以て正しく事物を觀た。故に、その觀方は概して公平無私で、赤い物は赤いとし、黒い物は黒いとし、善行

ノリトコト  
宣説言

伊の若草をてん  
ルにたふさふさ  
海草の草

に對しては我を忘れて歎美し、悪行を見ては敢然として排斥するといふ傾があつた。天照大神は鏡を齋きて、我が大御前を見るが如くせよ」と仰せられた。全國無數の神社には、その鏡が神體として齋かれてある。詔勅や祝詞や君臣應對の詞などに、「明き心」といふ語が澤山用ひられてゐる。これ等は、何れも、この性質が我が國民の心底に根深く植ゑつけられてた證據である。と考へる。我が國民の中庸性、折衷性、調和性も一面この根本性の結果であらう。我が國には、政治、社會、宗教などの諸方面に互つて、諸外國に見る様な非常な大衝突はない。全くないではないが、割合に少く、またいつもそれが調和する傾がある。例へば、異主義が新に外國から入つて來る。毛色が變つてゐるので、暫くは新舊相争ふが、やがて、お互にそれには道理も無理もある事を解すると、馬鹿らしくなつて、最早争論が續けられなくなる。





身評

諷諭

張子の虎のやうな誇張の弊がなく、よくその實を現し、中味に相應はしい修飾を纏うてゐる。むくつけき武人にも、戦陣の間に花を翳し歌詠を贈答し或は胃に香を焼きしめるといふやうな嗜みがあつた。上流社會はいふに及ばず、市井の民に至るまで、一般にそれに相應はしい文學を有つてゐる。外國出稼の労働者が、その日の生活に窮しながらも、なほ一二の植木鉢を持たぬはなく、而して、これは外國の労働者に絶えて見ないところといはれてゐる。大工指物屋の手に成るはかない家具や細工物も、西洋のが表面のみ美しく裏面の粗末なのに反し、

むくつけし

張子の虎

張子の虎のやうな誇張の弊がなく、よくその實を現し、中味に相應はしい修飾を纏うてゐる。むくつけき武人にも、戦陣の間に花を翳し歌詠を贈答し或は胃に香を焼きしめるといふやうな嗜みがあつた。上流社會はいふに及ばず、市井の民に至るまで、一般にそれに相應はしい文學を有つてゐる。外國出稼の労働者が、その日の生活に窮しながらも、なほ一二の植木鉢を持たぬはなく、而して、これは外國の労働者に絶えて見ないところといはれてゐる。大工指物屋の手に成るはかない家具や細工物も、西洋のが表面のみ美しく裏面の粗末なのに反し、

むくつけし

審美眼

首鼠兩端

静と直の對比

静中之動

静と直の對比

我が國のは、見えない裏面にまでも手を盡くすといふ嗜みがあるといはれてゐる。これらは、何れも大和民族が清きを愛する根本性の現れたものではあるまいか。我等は、日本人は世界第一の審美眼を有する國民にして、貴族より労働者に至る迄、皆美術を愛翫す。というた一外人の批評が、必ずしも虚妄でないと思ふ。

直は正を意味し、勇を意味し、決斷を意味し、直前直往を意味する。その厭ふところは躊躇緩慢、首鼠兩端である。曲ること、拗れること、邪なことである。叢雲の劔は、その標章としてこの上なく相應はしい。元來、直の徳の本領は、心の明らかに見た所に向つて直前するにある。若し右の三徳を一括して之を一體と見れば、明はその靜的方面即ち知の方面で、直は活動方面即ち意の方面である。知の明らかに見た所をば意が直進して實現する。

素盞鳴尊の御子 一明 淨 直

父母を云々  
萬葉集にある長歌の  
一節、山上憶良の作

海行かば、水漬く屍  
山行かば、草むす屍  
大君の、へにこそ死  
なめ、かへり見はせ  
じ。(萬葉集)

而して知の見方、意の働き方に、潔く、いひ知らぬ味はひのある  
のが、邦人固有の性格といふべきであらう。明き心を以て、父母  
を見れば尊し、妻子見ればめぐし、愛し。ゆゑに、その明き心の示  
すところに従ひ、直前して父母に事へ、妻子を愛しむ。君を仰げ  
ば、八隅知し大君、「現つ神として國に臨み給ふ様が限りなく高  
く貴い。故に、直前して、海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍」の  
獻身的奉公を效すのである。而して、その君父に事へ、妻子を愛  
しむや、多くは水臭い思慮、分別利害勘定の結果でなくして、眞實  
掬すべき趣があつた。こゝが眞淵宣長等の國學者が、感歎し自  
負して措かなかつた所である。無論、何處の國にも、文化の進ま  
ぬ時代には、かやうな自然的の所があつたであらうし、日本民族  
にも、利害勘定の行爲がなかつたとはいはれないであらう。  
また、自然眞實の行爲に弊害が伴はないともいはれないであら

素盞鳴尊  
伊弉諾尊の御子  
日本武尊  
景行天皇の御子  
鎮西八郎爲朝  
源爲義の第八子、嘉  
永二年(八三〇)歿、年  
三十二。  
權化 知行尊  
千萬の  
高橋蟲麿の作。(萬葉  
集)  
畠山重忠  
源賴朝の臣  
曾我五郎  
名は時致  
朝比奈三郎  
名は義秀、和田義盛  
の子。

うけれども、我が民族の特徴の一面は、とにかく此處に在つたや  
うに思はれる。その例は、遠い昔では、素盞鳴尊に見ることが出  
来る。あの日本武尊も素盞鳴尊系の勇者である。次いで、鎮  
西八郎爲朝の腕白勘當、九國押領、召還、保元の勇戦、大島配流の一  
生、これも素盞鳴尊系の大立者。これ等何れも向う見ずの様で  
ありながらも、妙に情に厚いところがあり、君父の事とあれば、水  
火も辭せず、直前するといふ風があつた。直斷決勇の權化で、  
確に大和民族固有性の一面を背負つて立つヒーローであつた。  
その他、蒙古來寇の時に、西海の將士が身命を棄てて防戦した態  
度を見よ。代々の武士が、千萬の軍なりとも言擧げせず、取りて  
來ぬべき男とぞ思ふ。といふ様な斷乎たる覺悟を見よ。畠山  
重忠や加藤清正の如く、竹を割つたやうに正直な豪傑が國民に  
尊崇されるのを見よ。曾我五郎朝比奈三郎のやうな一徹者が

豁然大悟  
 金平淨瑠璃  
 寛文・延寶の頃、櫻  
 井丹波掾の語り初め  
 た金平（金平本の主  
 人公の名）の武勇を  
 仕組んだ淨瑠璃  
 依 怙  
 利 潤  
 分別も云々  
 山本常朝の「葉隠」に  
 ある。  
 金 戒

たふさふさした  
 とまどふふふふ

國民に愛されるのを見よ。豁然大悟の禪宗が盛んに行はれたのを見よ。おつと出せばやつと受ける金平淨瑠璃の流行した趣を見よ。眞偽は知らないが、正直は一旦の依怙にあらずと雖も、終に日月の憐みを蒙る。謀計は眼前の利潤たりと雖も、必ず神明の罰に當る。」といふ戒が、天照大神の御言葉として神道家に唱へられてゐた。武士には七息思案といふ格言があつて、分別も久しくすれば徹る。武士は物事手つ取り早くするものぞといふことが、武士道の金戒になつてゐた。これ等は何れも直きを好む性質が、大和民族の心性の基本精髓をなしてゐる證據である。

（新國文學史）

二 萬里の長城（抄）

生ける歴史か積り來し齡は高し二千年、  
 影は萬里の空に入る名も長城の壁の上  
 落日低く雲淡く關山みすく暮の色、  
 征馬懐みて留りて遊子俯仰の影長く。

〇七 七五

絶域花は稀ながら平蕪の緑今深し、  
 春乾坤に回りては空悉く霞み行く、  
 天地の色は老いずして人間の世は移るふを  
 歌ふか高く大空に姿は見えぬ夕雲雀。

蒙性 ↓ 萬里の長城

土 井 晩 翠  
 島 崎 樗 村 (情 思 詩 集)  
 自 由 詩 ↓ 情 思

嗚呼跡舊りぬ、人去りぬ、歳は流れぬ、千載の  
昔に返り何の地か今秦皇の覇圖を見ん、  
残壘破壁聲も無し。恨も暗し夕ぐれの  
春朦朧のたゞなかに俯仰の遊子影一つ。

二

三皇五帝あと遠く六王終りて四海一  
四海の黔首ひれふして雷霆の威に聲もなし、  
「わが宮殿を高うせよ」一たび呼べば阿房宮  
「わが邊境を固うせよ」二たび呼べば萬里城、  
春は驪山の花深く秋は上郡の雲暗く。

絲竹

管絃の音雲に入る舞殿の春の夕まぐれ、  
袂を舉げて軽く起つ三千の宮女花のごと

梅屋信

花を散らして玉觥に浮かす歌扇の風もよし、  
彫龍の欄奥深く薫る蘭麝の香を高み  
珠簾を洩るる銀燭の光残りて夜や明けむ。

西臨洮の嶺高しこゝ遼東の谿深し、  
流を埋め山を截り壘を連ぬる幾千里  
篝の焰天を焼き劔の光霜凝り  
殺氣夏猶もの凄く守るは猛士二十萬  
漠のこなたに胡茄絶えて匈奴の跡は遠ざかる。

三

「北夷の憂絶えはてて境は堅し國安し、  
先王の書も焚け果てぬ天下の儒者も埋りぬ  
わが萬世の業成りぬ」君王の思しかなりや。

知るや夜半の阿房宮後庭深く森暗く  
歌臺の響よそにしてひとり嵐のつぶやくを  
「浮世の花の一盛り褪むるに早き色見ずや」

聞け、長城の秋の營、旌旗の暗に消ゆる時  
また、く光露帯びて星の竊にさゝやくを  
「富も力も一場の夢覺め果てん後思へ」

四

春靜かなる東海の緑を涵す波の上  
不死の金闕遠くして童女五百の舟いづこ、  
絳霞の光天上の花とこしへに匂へども  
土に下れば沈澁の示すはひとり世の脆さ、

至尊の榮は高くとも名を玉籍に留め得じ、  
金人十二鑄なせどもかれに無象の劍あり。

心を焦し身を碎くあゝ韓朝の一孤臣  
爾の策は成らずとも無常の風は荒かりき、  
天地靜かに夜更けて江流秋に咽ぶ時  
ひとり圮橋のかたほとり燃ゆる心も鎮まりて、  
思ふやいかに人力の脆きを命の定りを、  
鐵椎血無し博浪沙、——鮑魚臭有り沙丘臺。

五

嗚呼死屍未だ冷えずしてかれ萬世の業いづこ  
暗君嗣ぎて上に在り佞豎の害よなどあらき、  
民の怒は火の如く戍卒は叫び兵は起ち

楚人の一炬閃きて咸陽の宮皆焦土。

霽れざる空に虹懸けし復道の跡今いづれ、  
雲あらざるに龍飛べる長橋の影はたいかに、  
衰蘭露に悲しめば遺宮空しく草の宿、  
驪山の麓春去れば花悉く涙なり。

斬蛇の劍炎精の光もさはれ極みあり、  
甘泉殿の夜半の月かれも浮雲の恨あり、  
その移り行く世の習二京の花をよそにして  
邊土に立てる長城の連雲の影あゝ絶えず。

(曉 鐘)

鶴見祐輔

群馬縣の人、明治十八年生、評論家。

雄渾

プラトーン

ギリシャの詩人哲學者、西紀前四七七年、年八十。

神往

シーザー

ローマの政治家、西紀前四四年、年五十六。

マホメット

イスラム教の始祖、西曆三三年、年六十。

三 英雄出でよ

鶴見 祐輔

古代文明の世には総合的智能を持った天才が幾人となく現れてゐる。

孔夫子の出現は今日に於て想望しても、我々の心魂を躍らしむるに足る。一人立つて天下大衆の行くべき途を指示した雄渾な姿は、永久に人類の讃仰に値する。

古代ギリシャにプラトーンの現れた史實も、亦萬里異邦の我等をしてその英姿に神往せしむるものがある。西洋文化の基調を、一人を以て洞觀し指示した氣魄に至つては、百代燦として光を日月と争ふといふべきである。

實行の世界に於ては、シーザーのローマの帝國を築き、頼朝の覇府を鎌倉に樹て、マホメットの回教を歐・亞・弗の三大陸に建立

リンカーン  
アメリカ合衆國第十  
六代の大統領、西曆  
一八五〇年、年五十六  
ビスマーク  
ドイツの政治家、西  
曆一八四九年、年八十  
四。

大早の雲霓を望む



グーテラフ

し、リンカーンの米國南北諸州を統一し、ビスマークの群邦を統  
べてドイツの帝國を作つたなど、その方向と動機とを異にする  
も、皆よく時代を洞見して、幾千萬人類の生活に秩序と統一とを  
與へた綜合の天才に至つて  
は揆を一にしてゐる。  
人類は今思想の世界と實  
行の世界とに於て、かやうな  
綜合的天才の出ることを、大  
早の雲霓を望むやうに渴望  
してゐるのだ。

殊に日本に於て、私はそのことを痛切に感ずる。  
明治維新以後、東西兩洋の文化は雜然として相交はり、社會生  
活の諸相は日に複雑を倍加して止まるところなく、制度・文物・法  
制等の一切にわたつて、新しい酒を盛るべき新しい皮囊を要す  
るの事實は誠に痛切なものにも關らず、未だこれらの諸相を洞觀  
して、綜合的大觀を與へるの天才は現れない。  
殊に實行の世界に至つては、創意を以て新境を拓き、大局を洞  
見して統一を與へるべき人傑を見ることが出來ず、社會は益々大  
にして、人間は愈々小なりとの感が深いのである。  
教育は進み、生活は向上した。しかし、人間自身の價値は高ま  
りつゝあるかどうか。  
デモクラシーの波は滔々として全世界を呑みつくさうとし  
てゐる。平等を求める聲が世界の隅々まで徹した。その平等  
論を基調とする新思想と新生活とが、一切の個人の中に浸潤し  
て來た。  
しかしながら、我々が全世界の人文史を振返つて見ると、かや



うな思想とかやうな生活は、必ずしも現代に特有な新しいものではない、我々は過去に於て幾度もこれを思索し、幾度もこれを實行しようともがいてゐるのだ。

しかしながら、如何なる世に於ても如何なる國に於ても、つまりは同一の結論に到達してゐるのだ。

それは人間の社會は、指導者がなくては進歩しないといふ事だ。

指導者といふことを、我々は色々な文字を以て唱へて來た。

或時は半神半人の崇高な存在として崇め、或時は聖雄として、英雄として、大經世家として、大聖僧として、大詩人として、大音樂家として、大哲人として仰いで來た。近頃の世には大發明家として、大技術者として、大銀行家として、大製造工業家として、大勞働運動者として推重してゐる。

名前は變る。しかし、事實は變らない。何時の時代に於ても、多數の人類は少數の指導者の力で進歩する。少數の指導者を作り出すことが多數者の力なのだ。

多數者の胸の中に詩があつて、バイロンがこれを謳ふのだ。

多數者の胸の中に樂があつて、ベートーヴェンがこれを奏てるのだ。多數者の胸の中に畫があつて、雪舟がこれを描くのだ。

多數者の胸の中に大國家があつて、ビスマルクがこれを建設するのだ。多數者の胸の中に宗教があつて、日蓮親鸞がこれを祈り出すのだ。

多數の人の胸の中に光り輝くものがあつて、これが少數の天才に靈成して、偉大なものが地上に生まれるのだ。故に多數と少數とは一體なのだ。

かやうな少數の天才を生むことが、人類の努力であつた。ペ

バイロン

イギリスの詩人、西曆一八三四年歿、年三十六。

ベートーヴェン

ドイツの音樂家、西曆一七九二年歿、年五十七。

雪舟

名は等楊、備中國(岡山縣)の人、室町時代の畫僧、永正三年(一六六)歿、年八十七。

日蓮

日蓮宗の開祖、弘安五年(一四三)歿、年六十一。

親鸞

浄土真宗の開祖、弘長二年(一三三)歿、年九十。

ペリクレス

アテナの政治家、西紀前四九九年歿、年六十一。

リクレスのいつたやうに「世界は英雄の墳墓なり」である。その天才は常に総合的能力を持った人々であつた。多數の我々凡人が胸の中に漠然と抱き持つてゐるものを「これだ」と



ロイド・ジョージ

取出して萬衆に見せてくれる人だ。それを現實に打立ててくれる人だ、それが英雄兒だ。歐洲戦争の終つて、平和條約の締結された最初の議會に於て、軍國宰相の名譽に輝き渡つたロイド・ジョージが嵐のやうな喝采の中に立ち上つて、「我等は英國を英雄の住むに適する地と爲すために戦つたのだ。」と喝破した一言が、如何に凜として當時の世界

ロイド・ジョージ  
イギリスの政治家  
西暦一八三三年生

南洲

西郷隆盛、明治維新の功臣、明治十年歿、年五十一

山陽

頼山陽、徳川時代の儒者、天保三年(一八三二)歿、年五十三

龍馬

坂本龍馬、明治維新の志士、慶應三年(一八五七)歿、年三十三

甲東

大久保利通、明治維新の功臣、明治十一年歿、年四十八

馬琴

本名瀧澤解、馬琴はその號、徳川時代の小説家、嘉永元年(一八二九)歿、年八十二

を感激させたか。

かやうな英雄的氣魄は、隆興すべき民族の胸中に躍つてゐる。それが明治維新を作つた力なのだ。それが昭和維新を作り出す力でなければならぬ。

今の日本は、海の内も海の外も、山雨將に到らんとして風樓に満つるの秋である。思想、經濟、外交の一切に互つて、我等は明白に明日の暴風雨を豫感する。

かやうな暴風雨を叱咤し、かやうな怒濤に駕して、新日本の新しい生命を呼び起す英雄兒は今何處にゐるのだ。第二の南洲と、第二の山陽と、第二の龍馬と、第二の甲東と、第二の馬琴は今何處にゐるのだ。

天の靈に感じ、地の精を體し、八千萬の同胞に呼び掛ける偉大な総合的天才よ出でよ。

(英雄待望論)

④ 春は曙

一四 季

春は曙。やうく白くなりゆく山ぎはすこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

夏は夜。月の頃は更なり。闇もなほ螢とびちがひたる。雨などの降るさへをかし。

秋は夕暮。夕日はなやかにさして、山の端いとちかくなりたるに鳥のねどころへ行くとして、三つ四つ二つなど飛び行くさへ

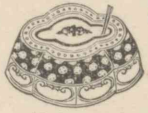
あはれなり。まいて、雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆる、いとをかし。日入りはて、風の音、蟲の音など、いとあはれなり。

冬は朝。雪の降りたるはいふべきにもあらず、霜などのいと白く、また、さらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もてわた

たなびきたる  
枕草紙  
十二巻  
三一段  
座石の満志録  
伊園草子(巻)  
清言代り  
白く、また、さらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もてわた

火桶

なりぬるは



るもいとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃、火桶の火も白き灰がちになりぬるはわろし。



清少納言

二 香爐峰の雪

雪いと高く降りたるを、例ならず御格子参らせて、炭櫃に火おこして、物語などしてあつまり侍るに、少納言よ、香爐峰の雪はい

香爐峰の雪  
遺愛寺ノ鐘ハ枕ヲ欲  
テテ聴キ 香爐峰ノ  
雪ハ籠ヲ撥ゲテ看ル  
(白氏文集) 雪のたなびきたる  
御格子参る

思ひこそ…つれ

かならむ。」と仰せられければ、御格子あげさせて、御簾高くまきあげたれば、笑はせ給ふ。人々もみなさる事は知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそよらざりつれ。「猶この宮の人には、さるべきなめり。」といふ。

三にききもの

長ごと  
あなづらはし  
心はづかしき人

いそぐことあるをりに、長ごととするまらうど。あなづらはしき人ならば、のちになどいひてもおひやりつべけれども、さすがに心はづかしき人、いとにくし。硯に髪の入りにて磨られたる。また墨の中に、石こもりてきしきしときしみたる。

ゑんじそしる

物羨みし、身の上なげき、人の上いひ、つゆばかりのこともゆかしがり、聞かまほしがりて、いひしらせぬをばゑんじそしり、また

さいまくる

僅に聞きわたることをば、我もとより知りたることのやうに、こ  
と人に語りしらべいふもいとにくし。  
物聞かんとおもふほどに泣くちご。鳥の集りて飛びちがひ  
鳴きたる。ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊のほそごゑに名の  
りて、顔のもとに飛びありく。羽風さへ身のほどにあるこそ、い  
とにくけれ。

いひくたす  
らうたがる

物がたりなどするに、さしいでて、われ一人さいまくるもの、す  
べてさし出は、わらはもおとなもいとにくし。むかし物語など  
するに、わが知りたりけるは、ふと出でていひくたしなどする、い  
とにくし。

調度  
枕草子  
清少納言の隨筆。  
清少納言一清原元輔  
の女、一條天皇の皇  
后に仕ふ、生歿年不  
明。

あからさまに來たる兒ども、わらはべをらうたがりて、をかし  
きものなどとらするに、ならひて常に來てゐりて、調度などう  
ちちらしぬる、にくし。

(枕草子)

法皇  
後白河法皇、建久三年(八五三)崩御。

建禮門院  
名は徳子、平清盛の次女、高倉天皇の中宮、安徳天皇の御母。

北祭  
賀茂の祭のこと、陰曆四月中の酉の日に  
行はれる。

大原  
山城國(京都府)愛宕郡大原村。

清原深養父  
平安朝の歌人、延喜(二五二)一(二五三)頃の人。

補陀落寺  
山城國(京都府)愛宕郡。

皇太后宮  
後冷泉天皇の皇后、關白藤原教通の女、御名歡子。  
名残ぞ……るる、

五大原御幸

法皇は文治二年の春の頃建禮門院の大原の閑居の御住居御覽ぜまほしう思しめされけれども、衣更著彌生の程は嵐烈しう、餘寒もいまだ盡きず、嶺の白雪消えやらで、谷のつらゝも打解けず。かくて春過ぎ、夏來つて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて大原の奥へ御幸なる。しのびの御幸なりけれども、供奉の人々には徳大寺・花山院・土御門以下公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。鞍馬通の御幸なりければ、彼の清原の深養父が補陀落寺、小野の皇太后宮の舊跡叡覽あつて、それより御輿にぞ召されける。遠山に懸る白雲は、散りにし花のかたみなり。青葉に見ゆる梢には、春の名残ぞ惜しまるる。頃は卯月二十日餘りの事なれば、夏草の茂みが末を分け入らせ給ふには、はじめたる御幸な

れば、御覽じなれたる方もなく、人跡絶えたる程も思し召し知られて哀なり。

西の山の麓に一字の御堂あり、すなはち寂光院これなり。古う造りなせる泉水木立よしあるさまの所なり。藁破れては霧不斷の香を焼き、扉落ちては月常住の燈を掲ぐとも、かやうの所をや申すべき。庭の夏草しげりあひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草波に漾ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松にかゝれる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉まじりの遅櫻、初花よりも珍らしく、岸の山吹咲き亂れ、八重立つ雲の絶間より山郭公の一聲も、君の御幸を待ち顔なり。法皇これを叡覽あつて、かくぞ遊ばされける。

池水にみぎはの櫻ちりしきて

波の花こそさかりなりけれ



寂光院  
山城國(京都府)愛宕郡大原村にある、聖徳太子の開基。

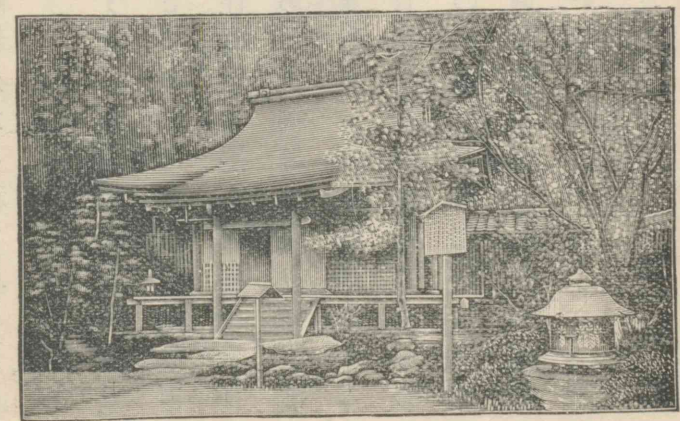
絲を亂す  
絲を亂す

ゆゑびよし  
緑蘿の垣  
翠黛の山



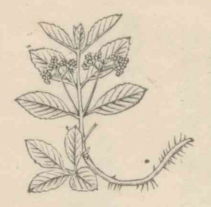
瓢箪屢、空シ、草顔  
淵ガ巷ニ滋シ、藜藿  
深ク鎖セリ、雨原憲  
ガ樞ヲ濕ス。(朗詠集)  
藜藿

ふりにける岩の絶間より落ち  
来る水の音さへゆゑびよしある  
所なり。緑蘿の垣、翠黛の山、繪に  
かくとも筆も及び難し。さて女  
院の御庵室を叡覽あるに、軒には  
葛薺あさか這ひかゝり、しのぶ交りの忘  
草、瓢箪屢、空し、草顔淵が巷に滋く、  
藜藿深く鎖せし、雨原憲が樞を濕  
すともいひつべし。杉のふき目  
もまばらにて、時雨も霜もおく露  
も、洩る月影にあらそひて、たまる  
べしとも見えざりけり。後は山  
前は野邊いさゝ小笹に風さわぎ、



堂本院光寂

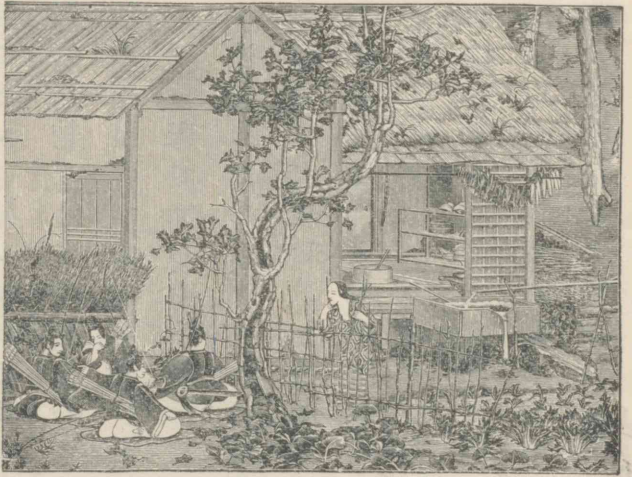
こゝろ  
ませ垣  
まさ木のかづら



青つゞらくる人  
青つゞら  
いたはしうこそ  
五戒・十善

世にたゝぬ身のならひとて、うきふし繁き竹柱、都の方の言傳は、  
間遠に結へるませ垣や、わづかに言とふものとは、峰に木傳ふ  
猿の聲賤がつま木の斧の音、これらが音づれならでは、まさ木の  
かづら青つゞらくる人稀なる所なり。  
法皇、人やある、と、召されけれども、御應へ申す者もなし。  
稍あつて、老い衰へたる尼一人参りたり。「女院は何處へ御幸  
なりぬるぞ。」と、仰せければ、此の上の山へ花摘に入らせたまひ  
て候。」と、申す。「こそ世を厭ふ御習といひながら、さやうの事  
に仕へ奉る人もなきにや、御いたはしうこそ。」と、仰せければ、此  
の尼申しけるは、五戒十善の御果報の盡きさせ給ふによつて、今  
かゝる御目を御覽ぜられ候にこそ。捨身の行になじかは御身  
ををしませ給ひ候べき。因果經には「欲知過去因、見其現在果。欲  
知未來果、見其現在因。」と、説かれたり。過去未來の因果をかね

つやく  
悉達太子  
釋迦出家前の名、悉達多、中印度カピラ王國淨飯王の太子。  
七年同其行



て悟らせ給ひなば、つやく御歎あるべからず。むかし悉達太子は、十九にて伽耶城を出でて、檀特山の麓にて、木の葉を連ねて肌をかくじ、峰に上つて薪を採り、谷に下つて水を掬ひ、難行苦行の功によつて、終に成道正覺し給ひき。」とぞ申しける。

此の尼の有様を御覽ずれば、身には絹布のわきも見えぬものを結び集めてぞ著たりける。  
あの有様にても、かやうのこと申す不思議さよと思し召して、「抑、汝は如何なる者ぞ。」と、仰せ

大原御幸

下村 觀山

本名は晴之助、和歌山縣の人、日本畫家、昭和五年歿、年五十八。  
故少納言  
藤原通憲、鳥羽・崇徳・近衛の三朝に歴事した。

深くこそ候ひしに

當てられず  
内侍にこそあなれ



(筆 山 觀 村 下)

ま、目も當てられず。法皇、げにも汝は阿波の内侍にこそあなれ。

ければ、此の尼さめくと泣いて、しばしは御返事にも及ばずや、あつて涙をおさへて、「申すにつけて憚り覺え候へども、故少納言入道信西が女、阿波の内侍と申すものにて候なり。母は紀伊二位。さしもいとほしみ深くこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬる程思ひ知られて、今更せむ方なうこそ候へ。」とて、袖を顔に押當ててしのびあへぬさ

阿修の傳  
法皇  
堰

御覽じ忘れさせ給ふぞかし。何事につけても、たゞ夢とのみこそ思し召せ。」とて、御涙せきあへさせ給はねば、供奉の公卿殿上人も、不思議の事申す尼かなと思ひたれば、ことわりにて申しけりとぞ、各、感じあはれける。

さてかなたこなたを窺覽あるに、庭の千草露重く、籬に倒れかかりつゝ、外面の小田も水越えて、鳴立つひまも見えわかず。さて女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子を引きあけて窺覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲をかけられたり。左に普賢の繪像、右に善導和尚並びに先帝の御影をかけ、八軸の妙文、九帖の御書も置かれたり。蘭麝の匂にひきかへて、香の烟ぞ立ちのぼる。かの浄名居士の方丈の室の内に、三萬二千の床をならべ、十方の諸佛を請じ給ひけむも、かくやとぞ覺えける。障子には、諸經の要文ども、色紙に書いてと

先帝  
安徳天皇、第八十一代

浄名居士  
維摩詰のこと、釋迦と同時代の人。

定基

法名寂昭、長保四年(六三)入宋し、長元七年(六四)彼の地で歿した。年七十三。

聖皇御記

ころどころにおされたり。其の中に、大江の定基法師が、清涼山にして詠じたりけむ、笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前。」とも書かれたり。少しひきのけて、女院の御歌とおぼしくて、  
思ひきや深山の奥にすまひして

雲居の月をよそに見むとは

さてかたはらを窺覽あるに、御寢所と思しくて、竹の御竿に、麻の御衣、紙の御衾などかけられたり。さしも本朝漢土の妙なるたぐひ數を盡くし、綾羅錦繡の粧もさながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人もまのあたり見奉りし事ども、今の様に覺えて、皆袖をぞ絞られける。

懸路を傳ひつゝ、おり煩ひたる様なりけり。法皇、あれはいかなる者ぞ。」と、仰せければ、老尼涙を押へて、花笥臂にかけ、岩つゝじ



取り具して持たせ給ひて候は、女院にて渡らせ給ひ候。爪木に  
蕨折り添へて持ちたるは、鳥飼の中納言維實が女、五條の大納言



(筆己正田岩) 花の向手

國綱の養子、先帝の御乳母、大納言の典侍の局。」と申しもあへず  
泣きにけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、み

一 軍記物語

一 軍記物語

一 軍記物語

一 軍記物語

軍記物語

撮取

平家物語

十二卷、著者不詳、別に灌頂巻と劍巻がある、平治物語の後を承けて、平家二十餘年の興亡を記した軍記物語。

な袖をぞ濡されける。女院は世を厭ふ御習とはいひながら、今

かゝる有様を見え参らせむずらむ恥づかしさよ、消えも失せば

やと思し召せどもかひぞなき。

宵々毎の闕伽の水、掬ぶ袂もしをるるに、曉おきの袖の上、山路

の露も繁くして、絞りやかねさせ給ひけむ山へも返らせ給はず、

又御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせまし。た

る所に、内侍の尼参りつゝ、花筐をば賜はりけり。「世をいとふ御

習、何か苦しう候べき。早々御見参あつて、還御なし参らせ候へ。」

と申されければ、女院御涙を押へて、御庵室に入らせおはします。

「念の窓の前には、擲取の光明を期し、十念の柴の樞には、聖衆の

來迎をこそ待ちつるに、思の外の御幸かなとて、見参ありけり。

(平家物語)大原御幸



をいふもの

智恵出でては云々  
大道廢レテ仁義有リ  
知恵出デテハ大偽アリ  
(老子)

さまほしきをそいつものつらく思へば、また譽を愛するは人の聞きこを喜ぶなり。ほむる人、謗る人、共に世に止らず、傳へ聞かむ人亦々速に去るべし。誰をかはぢ、誰にか知られむことをねがはむ。譽は又そしりのもとなり、身みの後の名残りて更に益なし。これを願ふも次に愚なり。たゞし強ひて智を求め、賢を願ふ人の爲にいはば、智恵出でては偽あり、才能は煩惱ぼんごの増長せるなり。傳へて聞き、學びて知るは眞まことの智にあらず。いかなるをか智といふべき。不可ふたがひは一條なり。いかなるをか善といふ。眞の人は智もなく、徳もなく、功もなく、名もなし。誰か知り誰か傳へん。これ徳をかくし愚をまもるにはあらず。もとより賢愚得失のさかひにをらざればなり。  
まよひの心もちて、名利の要をもとむるにかくの如し。萬事は皆非なり。いふに足らず、願ふに足らず。  
(第三十八段)

三人の心すなほならねば

人の心すなほならねば、偽なきにしもあらず。されども、おのづから正直の人などかなからむ。おのれすなほならねど、人の賢を見て羨むは世の常なり。至りて愚なる人は、たま〜賢なる人を見て、これをにくむ。「おほきなる利を得むがために、すこしきの利をうけず、偽り飾りて名をたてむとす」と謗る。己が心に違へるによりて、此の嘲をなすにて知りぬ。此の人は、下愚の性うつるべからず、偽りて小利を辭すべからず。假にも愚を學ぶべからず。狂人のまねとて、大路を走らば、則ち狂人なり。悪人のまねとて、人を殺さば悪人なり。驥きを學ぶは驥のたぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり。偽りても賢を學ばんを賢といふべし。  
(第八十五段)

下愚の性云々  
上智ト下愚トハ移ラズ  
(論語)  
驥きを學ぶ云々  
驥きヲ蹄ひフ馬ハ亦驥ノ乗ナリ、驥きヲ蹄ひフ人ハ亦驥ノ徒ナリ  
(揚子方言)  
舜を學ぶは云々  
孟子曰ク、鶏鳴イテ起キ、撃つ々トシテ善ヲナスモノハ舜ノ徒ナリ、鶏鳴イテ起キ、撃つ々トシテ惡ヲナスハ驥ノ徒ナリ  
(孟子)  
徒然草  
吉田兼好の隨筆  
吉田兼好一姓は卜部鎌倉末期の文學者  
正平五年(1190)歿  
年六十八

七袖ひぢて

紀貫之

袖ひぢてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やと  
くらむ

素性法師

見わたせば柳さくらをこきまぜてみやこぞ春のにしき  
なりける

紀友則

ひさかたのひかりのどけき春の日にしづごころなく花  
のちるらむ

僧正遍昭

蓮葉のにごりにしまぬこゝろもてなにかは露を玉とあ  
ざむく

凡河内躬恒

夏と秋とゆきかふそらのかよひぢはかたへすゞしき風  
やふくらむ

壬生忠岑

山里は秋こそことにさびしけれ鹿のなく音にめをさま  
しつゝ

大江千里

月見れば千々にものこそかなしけれわが身一つの秋に  
はあらねど

在原業平朝臣

ちはやぶる神代もきかず龍田川からくれなるにみづくるとは

坂上是則

あさぼらけ有明の月と見るまでに吉野のさとにふれるしら雪

喜撰法師

わがいほは都の異しかぞすむよをうぢ山と人はいふなり

清原深養父

冬ながら空より花のちりくるは雲のあなたは春にやあ  
るらむ

東下り

一都鳥

昔男ありけり。その男身を益なきものに思ひなして、京にはをらじすむべきところもとめむとて行きけり。もとより友とする人、一人二人して、もろともに行きけり。道しれる人もなく、惑ひ行きけり。三河國八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といふことは、水のくもでにながれ別れて、木八つ渡せるによりてなむ八橋とはいへる。その澤の邊の木蔭におりゐて、餉くひけり。その澤に燕子花いと面白く咲きたり。それを見て或人の曰く「かきつばたといふ五文字を句の上にするて、旅の心を詠め」といひければ詠める。

都鳥



三河國八橋  
三河國(愛知縣)碧海郡、知立町の東、妻川の邊

よりてなむ...いへる



ほとぶ

宇津の山

駿河國(靜岡縣)安倍郡と志太郡との間

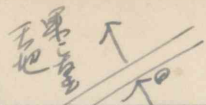
すゞろなるめ



八 橋

唐衣きつゝ馴れにしつましあれば  
はるくゝ來ぬる旅をしぞ思ふ  
と、詠めりければ、みな人餉の上に涙落してほとびにけり。

行きくゝて駿河の國に  
いたりぬ。宇津の山に至  
りて、我が入らむとする道  
は、いと暗う細きに、蔦かづ  
らはしげりて、物心ぼそく、  
すゞろなるめを見る事と  
思ふに、修行者あひたり。  
「かゝる道には、いかでかいまする。」といふに、見れば、みし人なり  
けり。京にその人の許にとて、文かきて、つく。  
駿河なるうつの山邊のうつゝにも



武藏の國  
今東京府に屬する  
下總の國  
今千葉縣に屬する。  
日も暮れなむ  
えしらず

かのこまだら  
重ねあげたらむ  
鹽尻  
程

夢にも人に逢はぬなりけり

富士山を見れば、五月のつごもりに雪いと白う降りり。

時しらぬ山はふじの嶺いつとてか

かのこまだらに雪の降るらむ

この山は、こゝにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげた  
らむ程して、なりは鹽尻のやうになむありける。

猶行きくゝて、武藏の國と下總の國とのなかに、いと大いなる  
河あり。それを角田川といふ。その川の邊に、むれりて思ひや

れば、かぎりなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守はや  
も、のわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白

き鳥の嘴と脚と赤き、鴨の大ききなる、水の上にあそびつゝ、魚を  
くふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人えしらず。渡守に問ひけ

これなむ都鳥(なる)  
 かむむやか  
 第一種よは  
 第二種よは  
 第三種よは  
 第四種よは

山崎  
 京都府乙訓郡  
 水無瀬  
 大阪府三島郡島本村  
 惟喬親王  
 文徳天皇の皇子、小  
 野宮、寛平九年(五五七)  
 薨、御年五十四  
 かれりけり  
 交野  
 河内國(大阪府)北河  
 内郡

これなむ都鳥と、いふを聞きて、  
 名にしおはばいざこと問はむ都鳥  
 と、詠めりければ、舟こそりて泣きにけり。  
 (伊勢物語)

二 小野の雪

昔惟喬親王と申す皇子おはしましけり。山崎のあなたに水  
 無瀬といふ所に宮ありけり。年毎の櫻の花盛にはその宮にな  
 むおはしましける。その時、右馬頭なりける人を常におは  
 しましけり。狩はねんごろにもせて、大和歌にかれりけり。  
 今狩する交野の渚の院の櫻ことにおもしらし。その木の下に  
 おりゐて、枝を折りて挿頭にさして、上中下みな歌よみけり。馬

春の心はのどけか  
 散ればこそいとど櫻はめでたけれ  
 うき世になにか久しかるべき

大殿ごもり  
 推後親王  
 日影  
 あらなむ  
 ありなむ

頭なりける人、  
 世の中にたえて櫻のなかりせば  
 春の心はのどけか  
 となむよみたりける。又ある人の歌  
 散ればこそいとど櫻はめでたけれ  
 うき世になにか久しかるべき  
 とて、その木の下は立ちて歸るに日暮になりぬ。歸りて宮に入  
 らせたまひぬ。夜更くるまで物語してさてあるじの皇子入り  
 て大殿ごもりたまひなむとす。十一日の月もかくれむとすれ  
 ば、かの馬頭よめる。  
 山の端にげて入れずもあらなむ  
 かくしつゝまうでつかうまつりけるを皇子思のほかにみぐし

伊勢物語

二卷、著者不明、在原業平の行跡を記した歌物語。在原業平—阿保親王の第五子、在五中將六歌仙の一人、元慶四年(西〇)歿、年五十六。

ありさせたまひて、小野といふ所に住みたまひけり。正月に拜み奉らむとて、小野にまうでたるに、比叡の山のふもとなれば、雪いと高し。強ひて御室にまうで、拜み奉るに、つれなく、いと物悲しくておはしければ、やゝ久しく侍ひて、古の事など思ひいでしきこえけり。さても侍ひてしが、なと思へど、おほやけの事どもありければ、え侍はて、夕ぐれにかへるとて、忘れれば、夢かと思ふ思ひきや、百瀬  
雪踏み分けて君を見むとは、  
とてなむなく、来にける。

(伊勢物語)

島崎藤村  
名は春樹、長野縣の人、明治五年生、詩人・小説家

九 藤村の言葉

島崎藤村

誠 實

すべてのものは過ぎ去りつゝある。その中であつて多少なりともまことを残すものこそ眞に過ぎ去るものと言ふべきである。

美を積むもの

心貧しきが故に善を積む。愚なるが故に善を積む。悲しみ深きが故に善を積む。さう言つて善を積まうとした人達もあつた。

朝 夕

東に起き、西にのぞみ、南に居り、北に思ふ。

皇太子へ  
春樹

九 藤村の言葉



神の力を得よ  
地を始めて行く  
地を思ふ

涙 と 汗

涙は悲哀を癒し、汗は煩悶を和らげる。涙は人生の慰藉であ  
汗は人生の報酬である。

先づ自己に力を得よ **依頼等捨テ、自力更生**

外界のことを思ひ煩ふ勿れ。先づ自己に力を得よ。さすれ  
ば外界のことは自然と解決がついて行く。

先入主

先入主といふこと

吾等が物を観る場合には、多くは先人からのある定つた観か  
たに據るものであるから、さういふ先入主となつた観かたを離  
れて物を観るとなると、必ずそこには何人も未だ氣付かずに見  
逃して置いたことの發見せらるるものである。  
かういふ立脚地から、世の中に同じ物は二つと無い、そこを見  
定めなければならぬ、と説いた人もある。

物を観るといふことに依つて、自己の革命を企て、新しい進路  
を開いて行つた人は少くない。不斷の努力を續けた観察者の  
生涯に對しては、吾等は少からぬ尊敬の念を持つ。そして、さう  
いふ態度をもち續けることの、いかに難いものであるかを想は  
ざるを得ない。

恥

弱いのが決して恥ではない。その弱さに徹し得ないのが恥  
だ。

まづ身を起せ

心を起さうと思はばまづ身を起せ。

生

「生」をして趨くまゝに趨かしめよ。

(藤村の諸感想集に據る)

藤井紫影  
名は乙男、兵庫縣の人、明治元年生、文學博士、京都帝國大學名譽教授。  
元和偃武

蟄伏

目もあやに

元祿  
東山天皇の御代。(三三  
一—三三九)

一〇 元祿の三文豪

藤井 紫影

江戸時代に於ける文化の興隆を説く者先づ指を元祿に屈す。實にや、元和偃武よりこゝに七十年、世は兵革の響を忘れて、漸く泰平の光に浴し、草創蕪雜の機運は、正に轉回して整理修飾の時代となり、數十年間、人々の曾奥に蟄伏鬱積したりし精神的需要は、種々の形態を取りて、今や、春風膏雨の時を得、争うて、蕾を破り、千紫萬紅目もあやに咲きいでぬ。

元祿は、文藝復興の時代にして、また、その發生の紀元たり。かくて、その新に起れるものは勿論、再び興りしものも、皆、清新の風に富み生氣潑刺たり。元祿文藝の貴ぶべきは、即ちこの點にあり。時代の要求は、文學技藝に、この約束を奉ずべく、諸道の豪傑を指麾驅使したるものの如し。

下河邊長流

大和國(奈良縣)の人、國學者、貞享二年(三三三)歿、年六十三。

契沖阿闍梨

大阪圓珠庵の住僧、國學者、元祿十四年(三三六)歿、年六十二。

戸田茂睡

江戸(東京市)の人、歌人、寶永三年(三三六)歿、年七十八。

伊藤仁齋父子

山城國(京都府)の人、共に儒者、仁齋は寶永二年(三三六)歿、年七十九。

萩生徂徠

江戸(東京市)の儒者、享保十三年(三三〇)歿、年六十三。

菱川師宣

安房國(千葉縣)の人、浮世繪畫家、元祿年間歿。

國學の下河邊長流、契沖阿闍梨、戸田茂睡、儒學の伊藤仁齋父子、萩生徂徠、繪畫の菱川師宣、英一、蝶尾、形光、琳など、孰れも皆この特色を發揮したる大家、鉅匠ならざるなし。

この時に方つて、中流以下の社會を相手とする俗文壇に三偉人を出せり。三偉人とは誰ぞや。浮世草紙の井原西鶴、俳諧の松尾芭蕉、淨瑠璃本の近松門左衛門是なり。この三人、時を同じうして、各、特殊の方面に旗幟を翻し、名聲籍々として天下を風靡せり。西鶴が浮世草紙に得意の諸作を出しし、貞享三年は、芭蕉が貞門談林の舊寶に安んぜずして、古池の一句に正法眼を開き、近松が竹本義太夫の爲に始めて出世景清を作りし時なり。この時、西鶴四十五、芭蕉四十三、近松三十四。年齢事業、兩つながら西鶴を以て先輩とすべきも、爾來、彼の筆を武家物、町人物に轉じたるより、觀れば、この三人が、期せずして轉化の時期を同じくせ

英一蝶

本姓多賀、大阪の人、  
畫家、享保九年(三六  
四)歿、年七十三。  
竹本義太夫  
竹本筑後少掾、攝津  
國(大阪府)の人、義  
太夫節の元祖、正徳  
四年(二七四)歿、年六  
十四。

騷客

西山宗因

肥後國(熊本縣)の人、  
談林派俳諧の祖、天  
和二年(三三四)歿、年  
七十八。

るも奇なりといふべし。

蕉風俳諧の趣味は幽寂間適を旨とす。浮世の利慾に眼を光  
らし、俗界の歡樂に足を空なる京阪の町人、いかでかこれに満足



近松門左衛門

すべき。芭蕉が江戸を中心  
として、風化を四方に及ぼし  
たるも、その門徒は、多く士林  
桑門の騷客より成れり。さ  
れば、彼をして、蕎麥と俳諧と  
は上方の風土に適せずと放  
言せしめたるも、亦故なきに  
非ず。談林風は、談諧を旨とし、新奇を競ひ、俗耳を喜ばしむるこ  
と、遙かに蕉風の上にある。京阪は、西山宗因起りてより、久しく  
その根據地たりしも、流行時移りて、漸く世人の厭倦を招けり。

驍將

宇治加賀掾

本姓徳田、和歌山の  
人、淨瑠璃節の能手、  
正徳元年(二七二)歿、  
年七十七。

輕雋

西鶴、談林の驍將を以て、浪華の重鎮たり。好んで人事を詠じ、小  
説的著想の佳句、往々誦すべきものあれども、西鶴の西鶴たる本  
領は浮世草紙にあり、近松も亦俳諧を西鶴に問ふと稱せらる。  
されど、その句殆ど傳らず。この二人は、もとより芭蕉と俳諧を  
比すべきに非ず。唯、二人者の著作中、その趣味文法に於て、多少  
俳諧の影響あるを注目すべしと爲す。西鶴、宇治加賀掾のため  
に「唇の作あれど、淨瑠璃に於て、近松の敵に非ざるや言ふを俟た  
ず。この三子者各、獨特の長技を揮うて、こゝに、絢爛たる元祿文  
藝の花は東西の野に咲きみちぬ。芭蕉の清淡、西鶴の放縱、近松  
の溫雅、その人となりを異にするに隨うて、文もまた高雅、輕雋、秀  
潤の差あれども、俱に一代の粹たるを失はず。元祿の文壇、國學  
に儒學に、豪傑の士乏しからざりしも、この三人、微なかりせばその  
落寞想ひ見るべきなり。

(近松門左衛門)

井原西鶴

大阪の人、小説家、  
元禄六年(一六九一)歿、  
年五十二。

鼠の文使ひ

井原西鶴

水風呂

蒸風呂に對して普通  
の湯風呂のこと。

穿鑿  
利發顔

穿鑿物事と

毎年煤拂は極月十三日に定めて、旦那寺の笹竹を祝物とて月の數十二本もらひ、煤を拂ひての跡を取り、葺屋根の押へ竹に使ひ、枝は箒に結はせて、塵も埃も捨てぬ随分細かなる人ありける。過ぎし年は十三日に忙しく、大晦日に煤はきて、年に一度の水風呂を焚かれしに、五月の粽のから、盆の蓮の葉まで段々に溜め置き、湯の沸くに違ひはなしとて、細かなる事に氣を附けて、世の費穿鑿人に過ぎて利發顔する男なり。

同じ屋敷の裏に隠居建てて母親の住まれしが、此の男生まれたる母なれば、其の吝き事限りなし。塗下駄片足なるを、水風呂の下へ焚く時、つくづく昔を思ひ出し、まことに此の木履は、我十八にて此の家に嫁入せし時、雜長持に入れて來て、それから雨に

むかはり

恵方棚

歳徳神を祭る棚。

も雪にも履きて、齒のちびたるばかり五十三年になりぬ。「我一代は一足にて埒を明けむと思ひしに、惜しや片足は野良犬めにくはへられ、はしたになりて是非もなく、今日煙になす事よ。」と、四五度も繰言をいひて、其の後釜の内へ投げ捨てられ、今一つ何やら物思の風情して、涙をはらくとこぼし、世に月日のたつは夢ぢや。明日は其のむかはりになるが、惜しい事をしました。」と、しばし嘆のやみ難し。

折節、近所の醫者水風呂に入られしが、先づ以てめでたき年の暮なれば、御嘆をやめさせたまへ。それは元日に何人の御死去なされた。」と尋ねられしに、「いかに愚痴なればとて、人の生死をそれ程に嘆く事ではござらぬ。私の惜しむは、去年の元日に堺の妹が禮に參つて年玉銀一包くれしを、何程か嬉しく、恵方棚へ上げ置きしに、其の夜盜まれました。それもや勝手知らぬ者の取

る所ではござらぬ。其の後色々の願を諸神へ懸けますれども其の効もなし。又山伏に祈を頼みましたれば、此の銀七日の中に出でますれば、壇の上なる御幣が動き、御灯が次第に消えま



井原西鶴

が、大願の成就せし驗。』といひける。案のごとく、祈最中に御幣動き出で、燈火微になりて消えける。これは神佛の事、末世ならず有難き御事と思ひ、お初穂百二十上げて、七日待てども此の銀は出でず。さる人に語れば、それは盗人に追銭といふものなり。今時仕懸山伏とて、様々護摩の壇に繰いたし、白紙人形に土佐踊さすなど、此の前松田といふ放下師がしたる事なれども、皆人賢過ぎて結句近き事にはまりぬ。其の御幣の動き出づるは、立て置きた

土佐踊  
土佐の盆踊の踊方。  
放下師  
手品、品玉などつかふ藝人。

岩座

佛像の臺座の、岩石のやうな形したもの。

獨鈷



錫杖



井原西鶴筆

鯛は花は見ぬ里も有けふの月

砂時計



胸算用

る岩座に壺ありて、其の中に鯛を生け置きけり。珠數さらくと押揉んで、東方に西方にと獨鈷錫杖にて佛壇を荒けなく打てば、鯛が是に驚き上を下へと騒ぎ、幣串に當れば暫く動きて、知らぬ目からは恐ろし。又燈明は、臺に砂時計を仕懸け、油を抜き取ることぞ。』と、此の物語を聞くから、いよく損の上の損をいた



井原西鶴筆

した。我此の年まで錢一文落さずに暮らせしに、今年の大晦日は、此の銀の見えぬ故胸算用違ひて、心がかりの正月をいたせば、萬の事面白からず。』と、世の外聞も構はず、大聲上げて泣かれければ、家内の者ども興を覺し、我々疑はるる事の迷惑と、心に諸神に祈誓を懸けけり。

大方、煤もはき仕舞ひて、屋根裏まで検めけると、棟木の間に杉原紙の一包を探し出し、よく見れば、隠居の尋ねらるる年玉銀に紛れなし。「人の盗まぬ物は出ますぞ。さる程に悪い鼠め。」といへば、お祖母中々合點せられず、「是程遠歩きする鼠を見た事なし。頭の黒い鼠の業是からは油断のならぬ事。」と、疊叩きて喚かれければ、醫者水風呂より上り、かゝる事には古代にも例あり。人皇三十七代孝徳天皇の御時、大化元年十二月晦日に、大和國岡本の都を難波長柄の豊崎に遷させ給へば、和州の鼠も連れて宿替しけるに、それの世帶道具をば運ぶこそ可笑しけれ。穴をくろめし古綿、鳶に隠るる紙襖、猫の見附けぬ守袋、鼯の道切る尖り杭、枴落じのかひづめ、油火を消す板切れ、鯉節引く挺子枕、其の外嫁入の時の熨斗、ごまめの頭、熊野参りの小米苞まで、二日路ある所をくはへて運びければ、まして隠居と母屋、

大化元年

紀元一三〇五年

岡本の都

奈良縣高市郡飛鳥村  
にあつた。舒明・齊明天皇の皇居。

和州

和泉國（大阪府）

かひづめ

枴落しの落ちぬやうにかひ置く棧。

熊野参

紀州（和歌山縣）の熊野權現詣。

長崎水右衛門  
獸に種々の種を仕込んで見世物にしたので有名な人。

不祥

僅かの所引くまじき事にあらず。」と、年代記を引いて申せど、中同心いたされず。「口賢くは仰せらるれども、目前に見ぬ事は實にならぬ。」と申されければ、何とも詮方なく、やう／＼案じ出し、長崎水右衛門が仕入れられたる鼠使の藤兵衛を雇ひに遣し、「只今あの鼠が、人のいふ言を聞き入れて様々の藝盡くし。さあ、是で餅買うて来い。」と、錢一文投げ遣れば、錢を置いて餅くはへて戻る。「何と／＼我を折り給へ。」といへば、是を見れば、鼠も包金を引くまじき物にあらず。さては疑晴れました。さりながら、かゝる盗心ある鼠を宿らせたる不祥に、まん丸一年此の銀を遊ばして置きたる利銀を、屹度母屋から濟まし給へ。」といひ懸り、一割半の算用にして、十二月晦日の夜請取り、眞の正月をするとして、此の祖母獨寢をせられけり。

世間胸算用  
五卷、井原西鶴の小説集。

（世間胸算用）

松尾芭蕉

名は宗房、伊賀國(三重縣)の俳人、正風の祖、元祿七年(二三三)歿、年五十一。

月日は云々

天地ハ萬物ノ逆旅ニシテ、光陰ハ百代ノ過客ナリ。李白(春夜宴桃李園序)

去年

元祿元年。(三四六)

白河の關

創置の年代不明、址は今岩代國(福島縣)西白河郡古關村大字旗宿の南方關山にある。

道祖神

杉風

輕屋市兵衛、芭蕉の門人。

別墅

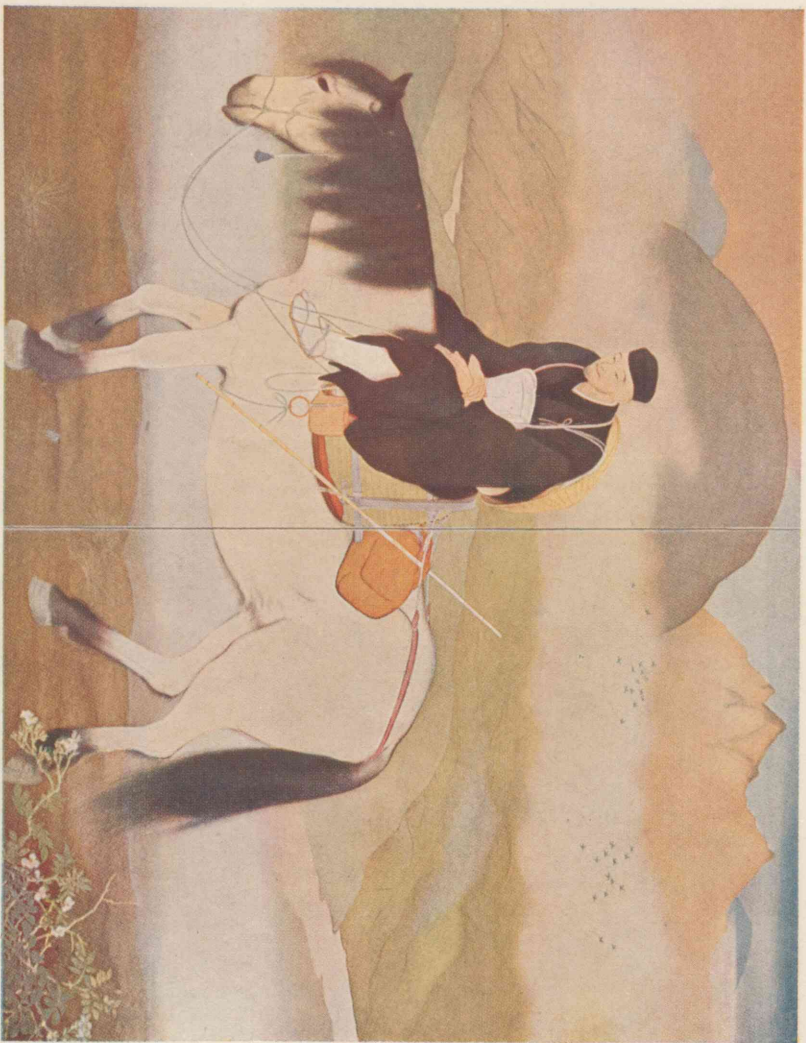
江戸(東京市)深川六間堀にあつた。

三奥の細道

松尾芭蕉

首途

月日は百代の過客にして、往きかふ年もまた旅人なり。船の上  
に生涯を浮かべ、馬の口捉えて老を迎ふる者は、日々旅にして  
旅を棲處とす。古人も多く旅に死せるあり。予も何れの年よ  
りか、片雲の風に誘はれて漂泊の思やまず、海濱にさすらへ、去年  
の秋江上の破屋に蜘蛛の古巢を掃ひて、やゝ年も暮れ、春立てる  
霞の空に白河の關越えむと、そぞろ神のものにつきて心を狂は  
せ、道祖神の招きにあひて取る物手につかず、股引の破れを綴り、  
笠の緒つけかへて、三里に灸すうるより、松島の月先づ心にかゝ  
りて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移る。  
草の戸も住みかはる代ぞ雛の家



(筆浦九田野)

蕉芭人旅

昔酒

上野  
今東京市下谷區、上野公園のあるところ。

谷中  
上野の西北。  
千住  
東京市足立區。

矢立



吳天に云々  
吳楚、支那の昔の國名、都から遠い、吳天は遠い空の意。  
早加  
今は草加、武藏國(東京府)北足立郡、奥州街道にあたる。

彌生も末の七日、曙の空朧々として、月は有明にて光をさまれ

るものから、富士の嶺かすかに見えて、上野谷中の花の梢またいつかはと心細し。陸じきかぎりには宵より集ひて、船に乗りて送りて、千住といふ所にて船をあがれば、前途三千里の思胸に塞がりて、幻の巷に離別の涙をそぐ。  
行く春や鳥啼き魚の眼は涙

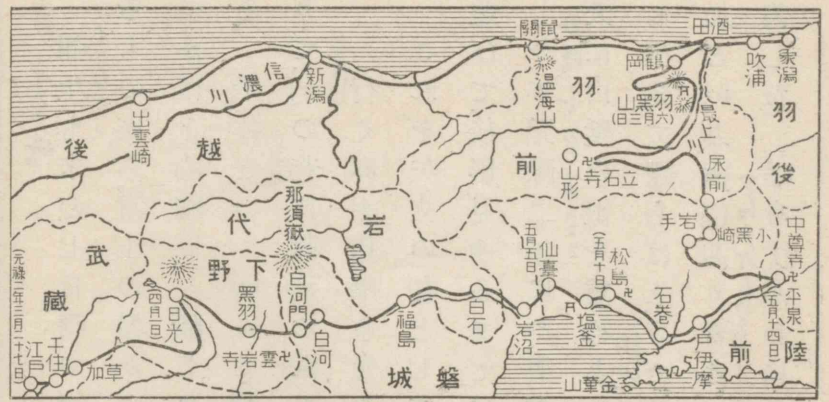
これを矢立の初として、行く道なほ進まず。人々は途中に立並びて、後影見ゆるまではと見送るなるべし。

今年元祿二年にや、奥羽長途の行脚たゞ假初に思ひ立ちて、吳天に白髪かみの恨を重ぬといへども、耳に觸れて未だ目に見ぬ境、若し生きて還らばと、さだめなき頼みの末すえをかけて、其の日漸く早加といふ宿に迎り著きにけり。瘦骨の肩にかゝれるもの、先づ苦しむ。唯身すがらにと出て立ち侍るを紙子一具は夜の防ぎ、



さり難し  
さし難し  
さし難し  
わりなし

いかで都へ  
たよりあらばいかで  
都へつげやらむ、今  
日白河の關は越えぬ  
と。平兼盛（拾遺集）  
三關  
風・白河・勿來を東國  
の三關といふ。  
風騷の人  
清輔  
藤原清輔、二條天皇  
の御代の歌人。治承  
元年（一一七〇）歿。

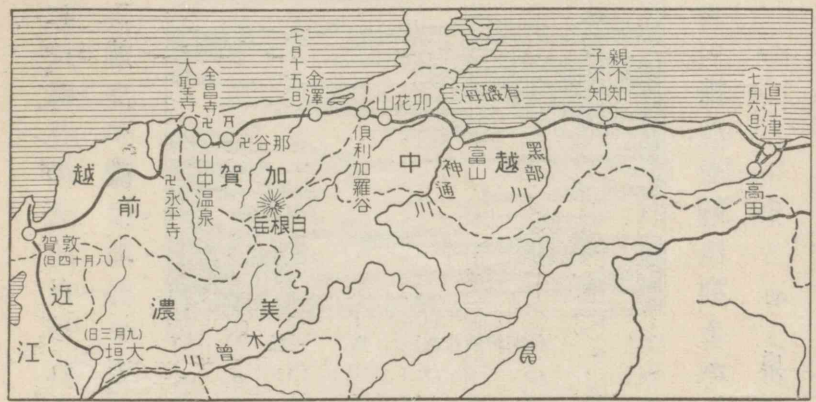


浴衣雨具墨筆の類あるはさり難き餞儀  
などしたるは、さすがに打捨てがたく  
て、路次の煩となれるこそわりなけれ  
まろのほし 白河の關  
心もとなき日數かさなるまゝに、白  
河の關にかゝりて旅心さだまりぬ。  
いかで都へと便求めしも理なり。中  
にも此の關は三關の一にして、風騷の  
人、心をとむ。秋風を耳に残し、紅葉  
を俤にして青葉の梢なほあはれなり。  
卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、  
雪にも越ゆる心地ぞする。古人冠を  
正し、衣裳を改めし事など、清輔の筆に

會良  
芭蕉の門人、河合會  
良、此の旅行の同伴  
者である。

洞庭  
支那湖南省の北にあ  
る大湖  
西湖  
支那浙江省にある。  
浙江  
支那浙江省に在る、  
一名錢塘江、海潮の  
奇を以て知られてゐ  
る。

大山祇

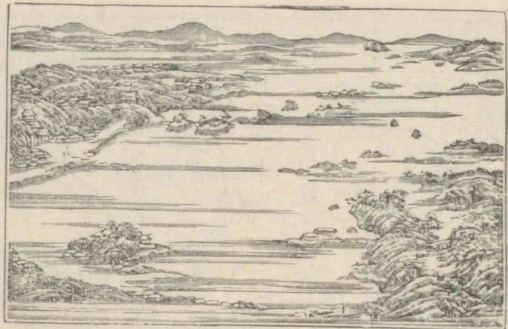


もとゞめ置かれしとぞ。  
卯の花をかざしに關の晴著かな  
會良  
松島は松島、島  
抑ことふりにたれど、松島は扶桑第  
一の好風にして、凡そ洞庭西湖を恥ぢ  
ず。東南より海を入れて、江の中三里、  
浙江の潮を湛ふ。鳥々の數を盡くし  
て、歛つものは天を指し、伏すものは波  
に匍匐ふ。或は二重にかさなり、三重  
に疊みて、左に別れ、右に連る。負へる  
あり、抱けるあり、兒孫を愛するがごと  
し。千早振神の昔、大山祇のなせる業  
し。

雲居禪師  
攝津國(大阪府)勝尾寺の僧、後、瑞巖寺の住職となる。

旅寝することぞ、  
らるれ

平泉  
陸中國(岩手縣)西磐井郡



(傳詞繪翁蕉芭) 島 松

にや、造化の天工いづれの人か筆を揮ひ詞を盡くさむ。  
雄島が磯は地つゞきて海へ成り出でたる島なり。雲居禪師の別室のあと、坐禪石などあり、はた松の木蔭に世を厭ふ人も稀々見え侍りて、落穂松笠など打煙りたる草の庵閑に住みなし、いかなる人とは知られずながら、先づ懐かしく立寄る程に、月海に映りて晝の眺また改む。江上に歸り宿を求むれば、窓を開き二階をつくりて、風雲の中に旅寝することぞ怪しきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほとゝぎす

平泉

曾良

雉兎・芻蕘

石の巻  
陸前國(宮城縣)牡鹿郡

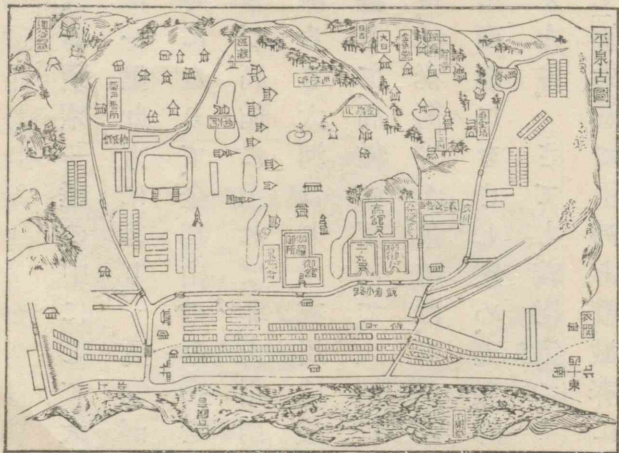
黄金花咲く  
すめろぎの御代榮えむとあづまなる、みちのく山にこがね花さく。大伴家持(萬葉集)

金華山  
陸前國(宮城縣)牡鹿半島の東南端にある島

袖の渡  
陸前國(宮城縣)桃生郡橋浦村

尾駮の牧  
同牡鹿郡(宮城縣)稻生村の字。  
眞野の萱原  
同上。

十二日、平泉と志す。姉齒の松、緒絶の橋など聞き傳へて、人跡稀に、雉兎芻蕘の往きかふ道そこともわかず、終に道ふみ違へて、石の巻といふ湊に出づ。「黄金花咲く」と、詠みて奉りたる金華山海上に見渡し、數百の廻船入江に集ひ、人家地を争ひて、竈の煙立ち續きたり。思ひかけずかゝる處にも來れるかなと、宿からむとすれど、更に宿かす人もなし。漸く貧しき小家に一夜を明して、あくればまた知らぬ道迷ひ行く。袖の渡尾駮の牧眞野の萱原などよそめに見て、遙かなる堤を行く。



平泉古圖

長沼 陸前國(宮城縣)登米郡新田村、新田沼、戸伊摩、同郡登米町。

三代

藤原清衡・基衡・秀衡、秀衡が跡、平泉館址。

金鷄山

秀衡の作った平泉鎮護の山、形を富士山に擬し雌雄の金鷄を山上に埋めた。

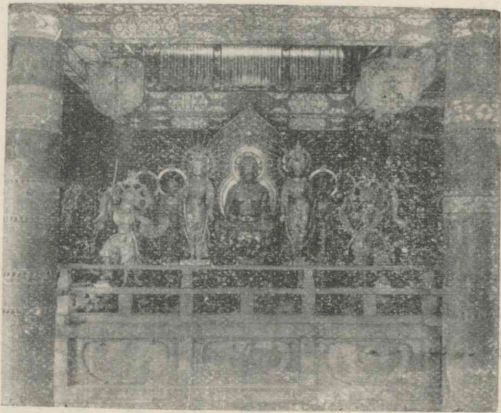
高館

衣川館、義經の居館、泉が城

泉三郎忠衡の居館。

國破れて支那唐の杜甫の詩。

心細き長沼にそうて、戸伊摩といふ處に一宿して平泉に到る。其の間二十餘里と覺ゆ。



金鶏山の堂内部分

の城に籠り、功名一時の叢となる。「國破れて山河あり、城春にして草青みたり。」と、笠打敷きて、時の移るまで涙を落し侍りぬ。

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里此方にあり。秀衡が跡は田野になりて、金鷄山のみ形を残す。まづ高館に上れば、北上川南部より流るる大河なり。衣川は泉が城を繞りて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡等が舊跡は、衣が關を隔てて南部口をさし、堅め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣選つてこ

經堂 藤原清衡建立、建武四年(一九七)修理す。

象瀉

羽後國(秋田縣)由利郡鳥海山の西北麓、其の海岸は其の後文化元年(二四六)鳥海山の噴火によつて埋没した。

方寸

酒田 羽前國(山形縣)飽海郡

闇中摸索

夏草やつはものどもが夢の跡

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像をのこし、

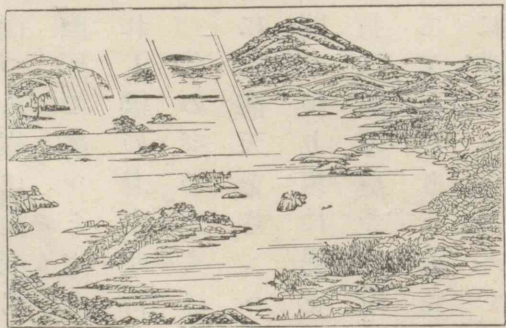
光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散り失せて、珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢となるべきを、四面新に圍みて、藁を覆うて風雨を凌ぎ、暫く千歳の記念とはなれり。

五月雨の降りのこしてや光堂

象瀉

江山水陸の風光數を盡くして、今象瀉に方寸を責む。酒田の湊より東北の方、

山を越え、磯を傳ひ、砂を踏みて、其の間十里、日影や、傾ける頃、汐風眞砂を吹き上げ、雨朦朧として鳥海の山隠る。闇中に摸索し



象瀉 (芭蕉翁繪詞傳)

て雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色亦たのもしと、蟹かにの苦屋くわに膝を容れて、雨の霽るるを待つ。

其の朝、天よく晴れて、朝日花やかにさし出づる程に、象鴻しやうこうに船を浮かぶ。先づ能因島に舟をよせて、三年幽居の跡をとぶらひ、向うの岸に舟を上れば、花の上漕ぐと詠まれし櫻の老木、西行法師の記念をのこす。寺を干満珠寺といふ。此の寺の方丈ほうぢやうに坐して簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をさゝへ、其の影映りて江にあり。西はむやゝの關路を限り、東に堤を築きて、秋田に通ふ道遙かに、海北に構へて、浪打入るる處を汐越といふ。江の縦横一里ばかり、倂松島に通ひて又異なり。松島は笑ふが如く、象鴻はうらむが如し。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂をなやますに似たり。

象鴻や雨に西施がねぶの花

(奥の細道)

花の上漕ぐ

きさかたの櫻は波にうづもれて、花の上こぐあまのつり舟

(西行法師)

方丈

むやゝの關

羽前國(山形縣)南村山郡に在る。

西施の住み

西施

支那周代の人、吳王の寵姫。

奥の細道

芭蕉の奥羽紀行。

一三 山路きて

山路きてなにやらゆかし堇草

松尾芭蕉

草臥れて宿かるころや藤の花

同

旅人と我が名よばれむ初時雨

同

此の道や行く人なしに秋の暮

同

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮

同

長松が親の名で來る御慶かな

志田野坡

沙魚つるや水村山廓酒旗の風

服部嵐雪

陽炎や壁のぬれたる夜の雨

森川許六

水鳥や向うの岸へつうい〜

廣瀬惟然

元日や家に譲りの太刀佩かむ

向井去來

しかられて次の間にたつ寒さかな

各務支考

白魚をふるびよせたる四つ手かな

榎本其角

時鳥鳴くや湖水のさゝ濁り

内藤丈草

鶯や下駄の齒につく小田の土

宮城凡兆

近松門左衛門

本名は杉森信盛、號は巢林子、淨瑠璃作家、享保九年(二六四)歿、年七十二。

祐成

曾我祐成、河津祐泰の子、小字一萬、建久四年(二八三)弟時致と共に裾野の狩場に父の仇を報じた、歿年二十二。

笠子竹



時致

曾我時致、兄と共に父の仇を報じ、捕へられて斬らる、歿年二十。

四

曾我會稽山

近松門左衛門

名に高き富士の裾野の御狩の御遊、鎌倉の騒動にて、急ぎ歸御あるべしとの時刻も雨に事延びて、假屋の騒もいつしかに、辻の篝も影薄く、晝の疲の手枕に、短き夜半を鐘の聲、夢より夢を結びける。

時節よしと曾我殿原出で立つ祐成が装束は、母上より賜はりし、秋の野に草盡くし縫うたる練貫の單衣、村千鳥の直垂の袖を結んで肩にかけ、黒鞘卷の太刀を佩き、竹子笠の紐強く、上に下部の青合羽陣松明に道照らさせ、先に進めば、五郎時致、これも母より賜はつたる、白綾に鶴の丸縫うたる袷、揚羽の蝶の直垂、赤木の柄の腰差、源氏重代友切丸、肩にうちかけ紙合羽、しめたる笠の怯れじと、後に續いて出て立つたり。

浦の入道殿  
源範頼

祐經  
工藤祐經、伊東祐次  
の子

仰せにや及ぶべき

罷りなる

飲うで

「いかに時致、母の御恩を徒に、今宵敵を討たずむば、不孝といひ世の人口、生きたる甲斐もあるまじきに、天の恵か降る雨に御寮の御立ちは延引す。狩場の用意も事静まる。殊には浦の入道殿の貸し給はつたるこの割符、頼朝公の膝元へも、通路自由と聞くなれば、祐經を討つは案の内。雨はいつも降りながら、今宵の雨ぞ身には染む。討死せしと聞えなば、思ひ切つたる御心にも、母の歎はいかばかり悲しさよ。」と涙ぐむ。「仰せにや及ぶべき、祐經は籠中の鳥、網代の魚、やはか洩し候べき。おそらくはこの時致、天魔破旬に出合ふとも、ちつとも怯まぬ魂。今宵の雨は身にかゝり、ぞつこん徹つて、わぢく」と物悲しう罷りなる。敵に出合ひ働かば、とこころの死を遂げむも計られず。最後の盃一つ飲うで給はれ。」と、腰に付けたる懸烏帽子に、降り來る雨を受け溜めて、祐成が手に渡せば、なう七度結びて兄となり、六度契

本田の次郎  
島山重忠の臣

①

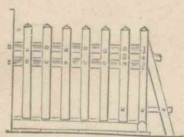
りて弟となると傳へ聞く。死に變り生き變り兄弟の縁は切るまじ。」と、さらりと乾して差しければ、時致取つて押戴き、兄は親にて候へば、母上の御盃もこれに籠り、天の甘露、仙家の醬、この酒に勝らむや。」と、受けて飲みけるその中に、五月雨のいつか一頻りを、だやみて、空、さりげなく清々と、北斗の光鮮やかに晴れ渡る。かゝると、るに假屋俄に騒ぎ立ち、お先手は發足の御觸あり、馬よ鞍よと、轉けば、兄弟彌、氣も急かれ、祐經が假屋とてもさぞあらむ、これまで忍びし甲斐もなく、この雨の降り止む事、神明にも見放され、よつく武運に盡きしかと、拳を握り齒を鳴らし、虚空を睨んで立つたるところに、秩父の執權本田の次郎近經、小具足に身を固め、本陣の夜廻りしてけるが、曾我殿原と見るよりも、近々と歩み來る。  
兄弟誰ぞ。」と、咎むれば、波に揺らるる沖津船、知る邊の磯は此

重忠  
畠山重忠。

の方ぞ。」と、囁く聲に祐成はつと嬉しく、重忠公の御情、又は御身の御懇情、この度に限らねども、御禮申す事もなく、禮儀知らずとや思されむ。今宵年來の大望達せむと存ずるところ、俄に雨晴れ、假屋々々は出足の用意、この騒には覺束なし、このまゝ歸つて、いつの時をか期すべき。無二無三に切込んで、兄弟屍を晒す所存。重忠公へ一生積る御禮は、貴殿の執成頼み入る。」と言ひければ、兄弟の耳に口を寄せ、氣遣ひばしし給ふな。祐經は明日君の御馬の御供。それゆゑ假屋も寢靜まる。此方へ。」靜かにと、道の案内の杖柱、嬉しさたぐひはなかりけり。「これこそ祐經が臥床なり。心靜かに本意を遂げ、會稽の恥を雪がれよ。」と、いとねんごろの詞に縋り、御案内のほど五百生の體を焼くとも、いかでか報じ盡くすべき。随つて通路のこの割符、蒲の入道殿より密かに拜借申ししかど、御切腹のあとなれば、返辨申さむや

氣遣ひばし

伊東  
重忠、伊豆の豪族、  
河津次郎と稱した。



駒寄せ

うもなし。我々が死骸にあれば、蒲殿こそ御勘氣の伊東が末の曾我に與し、反逆の族よと、死後の虚名に御骸を瀆さむ事、御恩を却つて仇にて報ずる理。近經殿に預け置く。然るべく頼み存ずる。」と、二枚の小札を手に渡せば、尤もく、近經に任されよ。主人重忠悪しくは計らひ申されまじ。老母の事もゆめゆめ鹿略候まじ。今暫くと存ずれども、役目なれば知らぬ顔。弓矢の禮儀これまで。」と、本田は假屋に入りけり。今は何をか期すべきと、兄弟合羽抛り捨て、本田が教へし敵の假屋はこれなりと、木戸、駒寄せを飛び超え、兄弟莞爾と打笑ひ、天にもものぼる心地にて、難なく臥床に討つて入る。次に臥したる宿直の侍、足音に目を覺し、すは盗人よ。」と呼ばはつて逃げ出づる。假屋々々に聞きつけて、そりや盗人よ、御立ちよ。」と、騒の上に又混亂、合圖響かす大鼓、鉦、かんく、どんく、どんくさい、

又雨が延びて来た、お立ちが降ると入るもあり、雨の足音さつさつさ、人の足音どろ／＼、右往左往にもてかへす。その隙に兄弟は、敵工藤祐經を思ひのまゝに討ちおほせ、門外に走り出て、袂を絞つて喉を濕し、勢ひ猛に立つたりし、心の内こそうれしけれ。

かくて二人等しく大音上げ、伊豆の國の住人伊東の次郎祐親が孫、河津の三郎が二人の子、曾我の十郎祐成、同じく五郎時致、親の敵工藤左衛門祐經を討ち留めたり。頼朝公の御内に弓取はなきか。折り合ひて討ち留めよ。」と呼ばはつて、邊を睨んで控へたり。暗さは暗し、雨は降る、假屋々々にすは夜討と、弓一棧、太刀一振に、五人三人取附いて、我よ人よと奪ひあひ、繋ぎ馬に鞭打つて、遅しとあせるところもあり、鎧にすべり、兜に躓き、小手を臚當、草鞋を笠上を下へと犇けば、それ松明出せ。」と呼ばはれば、二

千軒の假屋より、箆、鞆、蓑、竹笠、傘、箆に至るまで、火を付けて投げ出す。裾野の暗はたちまちに、百千の朝日影、一度に照らす如くなり。騒の中より、名乗り掛け、切つて出づれば、兄弟は小柴垣を小楯に取り、入れ替へ、名乗替へ、火花を散らして雨まじり、揉み立て、戦ひける。腕首切られて引くもあり、頬先、肩先、尻こぶた、弓手の太股、馬手の足首、矢場に切られて死するもあり。されども兄弟薄手も負はず、血氣に進む時致は、假屋の人種絶さむと、御所の間近く切つて入り、祐成は柴垣の影に息をぞ休めける。

假屋々々の松明も、降りくる雨に打消され、東西暗き木蔭より、緋緘の鎧著て、二尺餘の打刀、三尺五寸の太刀横たへ、四十足らずの武者一人、のつさ／＼と動き出て、抑、これは先年上意を蒙り、富士の人穴に入つて、地獄の底まで名を顯し、この度の狩倉には、虎



仁田の四郎  
伊豆國(靜岡縣)の人、  
頼朝の臣。

ごめり

より猛き猪を乗り留め、日本無雙と譽を一天に輝かす仁田の四郎忠常とは我が事。物々し曾我殿原、思ふ敵は祐經一人、木の葉武者五十百切つたると何の益かある。仁田の四郎が手に懸り、御勘氣の者の末孫と、獄門の恥が受けたくば、いざ来いやつ」とぞ罵つたる。

「おゝよい敵ごめり。仁田なればとて必ず勝つに極らず。人穴の地獄の鬼猪など相手にしたとは違ふべし。十郎祐成手竝を見よ。」と、打つて懸る。「えゝ無分別者、是非なし。」と、閃く太刀影、雨夜の星、電火を飛ばして切り結ぶ。更に勝負もなかりしところに、華やかに鎧うたる武者一人、坂東聲を打揚げ、あら穢らはし。我が名を盗む曲者、高名を貪るか。伊豆の國の住人、仁田の四郎忠常とは我が事。見參せむ。」と呼ばはつたり。祐成飛退り、六十餘州は廣けれども、頼朝の幕下に仁田ならで武士は

悼はいし  
悼はいし

無きか。あら仰々し。瘦浪人、一人か二人討たむとて、彼も仁田、此も仁田、にたゞしき表裏者。二人ともに餘さじもの。」と打つて懸る。

「やあ後から出て仁田とは人眞似か、祐成は討たせじ。」と、懸け隔れば搔いくゞり、打付くれば懸け隔て、祐成一人に仁田は二人入り亂れて揉み合ひしが、陽に開いて打つ太刀を、後ろの仁田が陰に閉ぢ、受け流して裾を薙ぐ。祐成が馬手の高股膝口かけて切り落され、弓手ばかりの片足立、二打ち三打ち打つかひも、百手を碎く氣も弱り、犬居にどうと轉びしが、弟の時致はいづくにぞ祐成こそ打たれたれ。死出の山にて待つべきぞ。言ふ事もこれまで。さあいづれなりとも首を打て。臆れたるか。」と、聲懸くる。「いや討手の實否紛らはしく、黄泉の障も悼はしし。誠の仁田が面を見せ、名字盗みを面縛させん。松明出せ。」と呼ばは

二宮  
名は安清、頼朝の臣。

帝釋天  
佛法の守護神、十二  
天の一、東方の守護  
を掌る。

れば、忠常が下部ども提灯取つて差上ぐる。  
 仁田と仁田が顔さし合はせ、やあ二宮、以前仁田と名乗りつる  
 は御邊よな。さてあさましや。やい、兎死すれば狐これを悲し  
 むとは、同じたぐひに禍の來らむことを悼むゆゑ。元縁者の端  
 くれ、御咎の飛ばしる掛らん事を痛み、祐成を討つて一味せぬ身  
 の言分とは、はて能い思案。女房を離別せしは他人に成つて、兄  
 弟が力とならむ心底、尤もかくあるべき事と感心せしに、さては  
 立身のための離別か。御分別。由なき仁田呼ばはり、奇  
 怪さ。思はず、駈け合はせ、あつたら若者を手に懸けし、残念さよ。  
 と、大きに怒つて恥ぢしむる。  
 二宮からくと笑ひ、獼猴が帝釋天を嘲るとやら。己が足ら  
 ざるを以て、人の大智を計らむとして、却つて愚痴が顯はるる。  
 二宮が曾我を討たむと思はば、けふまで何の待つべきぞ。 愨か

功ある男子と思ひ、名字を借つて追ひ散らし、某他人になつたる  
 徳、天下晴れて匿ひ置き、時節を待つて世に出さむと、手を取つて  
 引かぬばかりにあしらへど、祐成たじろかねば詮方なし。手柄  
 はしたしこわくはあり、二宮が聲を後楯に駈け合はせ、溢れ幸ひ  
 指果報あつたら若者を思はず、討つて残念などは、義を知つた  
 武士の言ふこと。猪に乗つて高名とする、獵師風情の言分には、  
 過つた。と、言はせも敢へず、やあ小舅をしとめむとするほ  
 どの不仁もの。武士の情は存じも寄るまい。祐成が首は御邊  
 急ぎ討つて手柄にせい。いや人に貫うて手柄にする安清なら  
 ず。御邊討つて手柄にせい。いや二宮討て、仁田討て、三宮討て。  
 と責めかけられ、お、小舅の曾我を討つ刀、二宮は持ち合はせず。  
 これで討てれば御邊討て。と、祐成と切り合はせし太刀を、から  
 りと投げ出す。

忠常おつ取り、提灯に透して見れば、こは如何に、物打より切先まで刃を石にてたゞき潰し、うちみしやいだる槌同前。「む、最前よりこの太刀にて打つ眞似したるか。あつあ、頼もしとも優しとも、弓矢取る身の手本ぞや。雑言御免、二宮殿。」「それこそ互悪口御免、仁田殿。和殿の如く情ある友を持つたる五郎十郎。」  
 「御分の如く誠ある縁者を持つたる曾我殿原、一生花實も咲かざりし、天運の拙さよ。」と、二人不覺の落涙に、鎧の袖をぞしぼりける。

今を限りの祐成起き直り、縁者と申すも元は他人の二宮殿、よしみなき仁田殿。御芳志は五百生生き變り死に變るとも忘るまじ。御手に掛り討たる事、祐成はなんぼう果報の者。首討つてたべ、疾く〜。といへども二人涙に暮れ、さし俯いて居るところに、御所の方より聲々に、曾我の五郎時致、御前近く亂れ入

五郎丸  
 頼朝に仕へた小舎人。

り、御所の五郎丸が組み止め、御假屋安穩なり。」と、呼ばはる聲に、祐成、あれ聞き給へ、時致は召し捕られしとや。祐成が最期いかにと案ずべし。疾く首討つて、兄が最期清かりしと悦ばせてたべ。仁田殿頼み入る。南無阿彌陀佛、彌陀佛。」と、首さし伸べて目を閉づる。「名ざしの上は承る。御心易かれ。」と、太刀抜き持つて後ろにまはり、振上ぐれば、祐成が首は前にぞをちかたには、や曉の八つの鐘、鳥も啼く〜人も泣く。ねをなく千鳥の直垂に、首よ涙よ包みても、洩れて名高き富士の嶽、曾我兄弟が會稽山、骸は裾野に埋めども、譽は三穂の松の風、他の國まで吹きつたへ、昔語を今の世の、人のねぶりを覺しける。

(曾我會稽山)

久松 潛一  
愛知縣の人、東京帝國大學助教、明治二十七年生。

一五 山の文學と水の文學

久松 潛一

文學を土地の上から考へる時、都會の文學と田舎の文學とも分けられる。文學史の中心となる文學は都會で生まれた文學が多く、その點から遷都が文學に大きな變化を與へる原因となるのである。上代文學と中古文學との相違も、大和の都と山城の都との相違が與へる變化とも見られる。中世文學や近世文學への展開は遷都ではないけれども、幕府の設けられた土地といふ所から、自ら文化の中心ともなつたのである。しかし、もとより田舎の文學がなかつたのではない。萬葉集の東歌も田舎の文學であり、その他民謡などは田舎の文學である。かういふ都市や田舎の成立というても、土地の地勢等による事が多いのであるが、都や田舎の出来るのは人爲的な力を離れて、自然

山の文學と水の文學

上代文學

奈良朝時代の文學。

中古文學

平安朝時代の文學。

中世文學

鎌倉・室町時代の文學。

近世文學

江戸時代の文學。

東歌

萬葉集中卷十四・卷二十に收められてゐる東國の民謡。

東海道

京都より東京に至る大街道。

大和時代

大化革新の後より桓武天皇延暦十三年（西暦725）遷都の頃まで約百四十年間。

そのものを眺める時、山と水、深林と水の流域とがこの大きな區別となる。さうしてこの山と水とが文學の生まれる上に重要な要素となつて居るのである。

山國の人が意志が強く、力強い性質があるに對して、水邊の人は理性が發達して和らかであることは大體言はれる。信州の

山國と東海道の海岸とでは、その自然が與へる人間の性格の相違が生ずる。この點が文學の上にも大きな相違となるのである。そこで日本文學をも山の文學と水の文學との二つの立場から分ける事も出来るではなからうか。これは個人々々の作家の上にも言はれる事であるが、時代の文學をもこの何れかで一括することも出来るであらう。

日本文學史の上から見ると、上代の文學は山の文學と言はれる。大和は一體に水が乏しく又水が悪い。大和時代の幾度の

遷都も水を求めてであるとする見方もある。一應の道理はあるであらう。上代文學が素樸で力強いのも、山の文學と見て説明がつく。しかし人間の志向は山から水の方を求める。険しい山よりも和らかな水の方を憧憬あこがれるのは自然である。そこで水を求めてつひに山城に都を定められた。山城も山に圍まれて居る。しかしこゝには賀茂川の美しい水がある。水が加はると山も美しくなる。中古文學が和らかく優美であるのも、水の要素が多くなつたためである。平安時代の自然は水が常に多くの働をなして居り、遣水のかすかな音は女房（女房は女房の心を慰めるもの）の心を慰めるものであつた。中古文學は賀茂川から淀川の方へ進まうとした。しかし平安末期からの世の悲しさ寂しさが、再び水から山の方へ方向を變へさせた。山は孤獨なる心をもつ。世の悲しさから世をのがれようとする時、それは水から山へ隠れる。山隠りは次

平安時代

平安寛都(二四五)より源頼朝が鎌倉に幕府を開く(一一八五)まで約四百年間

淀川

源を琵琶湖に發し、淀の南を過ぎてから淀川と呼び、大阪平野に出で大阪市中を貫流し數派に分れて大阪灣に注ぐ。

の中世文學の主なる流をなすものである。隱者の文學はこれである。

隱者の生活にも種々ある。眞に現實を厭ふ所から、現實生活を離れて孤獨の生活へ入らうとする場合と、現實に對する理想や欲望のとげられない所から、現實生活から離れて隱者生活に入らうとする場合もある。しかし、現實を厭ふのも現實を眞に厭ふといふよりは、現實の愛が根柢となつて、その愛の實現せられざる所から世を厭ふに至るのである。そこに中世の隱者は消極的ではあるが、現實に對する愛も、それを否定しようとする心との間の相剋が見られるのである。山林の生活の間から現世を時々のぞんで居るのである。方丈記を見る時、日野山の奥から人戀ふる心が常に見られるのではないか。西行が山に入つても、また現實の世界へ歸つてくるのもそれである。

現實を厭ふところを  
この理想は、欲はあらず  
うらやま、どうある

方丈記

鴨長明の隨筆。

日野山

山城國。(京都市東山区)

木曾山 禪宗寺

西行の心は世も持てて  
その心は西行に於ては常住の心であつたのである。山より現

兼好法師家集  
吉田兼好の歌集。

頓阿

俗名は二階堂貞宗、  
歌人、元中元年(三〇四  
四)歿、年八十四。

草庵集

六卷、頓阿の歌集。

正徹

歌人、京都東福寺の  
僧、長祿二年(三二〇  
二)歿、年七十九。

心敬

歌人、連歌師、京都  
聖護院の住僧、文明  
七年(三三三)歿。

吉野山やがて出でじと思ふ身を  
花ちりなばと人やまつらむ

この心は西行に於ては常住の心であつたのである。山より現  
實に出ようとする心がある。これに比すると、兼好の徒然草に  
は世の中に對する執著から離れようとする心がある。山の境  
地に安住しようとするものがある。それは兼好法師家集と徒  
然草との間にも、その推移が見られるのである。もとより徒然  
草にもこの世の愛と、歡樂とを憧憬れる心と、それを否定しよ  
うとする心とがある。それは或説では矛盾といひ、或説ではより  
高き精神に於て統一されて居ると言ふ、自分はむしろ後者をと  
るものであるが、その心境こそは隱者の心と言ふべきである。  
この隱者の心こそ中世文學を支配するものである。それは頓  
阿の草庵集にも、正徹や心敬の心にも流れて居るものであつた。

王 石 日 〇 碧

道になさけふかき  
云々

幽栖

つらめいと

連歌書二卷、心敬の  
著、連歌道に關する  
私語の義、寛正二年  
(三二二)の作。

豊臣秀吉

尾張國(愛知縣)中村  
の人、關白、慶長三  
年(三三〇)歿、年六十  
三。

大阪城

大阪市東區にあり、  
天正十一年(三三四)築  
城。

潤達

それは孤獨なる心を深めた境地であつた。「道になさけふかき  
人の中に幽栖閑居を事として、常の會席にもまみえず、世に知ら  
れざる中に、名をえたるよりも見え侍る人おほしとなん。」(さ  
がめごと)といふ心敬の詞はかういふ心境の現れである。

山の文學はかくの如き孤高の精神を基調とする。中世文學  
の基調はこゝにあつたのである。さうして中世から近世に至  
る時に、山の文學から水の文學への推移が見られる。近世文學  
の中心は、第一に川を下つて大阪にその現れを見た。大阪に文  
學の花の開いたのは元祿時代であるけれども、すでに豊臣秀吉  
が大阪城を築いてこゝに移つた時に、山から水への移動が見ら  
れたのである。秀吉の潤達なる性格は桃山藝術を生み出した。  
それを日本に於ける文藝復興の現れと見るのも至當な見方で  
あらう。元祿文學は桃山藝術のそれと接續する。近松や西鶴

神祇を以てその中心とし、  
神を感ずるその心は、  
中世文學の中心は、  
さび 幽玄  
物まはれ

の文學を中世文學と比して異なる點は多いが、その明るいほが  
らかさにて大きな相違がある。山林から水邊へ出て來た文  
學である。これは芭蕉の俳諧に於ても同じ精神が見られる。  
芭蕉の俳諧の中心である「さび」が、中世の幽玄の發展である事は  
明らかであるが、「さび」の文學を幽玄の文學と比するとどこかに  
明るさがある。それは山から水への相違ではないか。芭蕉は、  
旅に一生を過したやうであるが、「さび」の俳諧を建立した後には  
江戸が中心となつてゐたと言つてもよい。さうして芭蕉の句  
を見ても「閑かさや岩にしみ入る蟬の聲」といふ如き句もあるけ  
れども、「荒海や佐渡に横たふ天の川」、「五月雨を集めて早し最上  
川」といふ様な荒海や大河を詠つた句を立ちどころに擧げ得る  
に對して、芭蕉と共通性を多く有すると言はれる西行の歌から、  
海や川を扱つた作を擧げようとしても容易に擧げられない。

佐渡  
新潟市の西方の海上  
にある島  
最上川  
羽前國(山形縣)の大  
河

文化・文政  
紀元二四六四年—二四八五年

過程

一九  
十返舎一九、小説家、  
天保二年(二四二)歿、  
年六十七。  
膝栗毛  
十五卷、道中膝栗毛、  
滑稽小説

こゝにも兩者の相違が見られると思ふ。元祿文學は川のほと  
りもしくは海邊に發生した文學と言つても差支ない。それが  
元祿文學の明るく華やかな一の動機となつてゐる。近世文學  
は大阪から東海道を傳はつて江戸に移る。文化・文政の文學は  
江戸といふ水邊に近い土地に生まれた文學である。文化・文政  
文學は元祿文學に比すれば華やかな明るさは少いが、それは近  
世文學發生完成から爛熟に至る過程のためであつて、水の文學  
である點に變化はない。文化・文政に見られる繊細な味は水の  
味である。この時代に於て一九の膝栗毛が現れたが、その最も  
中心となつたのが、東海道であるのもそれを示してゐる。東海  
道が旅の文學の中で最も心ひかれるのは、上方と江戸との交通  
の中心であつた所から生ずる歴史的回顧もあるが、水邊のもつ  
明るいほがらかさ懐かしみを與へるのであらう。水は山の

春の海  
蕪村の句

水の子を白都  
角の文をなす

島木赤彦

本名は久保田俊彦、  
長野縣の人、歌人、  
大正十五年歿、年五  
十一。

やうに孤獨でなく、何人にも笑ひかけ親しみを見せる。そこに感傷となつかしみが生ずる。たとへば春のやうである。「春の海ひねもすのたり」かなといふ句は、春と水とが最も適當に結びついて居る。近世文學は大坂と江戸と東海道とによつて代表される水の文學である。明治以後の文學も、その中心は水の文學である點に近世文學からのつながりが見える。

水の文學は結局都會の文學である。都會は水邊に生じ、發展する都會は水邊のそれに限られて居る。東京を中心とする明治以後の文學を、水の文學と言ふのもそこから説明される。ただ明治以後に於ては、交通の自由なるため山の文學も加はつて居る。たとへば信州の文學の如きもそれである。島崎藤村氏の文學の如き、島木赤彦氏を中心とする短歌の如き、山の文學の要素が多く入つて居る。山嶽の美が人の心をとらへて居るの

もこの精神の流である。

以上の如くして、文學史を山の文學と水の文學と言ふ立場から見れば、上代文學と中世文學とは山の文學の要素が多く、古文學には山から水へ出ようとする精神がかなり濃厚であり、近世文學に於て水の文學となつて居ると見られる。明治以後の文學は、水の文學を主要素として、山の文學の流も多少見られると思ふ。もとより上代文學と中世文學とを比較するときには、一方には素樸性があるに對して、一方には到り得た深さがある。童心の美と老境の美との區別がある。素樸美と平淡美とは一見似て居るやうであるが、一方は經驗のない生の味があり、一方にはあらゆる經驗を経てきた枯淡な味がある。優美や華やかさや技巧を経て居ない單純性と、優美や華やかさや技巧を経てきた後の單純性との相違である。上代文學と中世文學と



素盞鳴尊

伊弉諾尊の御子、天照大神の御弟。

日本武尊

景行天皇の皇子、名は小碓、景行天皇四十二年(七七三)薨。

實朝

姓は源、鎌倉三代の將軍、歌人、承久元年(二七九)薨、年二十八。

親房

姓は北畠、學者、勤王家、正平九年(一二二四)薨、年六十二。

神皇正統記

北畠親房の著、神武天皇より後村上天皇までの事蹟を記した書。

にはさういふ相違を感じず。併し、兩者には山岳的な英雄的精神を見得る點に共通性がある。上代文學に於ける素盞鳴尊や日本武尊の英雄神話並びに歴史傳説は、中世の爲朝や義經の國民傳説に於て再現して居る。上代の國家的民族的精神は、中世の實朝や親房の神皇正統記（神代卷）に於て再現して居る。个性的よりも民族的な點に於て共通性がある。そこに山の文學としての共通性がある。この比較は中古文學と近世文學との間にも相違はある。一方に古典味があるならば、一方には近代味がある。一方に典雅な貴族的な性質があるならば、一方には卑近な平民的な性質がある。一方には現在の我々に容易に近づけないか（長）げはなれたものがあるに對して、一方には親しみ易い馴れ（長）しいものがある。それは中古の雅樂と近世の三味線音樂との相違であり、大和繪と浮世繪との相違である。しかし、なほ兩者

を通じて明るい華やかさがある。それは上代文學や中世文學には見出し得ないものである。そこに水の文學としての特性があると思はれるのである。かくして自分は日本の文學史觀に於て、明治以前の文學の中で、中古文學と近世文學とを黄金時代にすることには一面の眞理を認めるが、しかし中世文學を單に暗黒時代の文學とし、過渡時代の文學とする見方には、多くの修正を要するものがあると思ふ。上代文學と中世文學、中古文學と近世文學といふこの時期の相互の間に類似を見出すことによつて、山の文學と水の文學との二つの性質に分けて、相互の展開を考へることも、一つの見方として許されると思ふのである。

(セルバン)

落花の雪

またや見む交野のみ  
野の櫻狩、花の雪ち  
る春の曙、藤原俊成  
(新古今集)

紅葉の錦、嵐の山の寒  
朝まだき嵐の山の寒  
ければ、紅葉の錦き  
ぬ人ぞなき、藤原公  
任、(拾遺集)

打出の濱  
今の大津市松本、石  
場邊の古名。

駒もとどろ  
貢物たえずそなふる  
東路の、勢多の長橋  
音もとどろに、平兼  
盛、(風邪集)

うねの野に  
近江より朝立ちくれ  
ばうねの野に、田鶴  
ぞなくなる明けぬこ  
の夜は、大歌所の歌  
(古今集)

一六 落花の雪

落花の雪に踏みまよふ、交野の春の櫻狩、紅葉の錦を著て歸る、  
嵐の山の秋の暮、一夜を明かすほどだにも、旅寝となれば物憂き  
に、恩愛の契淺からぬ、我が故郷の妻子をば、行方も知らず思ひ置  
き、年久しくも住み馴れじ、九重の帝都をば、今を限りと願みて、思  
はぬ旅に出て給ふ、心の中ぞあはれなる。  
憂きをば止めぬ逢坂の、關の清水に袖濡れて、すゑは山路を打  
出の濱、沖をはるかに見渡せば、潮ならぬ海にこがれ行く、身をう  
き舟の浮き沈み、駒もとどろと踏みならず、勢多の長橋うち渡り  
行きかふ人にあふみ路や、世をうねの野に鳴くたづも、子を思ふ  
かとあはれなり。時雨もいたく森山の、木の下露に袖濡れて、風  
に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎゆけば、鏡の山はありとても

時雨もいたく

白露も時雨もいたく  
もる山は、下葉のこ  
らず色づきにけり  
紀貫之、(古今集)

不破の關屋

人住まぬ不破の關屋  
の板庇、荒れにし後  
はたゞ秋の風、藤原  
良經、(新古今集)

沙干に今や

うちわたす今か沙干  
になるみ瀧、とをよ  
る舟の聲も通はず  
常磐井入道、(夫木集)

池田の宿

遠江國(静岡縣)天龍  
川の東岸、古は西岸  
にあつた。

元暦元年

安徳天皇の御代、(二  
四)

重衡

平清盛の子、壽永三  
年(二四四)一の谷の戦  
に源義經に捕へられ  
て鎌倉に送られた。

涙に曇りて見えわかず。ものを思へば夜の間に、老蘇の森の

下草に、駒をとめて顧みる、故郷を雲や隔つらむ。

番場醒が井柏原、不破の關屋は荒れはてて、なほもるものは秋

の雨の、いつか我が身のをはりなる、熱田の八つるぎ伏し拜み、汐

干に今や、鴨海瀉、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末

はいづくと遠江、濱名の橋の夕汐に、ひく人もなき捨小舟、沈みは

てぬる身にしあれば、誰かあはれと夕暮の、晚鐘なれば、今はとて、

池田の宿に著き給ふ。

元暦元年の頃か、とよ、重衡の中將の、東夷の爲に捕はれて、この

宿にやどり給ひにし、その古のあはれまでも、思ひ残さぬ涙なり。

旅館の燈、幽にして、鷄鳴曉を催せば、匹馬風にいばえて、天龍川

を打渡り、小夜の中山越えゆけば、白雲路をうづみ來て、そのことも

知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が、いのちなりけ

小夜の中山  
遠江國(静岡縣)小笠  
郡日坂の東にある坂  
嶺。

いのちなりけり  
年たけてまたこゆべ  
しとおもひきや、命  
なりけり小夜の中山  
西行法師(新古今集)  
羨ましくぞ思はれ  
ける。

亭午

菊川

遠江國(静岡縣)榛原

郡。

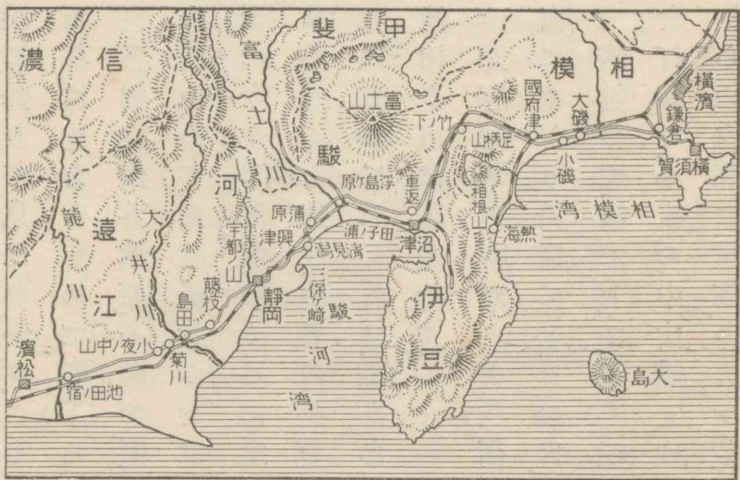
承久の合戦

仲恭天皇の承久三年

(一一八二)の戦。

光親卿

藤原光雅の子。



り。」と詠じつゝ、二たび越えし跡  
までも羨ましくぞ思はれける。  
隙ゆく駒の足はやみ、日すでに  
亭午に昇れば、かれひまゐらす  
ほどとて、輿を庭前にかき止む。  
ながえをたゝきて警固の武士を  
近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川  
と申すなり。」と答へければ、承久  
の合戦の時院宣書きたりし咎に  
よりて、光親卿關東へ召し下され  
しが、この宿にて殺されし時、  
昔南陽縣菊水。汲下流而延齡。  
今東海道菊川。宿西岸而終命。

リマ  
ワグ

龜山殿

京都市右京區嵯峨、  
今の天龍寺境内  
龍頭鷺首の舟

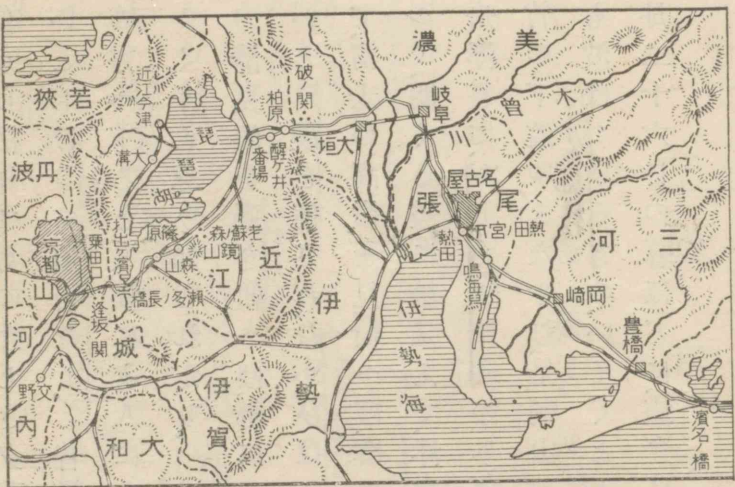


島田・藤枝

ともに駿河國(静岡  
縣)志太郡。

岡への眞葛

歸り来る程はなけれ  
ど朝露の、岡邊の眞  
葛うら枯れにけり。  
藤原爲家。



と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今  
は我が身の上になり、あはれやい  
とどまさりけむ、一首の歌を詠じ  
て、宿の柱にぞ書かれける。  
古もかゝるためしを菊川の  
おなじ流に身をや沈めむ  
大井川を過ぎ給へば、都にあり  
し名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐  
の山の花盛り、龍頭鷺首の舟に乗  
り、詩歌管絃の宴に侍りし事も、今  
はふたゝび見ぬ夜の夢となりぬ  
と思ひつゝけ給ふ。  
島田藤枝にかゝりて、岡への眞



王世の民

花を見すてて云々  
春霞立つを見すてて  
行く雁は、花なき里  
に住みやならへる。  
伊勢(古今集)  
艚の音ばかり云々  
秋雁艚聲ヨリ來ル。  
(白樂天)  
かりがねにつらさ  
やならへる

ど、またそれをうちながむる人もなし。ましてかく晴れたる日  
は、とみに雨風のありなどいふことは、つゆおもふものもあらじ  
かし。この長閑なる御代の春の御恵にぞ、かく心ゆたかにたの  
しび遊びて、かへさ忘るるばかりしても、何のわづらひうれひも  
なきに、この花も昔よりつきぬ御恵深き露に生ひそひきとやら  
む聞けば、さ思ふ人もありやなしやと見れど、王世の民の心とや、  
かゝる照る日の恵をば思ひも寄らず、いつもかく空晴るるもの  
とばかりも思はぬ輩多からむなど思ひかへして、四方をふとう  
ち見れば、筑波嶺のあたり、いとほそくひらめきたる雲こそあり  
けれ。この雲よ、世にいふはやてなどいふものなりけり。あま  
りに朝よりめづらしく晴れたる日なればとて、かねて囊も笠も  
はなたて居たるが、はや艚おしたて漕ぎかへるを、いかにこの花  
を見棄ててかへるは、かりがねにつらさやならへる。艚の音ば

(ありぬべし  
あるべし)

かりがねにつらさやならへる。など口々にわらふを、耳にも入れて漕ぎ去  
りぬ。  
いつかその雲のいとひろごりてけるが、かの輩は露も知らず、  
日のかげろふも知らず。今日はあつきばかりなりとて、肌ぬぐ  
もあり、または衣などぬぎて馳せありくもありぬべし。雨にさ  
きだつ風のひと通り吹き落ちたれば、こは花よと思ふまもなく、  
いさご吹き立てたれば、たゞ驚きて居るがうち雨の降り出でた  
り。初はこゝちよき雨などともいひたらむが、後には人の聲に  
雨の音もせず。馬を馳せて歸るもあれば、おどろきあわてて、堤  
よりまろびて落つるもあり、甲女などは、あはれ見苦しきま  
であわてふためきて、はじめ装ひしをも、自ら夢とや思ふらむさ  
まなり。まして酒に酔ひて濡るるも知らず、顔に笑ひなどする  
もあれば、思ひ寄らぬおろかなる雨かな」と、怒り罵るもありぬ

もやひ舟とてめ  
思可哀也  
かぞいろは

かぞいろ  
花月草紙  
六卷、松平定信の隨筆。  
松平定信一號は樂翁、磐城國(福島縣)白河城主、幕府の老中、文政十二年(三十四)歿、年七十二。

かの舟は早く漕ぎ行きぬれど、わが住む浦は遠ければとあるべし。  
橋の下に舟とめて居たるが、橋の上など人の走りさわぐは、なるかみのやうに聞えぬ。はや雨もかぞふるばかりに川のおもに見ゆる頃、夕月のことさらに新しくみがき出たれば、はや雨の名残もなし。堤の花いかゝあらむと漕ぎかへして見れば、その頃ははや人もなし。櫻の木の間ほのく、と月の見えたるは、わがためにつくりなしかむと思ふばかりなり。濡れにし人はいかゞしたりけむ、この月などは思ひも寄らてあらむなど、ひとり思ふも何となく心おこり行きぬ。かぞいろもわれひとり人にこえて心地よしと思ふときは、「いましめ給ひたれば、またあやまちしぬべくとおそろしく覺えければ、飲み残したる酒携へてつひに漕ぎかへりぬとかな。  
(花月草紙)

一葉散るを  
七つをのを琴

七絃琴即ちきん(琴)のことをいふ。十三絃のはさう(箏)のことといふ。  
見さく  
雲路になむぬる  
片なりなるうひご  
笠にぬふてふ  
青柳を片絲によりて鶯の、ぬふてふ笠は梅の花笠。大歌所御歌(古今集)  
鶯の笠に縫ふてふ梅の花、折りてかざさむ老かくるやと。源常(古今集)  
待たるる物は  
あらたまの年たちかへるあしたより、待たるる物は鶯の聲、素性法師(拾遺集)

二 初雁をきく

桐の葉の一葉散りそむるゆふべ、ひとり高き屋にのぼりて、七つをのを琴をかきならしつ、秋の風のことばをうそぶき出せる折しも、遠つ人初雁がねの聲かすかにきこゆるにおどろきて、しばしひきさしつ、見さくれば、姿は雲路になむ消え失せぬる。いでや白雪のふるとしよりしも、はねならはしつ、かげるふの春立ちそむるあした、日影うらうら、とうち霞めるに、軒近き篋にねぐらしめつる鶯の、まだ片なりなるうひごをほひ出せるよ、り、笠にぬふてふ花のかをりみてる枝に来るつ、ほこりかたさへづるはめでたきものから、雲にたくへし櫻も散り過ぎて、青葉しげき木の間を立ちぐく聲のむくつけきには、待たるる物は、「といひしにひきたがへてぞおぼゆるかし。池のふぢなみ夏か

いを寝ず  
をち返り鳴く

今一聲の

行きやらで山路くら  
しつ時鳥、今一聲の  
聞かまほしさに。源  
公忠（拾遺集）

雲のはたて

おほどか

けてにほへる頃、ほととぎすのそれかあらぬかとたどらるる一  
聲より、花橘のゆくりなく香ににほへる曙あり、明の月のさやか  
なる空に、さだかに名（な）のりて過ぎゆくは更なり、小雨そぼふるゆ  
ふべ、物おもひにいを寝ずして更け過ぐる夜半に、をち返り鳴く  
を誰かあはれと思はざらむ。しかはあれど、山（やま）かたつけるわた  
りには、こち（こ）たき（た）き（き）まで飛びかひつゝ、梢（しほ）にしもおりゐて、高（たか）やかに  
鳴きとよめるなどは、今一聲のといふべくもあらず、うれたきや  
そもく、雁（かり）は、常世（とこよ）の國（くに）をや出でてけむ、三越路（みやこ）よりや來ぬらむ。  
ある時は眞木（まぎ）たてる荒山（あらい）のあしたの霧（きり）にむせび、ある時はみる  
め刈（かり）る八潮路（やちほ）のゆふべの浪（なみ）をつばさにかけて、草（くさ）の枕（まくら）だに結び  
あへず、天路（あまぢ）はるかにおもひあがりて、夕暮（ゆふぐ）の雲（くも）のはたてに、聲（こゑ）は  
を舟（ふね）こぐ唐船（からぶね）にかよひ、姿（すがた）は薄墨（うすすみ）にかける文字（もじ）に似て、一（ひと）つら過  
ぎ行きつゝ、をちかたの田（い）づらに落ちくるさまさへおほどかに

限りなくめでたく  
なむ（ある）  
にくからずこそ（あ  
れ）

うけらが花

七卷、橘千蔭の歌文  
集。  
橘千蔭（江戸（東京  
市）の人、國學者、  
文化五年（二四六）歿  
年七十五。  
白駒の隙（すき）すぎ易し  
黄金の術

しで、その時しも萩の葉（はぎのは）におとなふ風萩（かき）が枝（えだ）に亂（みだ）るる露（つゆ）くまな  
き夜半（よる）の月（つき）染（し）めかくる木々（きぎ）のみみぢ、千（ち）たび八（や）千（せん）たび打（う）ちすさ  
ぶ砧（いし）の音（ね）おしこめてあはれなる折（せ）に逢（あ）ひぬるが、限（かぎ）りなくめで  
たくなむ。また別（わか）けていぬる春（はる）べには花（はな）を見捨（みす）つるなど、咎（とが）む  
めれど、しづけかるみ山（やま）の花（はな）をつばさにしめむとて、都（みやこ）の空（そら）をい  
そぐならむと思（おも）へば、そもはたにくからずこそ。雁（かり）よ雁（かり）よ、なれ  
こそはわが思（おも）ふどちなりけれ。

われもいざ秋（あき）をあはれぶ友（とも）どちの

つらには漏（も）れじ天（あま）つかりがね

（うけらが花）

三 壬子試筆の詞

日月迭（たが）ひ移（うつ）つて、白駒（しろこま）の隙（すき）すぎ易（やす）く、衰病（せうびやう）日に侵（か）して、黄金（おうごん）の術（じゆつ）

犬馬の齡

董生

帷ヲ下シ憤ヲ發シテ  
書ヲ讀ム、三年園ヲ  
窺ハズ。(漢書、董仲  
舒傳)

程・朱

二程子及び朱子、二  
程子は程頤及び其の  
弟程頤、朱子は朱熹  
共に儒學の大家。

かをる

鄒・魯

鄒は孟子の生國、魯  
は孔子の生國、よつ  
て孔子の道をいふ。

韓・歐

唐の韓愈、宋の歐陽  
修、共に大文豪であ  
る。

邯鄲の歩を學ぶ

學ぶにぞ…ぬべき

なり難し。されば犬馬の齡、これまであるべしともおもはざりしが、いつしか老の波より來て、今年七十あまり五つの春にもなりぬ。あまつさへ近き頃より身に痿疾を得て手足もあがらず、起居もなやめるまゝに、昔の董生を學ぶとはあらねども、この三とせ春の園を窺ふこともかなはねば、閨の中ながら梢に傳ふ鶯の音にのこの夢をさまし、枕にかをる梅が香に過ぎし昔をしのぶばかりになむありける。しかはあれど、幸に若かりし時より學の窓に年を経るかひありて、程朱の道に従ひて鄒魯の風を尋ね、韓・歐が文を好みて邯鄲の歩を學ぶにぞ老の寢覺も慰みぬべき。



巢 鳩 室

さても多くの年月を経て、世の移り變る有様を考ふるに、盛衰榮枯互にゆきかふをば夢とやいはむ現とやいはむ。まことに、富貴は浮かべる雲のごとく、禍福は糾へる繩の如しといへるに何か違ふことあるべき。中にたゞわが聖人の立てたまへる三綱五常の道のみ、天地と並び傳へ、古今のへだてなく、こればかりは變ることあるべからず。人として仰ぎ崇ぶべきはこの道ぞかし。

富貴は云々  
不義ニシテ富ミ且貴  
キハ我ニ於テハ浮雲  
ノ如シ。(論語)  
禍福は云々  
夫レ禍ト福トハ何ゾ  
糾纏ニ異ラン、命ハ  
説クベカラズ、孰レ  
カ其ノ極ヲ知ラン。  
(漢書、賈誼傳)  
何かある…べき  
三綱五常  
ゆくこそなげかは  
しけれ  
蚘 蟬  
蚘 蟬大樹ヲ撼カス、  
笑フベシ自ラ量ラザ  
ルヲ。(韓退之)  
精 衛  
小鳥ノ名、發鳩ノ山  
ニ鳥アリ、精衛トイ  
フ、常ニ西山ノ木石  
ヲ取リテ以テ東海ヲ  
填ム。(山海經)

然れども、儒教世に行はれざりしより、人々義理にうとく利慾にさとくなる程に、五常の道すたれて、風俗日に下りゆくこそなげかはしけれ。もとよりいやしき身にて、一代の風教を維持せむとすとも、わが力及ぶべきにあらねば、ひとへに蚘蟬の樹を撼かし、精衛が海にうづめむに似たるべし。さはいへど、世を憂へ民を新にするもわが儒分内のことなれば、これを度外に置くべ



するこ、そうけられね

曲學阿世

たとひ……とも

ないし

駭臺雜話

五卷、室鳩巢の隨筆  
室鳩巢一名は直清  
徳川中世の儒者、享  
保十九年(三三〇)歿、  
年七十七。

きにもあらず。いかゞとなれば世に老師宿儒と稱する人の、好んで異説をほしいまゝにし、又は他道を雑へて、仁義五常の沙汰をばよそにするこ、そうけられね。たゞ務めて新奇を競うて俗耳を悦ばしめ、時好に投ずるなるべし。いと口をしきことなり。古人の所謂曲學阿世とは是等をいふなるべし。  
よし人はさもあらばあれ。たとひ風俗は昔にあらざなりぬとも、わが身一つはもとの如く仁義の道を守りつゝ、前修の模範を失はじと思ふこそ、せめて儒となりししともいふべけれ。然るに、あらたまの春のはじめとて、人は皆おのがじし身の福を萬代と祝ふ中に、我はたゞ五常の道に心をよせて、いつもかはらずめでたきものはこの道なりとて、かくなむ筆を試むるならし。

(駭臺雜話)

阿部次郎

山形縣の人、明治十六年生、文學博士、東北帝國大學教授。

一八 讀書の意義

阿部次郎

世の中には、極めて平凡で、陳腐な問題で、而も時々振返つて之を考へ直して置かなければならぬ性質のものがある。讀書の意義といふやうなことも、世人の多數にとつては、恐らくこの類の問題の一つである。讀書は誰でもすることであるが、大多數の人はその意義と利弊とを考へてゐない。併し、文化の進歩に伴つて、讀書慾が急速に増加するにつれ、又讀書の態度が眞劍の度を加へるにつれて、この問題をはつきり考へて置く必要は益、加つて来る。自ら眞劍に生活し、眞劍に思索して讀書は、體験を豫想する。自ら眞劍に生活し、眞劍に思索してゐる人にとつてのみ、讀書は効果がある。讀書は吾々の思索と體験とを補ふことは出来るが、之に代ることは出来ない。讀書

體験  
思索

自分の

益、加つて来る。

讀書は體験を豫想する。

自ら眞劍に生活し、眞劍に思索して

の意義を考へる時、吾々は第一にこの事を「記憶」して置かなければならない。

若し人が一冊の書でも之を本當に理解しようと思ふならば、唯之に「嚙」り付いたり、之と「睨」めつくらしたりしてゐるべきではない。「假令」その人が之を読みかへし、又読みかへして、一生その書を手から離さなかつても、若しその書の根本問題を自己の問題とすることを知らず、その書の背景になつてゐる人生の體驗を自ら體驗することを知らず、又著者の思索の努力を自己の中に「繰返」すことを知らないならば、たゞ小僧がお經を「誦」む時のやうに、その書を「誦誦」するのみで、その人の生活はこれによつて豊富にも力強くも高くもならないであらう。寧ろ無用の記憶は彼の頭腦を硬くして、讀書は平生の「馬鹿」を一層馬鹿にするに過ぎないであらう。讀書の意義を考へるものは、先づその「價

値」の限界を考へなければならぬ。吾々にとつて最上の意義を持つてゐるのは生活であつて、決して讀書ではない。此の間の關係を「轉倒」して、讀書に無條件の價値を置くのは、寧ろ讀書からその正當な價値を奪ふ所以に過ぎないのである。

この事は、理化の書にも、料理の書にも「齊」しく適用される。自然現象に對する「觀察」と「實驗」、家庭の實際生活に於ける苦心と活用、臺所に於ける「調理」と「食卓」に於ける「玩味」かういふやうなことを始終「念頭」に置きながら、書物に書いてあることを確めたり「批評」したり、「訂正」したり、運用したりしないならば、讀書は唯「暇潰」しの道樂になつて了つて、その知識はいつまでも本當に自分のものとなることがないであらう。「就中」自分の生活と體驗とに「照」らして、根柢から之を吟味する心掛の特に必要なのは、哲學や「文藝」に關する書である。かういふ種類の「文藝」の中に取扱はれて

文獻  
哲學

哲學も明瞭なものは  
文獻も明瞭なものは  
哲學も明瞭なものは  
文獻も明瞭なものは

機微

有形の道理

あるのは、無形の眞理が、人心の機微かである。この場合には、吾  
 吾は理化や料理の書の場合のやうに、之を實際に徴すべき有形  
 な物を持つてゐない。時代の推移や人間の心理は、社會現象の  
 考察や他人の喜怒哀樂の表情の觀察に徴して、書物に書いてあ  
 ることの眞偽を判断することが出来るのは勿論であるが、この  
 場合、その根拠になつてゐる社會現象の意味、他人の表情の意味  
 は、結局自分自身の内面的體驗を基礎としなければ、解釋の出來  
 ない筈のものである。随つて吾々は最後の根柢に於ては唯深  
 く自分の内面を省みることに由つて書かれてあることの眞偽  
 を判定するより外はないのである。平生自ら體驗を深める努  
 力もせず、自ら思索し、自ら内省する習慣をも作つて置かない者  
 は、書を讀んでも本當の意味を理解することが出來ず、唯徒に之  
 を記憶するか、若しくは盲目的に之を信仰するかに過ぎないで

内面的體驗

精神の道理 抽象的の事 有り 吾々の

生の流動

yosoku

あらう。併し、十分に理解されぬ記憶の集積と、腹の底から得心  
 の行かぬ盲目的な信仰とは、吾々の生の流動を妨げる石塊のや  
 うなものである。之を持つことが多ければ多い程、吾々の生活  
 は却つて之がために壅塞されるのである。  
 吾々の生活の發展の最初の地盤となり、吾々の思索の第一の  
 出發點となるものは何であるか。それは吾々自身の體驗であ  
 る。吾々自身の體驗の外には何もものもあることを得ない。吾  
 吾の最初の體驗はもとより完全なものではないが、その中に隠  
 れてゐるものを明るみにひき出し、その中に潜んでゐる矛盾と  
 戦を重ね、その中に具つてゐる内面的傾向を次第に推し進める  
 事によつて、吾々の生活は始めて發展し、吾々の思索は始めて眞  
 理に接近する。若し吾々が、吾々の生活に關する眞理の標準を  
 例へば物理学に於けるが如く、自己以外に固定した尺度に求め

懷疑

るならば、吾々はいつまでたつてもそんなものを發見すること  
 が出來ないであらう。吾々は永遠にたゞ與へられたものを**盲**  
**信**するか、若しくは永遠に**懷疑**の淵に沈んでゐなければならな  
 いであらう。**輕信**と**懷疑**とは**雙生兒**である。無きものを有る  
 と考へるのは輕信である。眞理を求めらるるに最初からそれが  
 無いときまつてゐる方面を捜し廻つて、永久に無いといつ  
 て騒ぎ立てるのは懷疑である。幻の上にその思想の根柢を築  
 かうとしてゐる點に於ては、兩者共に同様である。生活に於て  
 も、思索に於ても**假初**にも堅實な歩みを始めようとするならば、  
 吾々は自分の體驗を信じて之を尊重する事を學び知らなければ  
 ならない。讀書の價値も亦この信念の上に立つて、始めて發  
 揮されるのである。

この信念を基礎としない時、讀書は吾々にどのやうな弊害を

半可通

與へるであらうか。第一に、それは善惡**美醜****正邪**に對する純朴  
 な本能を紊して、之を混亂させ、之を麻痺させる。全然文字を知  
 らぬ田夫野人が**半可通**の讀書子よりも人情の美醜を解し、善惡  
 正邪に對して彼等一流の判斷を持つてゐるのは、彼等が**兎に角**  
 讀書によつて迷はされない本能を持ち續けてゐるからである。  
 第二に、體驗の根柢を缺いてゐる讀書は、吾々の思考力を**薄弱**に  
 する。吾々は雑多な意見を聞きかじることによつて、自分自身  
 の判斷が無い人間にされてしまふ。さうして第三に、吾々は前  
 にいつたやうな種々の理由によつて、結局吾々の生活そのもの  
 の統一を奪はれ、生活そのものの力を失ふ様な恐ろしい**破目**に  
**陥**る。吾々の生活には踏みしめるべき大地もなく、歩み出すべ  
 き出發點もないものとなつてしまふ。この點に於て、**誤**れる讀  
 書によつて、今日の生活が如何に**損**はれてゐるか、他人事ならぬ

粗野  
 半可通  
 半可通  
 やまらるか

吾々自身の問題として、吾々は深く省みるところがなければならぬ。吾々は無學な人を嘲る前に、先づ多少の學問によつて、却つて自分自身が馬鹿になつてゐるやうなことがないかと言ふことを考へて見る必要がある。生活の狭いことは決して喜ぶべきことではないが、狭くても自分の生活を持つてゐる者は、凡そ自分の生活を持つてゐない者よりも遙かに優つてゐる。併し、荒々しい粗野から産まれたものよりも、教養ある敏感から生まれたものの方がよいことは言ふまでもない。無知は吾々の生活を狭くし、吾々の思想を偏らしめ、吾々と他人との交通を困難なものにする。吾々が、最高の度まで、吾々の中に潜んである力を發揮しようとするならば、他人の體驗を通して、自分の局限された一生の中に觸れ得ないやうな體驗をも味はひ、他人の思索によつて自分の思想を豊富にし、かくて一人の生涯の中

自身

を

に、千萬人の生涯を攝取することを心掛けなければならぬ。決して自分自身の中のみ閉ぢ籠るべきではない。茲に於て、讀書の意義は甚だ重大となる。書を讀むと讀まぬとは第一義の意味に於て人間の價値を左右するものではないが、それは深く人間の價値と關係して、頗る向上を助ける。正しい道さへ踏み外さないならば、書物を讀めば讀むほどよいものである。さうして、讀まなければ讀まないほど悪いものである。たゞ、讀書の意義は、吾々の體驗を基礎としてのみ成立つものであるとすれば、どんな良書も、此方の體驗が足りないかぎり、十分に理解することが出来ないのは止むを得ない。特に偉人がその一生の體驗と思索とを籠めたやうな大作になると、それは吾々の體驗と思索とが、大きくなればなるほど、何處までも益、大きく見えるであらう。幾度讀み返しても常に新しい味はひを

Y. Shinagawa

Shinagawa

自然科学

中島にのりる  
分れ、はらも  
はる

吾々に味ははせるであらう。この意味に於て、吾々が本當に良書を理解しようと思ふならば、吾々は先づ自分自身の生活を大きくしなければならぬ。吾々が全力を盡くして考へたり、味はつたりしても、とても理解し得ないやうな書に遭遇したならば、吾々は暫くその書を離れて、直接の人生に歸つて行くがよい。さうして其處で得たものを携へて、適當の時期を見計つて再び書物に歸るがよい。その時吾々が直接の人生から携へて來たものは、その書物を理解する爲に、大いに裨益する事があるであらう。自己の成熟を待たずに、無暗に之にかじり付くのは極めて愚策である。自然科学の知識の根原が自然にあるやうに、人間智の根原は凡べて直接の人生にある事を忘れてはならない。書を読むとは心を讀むのである。自己の心を読む事を知らぬものが、どうして他人の心を読む事が出來よう。(人格主義)

大町桂月

名は芳衛、高知縣の人、文章家、大正十四年歿、年五十七。

青丹よし

塞翁の馬

樹雙羅沙



萬里の長城、咸陽の宮殿

秦の始皇帝の築いたもの。

旁午・倥傯

和銅三年

一九 國家の盛衰

桂月

精田はし奈良の都は荒れ果てて、伽藍徒に古の名残を留め、星月夜鎌倉の府は廢れ盡くして、陰鬼空しく雨。英雄の骨も朽ちてはまた土地と擇ばず、美人の鬢體時に鋤犁に觸れて出づとも、誰か當年の倂を認めん。東流の水一度逝きてまた返らざらん。富貴果してよく幾時かあらん。塞翁の馬、上歳月徒に過ぎ、羅雙樹の花盛者必衰の色に出づ。萬里の長城未だ全く成らずして、山東既に亂れ坑灰なほ温かにして、咸陽の宮殿三月紅なり。あはれ、萬世無窮と傲語せし始皇帝が雄圖の宮殿、二世にして盡きぬ。盛んなるもの豈竟に久しからんや。千戈天下に旁午して、兵馬倥傯、肝腦長へに地に塗れ、腥風いた

馬は  
武王已ニ股ニ克チ、  
馬ヲ華山ノ陽ニ縱チ、  
牛ヲ桃林ノ虛ニ放チ、  
干戈ヲ偃セテ兵ヲ振  
へ旅ヲ釋ク。(史記周  
本紀)

磬 鼓  
文恬武熙

る處に吹き荒ぶ間は、文化の芽の萌さんよしもなければ、たゞ  
馬は華山の陽に歸り、牛は桃林の野に放たれ、堯舜の太平の氣  
象融融として起るに及びて、文化の芽茲に始めて萌す。太平愈  
續きて文化愈進む。文化愈進みて生活の程度愈高し。所謂治  
に在りて亂をわするの地機實にこの際に胚胎す。祖先百戰  
の山河に生れ出て、目に旌旗の翻るを見ず、耳に鼙鼓の轟く  
を聞かず、文恬武熙安きに慣れてまた危きを想はず。人益利巧  
になりて益死の惜しきを知り、欲に趨り利に就き、舌頭にはよく  
風を生ずれども腕に錘を捫る力だになく、風俗の奢侈に赴くに  
つれて、人心軟化し、柔化し、終に腐敗す。文化の餘弊是に至りて  
極まる。一旦緩急ありとも安んぞよくこれに當るを得ん。天  
下はもとより殺伐の氣多くしてはよく治るものにあらねど、水  
靜かなれば則ち腐敗す。文化長く續けば、即ち亂世に養成せら

阿剛 阿諛  
敦厚 敦毅

盛 ↓ 衰  
衰 ↓ 盛

アッシリヤ  
アジヤの古王國

零露

れたる美風全く消滅す。敬虔の心は阿諛の心となり、剛毅の習  
は柔弱の習となり、敦厚は輕薄となり、誠實は詐偽となり、義理は  
黄金と代り、忠君愛國の念は私利私欲と變じ、天真爛漫の態は矯  
飾妖艷となり、國家の元氣内に盡きぬれば、外に一時の盛  
觀を呈すとも瓶裡の花の如く久しからずして自ら枯れんとす。  
これ別に耳新しき説にあらず、歴史は實に吾人に向つて常にこ  
れを語るなり。

世界の文化はもと中央アジヤ高原より出でぬ。而して印度  
は亡びたり、ペルシヤは亡びたり、アッシリヤは亡びたり、エジプ  
トは亡びたり。荒涼たる山河、當年の殘礎を覓めんとすれども、  
また得べからず。歌舞の地鳥雀空しく悲しみ、古塔月影の寒き  
に鎖し、蔓草武夫の夢を封ず。夕陽に昔を問へば、悲風千里より  
來り、荒墳に英雄を弔へば、零露長へに冷やかなり。嗚呼榮えし

燦爛

マセドン  
今のギリシヤの北部  
地方の總稱

アレクサンドル大  
王  
（西紀前三三三）  
ハ 紘  
八 紘  
辱 弱  
天 折

國は亡びぬ、文化の最も早く開けし國は亡びぬ。而して取つてこれに代りしものは、當時未だ文化の最も開けざりし國にあらずや。

ギリシヤは歐洲中にて最も先に開けし國なり。その燦爛たりし文化は、今なほこれを討ぬるに足る。而してギリシヤは紀元前早くも北方の文化の光被せざりしマセドンのために征服せられぬ。ペルシヤはギリシヤよりなほ早く開けたる國にして、ギリシヤを蠻夷と侮り、幾度か大軍を發してこれを討ちしかど、はてはマセドンより起りて、未だ長くギリシヤの文化の空気を呼吸せざるアレクサンドル大王が鐵蹄の下に蹂躪せられぬ。かくて、豪氣八紘を蓋ひ、雄圖世界を卷きたりしアレクサンドル大王も、一たびペルシヤの空気を呼吸し、その優柔辱弱なる風習に接するに及びて、遊樂飲酒に耽り、ためにその天命を縮めて天

宴安  
鳩毒

ザンシップス  
スバルタの勇將、  
ハンニバル

カルタゴの名將、西  
紀前二二〇年歿、年六十

餘孽

コンスタンチノー  
ブル

今のスタンブル、  
土耳其共和國の首都  
ローマのコンスタン  
チン大帝ここに奠都  
した。（西曆三〇）

サラセン人  
中世頃のヨーロッパ  
人がアラビヤ人を呼  
んだ稱

蒙古人種  
アジア大部分の諸種  
族、こゝは成吉思汗  
拔都等を指す。

折せり。アレクサンドル大王は實に劍を把つてペルシヤを倒せり、而して、ペルシヤはまた文化の暗刃を以てこれに報じたりといふとも、必ずしも過言にあらず。まことや宴安は鳩毒なり。ローマはギリシヤに次いで開けし國なり。その強盛なること實に世界に比なかりしかど、文化の餘弊はその元氣を消磨せしめぬ。百代の勇王ザンシップスを辟易せしめ、萬古の名將ハンニバルを屈せしめし當年のローマ人の子孫も、あはれやアルプ以北の野蠻人に亡ぼされぬ。その餘孽大いにコンスタンチノーブルに榮えて、第二のギリシヤを現出せしが、これまたアジアにて未だ開化せざりしトルコのために滅されて、その文化も當時はじめて用ひ出したる大砲の彈丸に摧碎せられたるにあらずや。なほサラセン人が歐洲の南部に亂入せしを見よ、當年の蒙古人種が歐洲の東部を蹂躪せしを見よ。すべての點に於



て未開國は開化國に劣れども、たゞ兵力に訴ふる競争のみは、常にこれが勝を制することを示せるにあらざや。

これを近く支那に覓むるに、太古より自ら王者と號し、中華と誇り、他を蠻夷と卑しめ來りしかど、この蠻夷のために一たび亡ぼされて秦となり、二たび亡ぼされて金となり、三たび亡ぼされて元となり、四たび亡ぼされて清となれるにあらざや。しかしして、異日今の中華民國をほるぼすものの蠻夷にあらざること誰かは保せん。

更にこれを我が國の盛衰に考ふるに、文化大いに熟せんとすれば、國力常に消耗せり。神功皇后が三韓を征服し給ふに至るまでは、我が國の未だ全く開化せざりし時代にして、また國力の最も強かりし時代なりき。佛教入り、儒教入り、外國の文化我が國に侵入するに至りて、我が國力漸く衰へぬ。平安朝は、文化の

長袖  
緩帶

地下人  
齒牙に懸けず

舞腰裒々  
櫻梅少將  
平維盛、重盛の長子。

餘弊その極に達せし時代なり。平安朝と始終せし藤原氏が、一族朝廷に跋扈し、長袖緩帶遊戯これ事とし、泰平に狎れて武を講ずるものなく、春の朝に花を歌ひ、秋の夕に月を詠じ、優柔習をなす。淫靡風をなし、征討邊防のことは一に源平二氏に委し、武士よ、地下人よと賤しみ去りて、これを齒牙にだに懸けざりしが、時勢は一轉したり。やさしき筆執りて優劣を歌合に争ふ時代は去りて、愈、劍を執りて天下の權を争はざるを得ざる時代は來りぬ。しかしていふまでもなく、藤原氏は當時文化の感化を被らざりし武士のために蹴落されぬ。

平氏藤原氏に代りて天下の權を握るに至りしかど、不幸にして、平氏の類敗したる都門に居を占めたれば、彼が一族子弟看るて風氣の類敗したる都門に居を占めたれば、彼が一族子弟看る消したる櫻梅少將以下が富士川の水鳥の聲に腰を抜かしたる

歌集

忠度のこと。

琵琶

經正のこと。

横笛

敦盛のこと。

知盛

清盛の子、文治元年

(八四)歿、年三十四

金閣寺

本稱鹿苑寺、足利義

満の創建、北山にあ

る。

銀閣寺

本稱慈照寺、足利義

政の創建、東山にあ

る。

尾大掉はず

義昭

足利第十三代將軍、

慶長二年(三五七)卒、

年六十一。

天八三六々

江湖ニ落魄シテ暗ニ

愁ヲ結ブ、孤舟一夜

思悠々、天公亦吾ガ

生ヲ憫ムヤ否ヤ、月

ハ白シ蘆花淺水ノ秋

(足利義昭)

無<sup>い</sup>理<sup>り</sup>も<sup>も</sup>な<sup>な</sup>き<sup>き</sup>行<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>も<sup>も</sup>な<sup>な</sup>き<sup>き</sup>も<sup>も</sup>な<sup>な</sup>かり<sup>り</sup>け<sup>け</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>、こ<sup>こ</sup>れ<sup>れ</sup>ま<sup>ま</sup>た<sup>た</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>

も怪<sup>あ</sup>し<sup>や</sup>む<sup>も</sup>に<sup>に</sup>足<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ず。一門<sup>い</sup>ん<sup>ん</sup>浮<sup>う</sup>沈<sup>しん</sup>の際<sup>が</sup>に<sup>に</sup>臨<sup>りん</sup>み<sup>み</sup>て<sup>て</sup>も、歌<sup>うた</sup>集<sup>しゆ</sup>を<sup>を</sup>懷<sup>いだ</sup>にし<sup>し</sup>、琵琶<sup>び</sup>を<sup>を</sup>懷<sup>いだ</sup>き<sup>き</sup>、横<sup>よこ</sup>笛<sup>ふエ</sup>を<sup>を</sup>腰<sup>こし</sup>に<sup>に</sup>せ<sup>せ</sup>る<sup>る</sup>風<sup>かぜ</sup>流<sup>りゅう</sup>才<sup>さい</sup>子<sup>し</sup>の<sup>の</sup>み<sup>み</sup>多<sup>おほ</sup>く<sup>く</sup>し<sup>し</sup>て、知<sup>ち</sup>盛<sup>せい</sup>等<sup>ら</sup>一<sup>い</sup>二<sup>に</sup>人<sup>にん</sup>

を除<sup>のぞ</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>外<sup>ほか</sup>、ま<sup>ま</sup>た<sup>た</sup>武<sup>ぶ</sup>士<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>き<sup>き</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>な<sup>な</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>け<sup>け</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>、こ<sup>こ</sup>れ<sup>れ</sup>ま<sup>ま</sup>た<sup>た</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>

までもなく源氏のために亡<sup>な</sup>され<sup>れ</sup>了<sup>し</sup>んぬ。

源<sup>げん</sup>氏<sup>し</sup>北<sup>きた</sup>條<sup>じょう</sup>氏<sup>し</sup>は<sup>は</sup>遠<sup>とほ</sup>く<sup>く</sup>京<sup>きやう</sup>洛<sup>らく</sup>の<sup>の</sup>地<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>去<sup>さ</sup>り<sup>り</sup>て、當<sup>たう</sup>年<sup>ねん</sup>の<sup>の</sup>東<sup>とう</sup>夷<sup>い</sup>の<sup>の</sup>中<sup>ちゆう</sup>心<sup>しん</sup>と<sup>と</sup>も

い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>べ<sup>べ</sup>き<sup>き</sup>鎌<sup>かま</sup>倉<sup>くら</sup>に<sup>に</sup>居<sup>い</sup>り<sup>り</sup>た<sup>た</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>、急<sup>いそ</sup>に<sup>に</sup>は<sup>は</sup>軟<sup>なん</sup>化<sup>か</sup>せ<sup>せ</sup>ざ<sup>ざ</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>が、足<sup>あ</sup>利<sup>り</sup>氏<sup>し</sup>は<sup>は</sup>平<sup>へい</sup>

氏<sup>し</sup>の<sup>の</sup>覆<sup>おほ</sup>轍<sup>しゃく</sup>を<sup>を</sup>踏<sup>ふ</sup>み<sup>み</sup>て<sup>て</sup>京<sup>きやう</sup>洛<sup>らく</sup>に<sup>に</sup>居<sup>い</sup>り<sup>り</sup>た<sup>た</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>、早<sup>はや</sup>く<sup>く</sup>墮<sup>だ</sup>落<sup>らく</sup>し<sup>し</sup>始<sup>はじ</sup>め<sup>め</sup>、そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>軟<sup>なん</sup>化<sup>か</sup>

した<sup>した</sup>る<sup>る</sup>心<sup>こころ</sup>の<sup>の</sup>跡<sup>あと</sup>は<sup>は</sup>金<sup>きん</sup>閣<sup>かく</sup>寺<sup>じ</sup>銀<sup>ぎん</sup>閣<sup>かく</sup>寺<sup>じ</sup>に<sup>に</sup>残<sup>のこ</sup>り<sup>り</sup>、武<sup>ぶ</sup>力<sup>りき</sup>未<sup>ま</sup>だ<sup>だ</sup>副<sup>ふ</sup>は<sup>は</sup>ざ<sup>ざ</sup>る<sup>る</sup>に、早<sup>はや</sup>く<sup>く</sup>

も<sup>も</sup>驕<sup>あ</sup>奢<sup>しや</sup>に<sup>に</sup>耽<sup>た</sup>り<sup>り</sup>、尾<sup>お</sup>大<sup>だい</sup>掉<sup>てう</sup>は<sup>は</sup>ず<sup>ず</sup>、十<sup>じゅう</sup>三<sup>さん</sup>代<sup>だい</sup>の<sup>の</sup>間<sup>ま</sup>紛<sup>ま</sup>々<sup>さ</sup>擾<sup>ざう</sup>々<sup>さ</sup>と<sup>と</sup>して<sup>して</sup>過<sup>か</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>去<sup>さ</sup>り<sup>り</sup>、

遂<sup>すい</sup>に<sup>に</sup>義<sup>ぎ</sup>昭<sup>しょう</sup>に<sup>に</sup>至<sup>いた</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>全<sup>ぜん</sup>く<sup>く</sup>滅<sup>めつ</sup>び<sup>び</sup>ぬ。義<sup>ぎ</sup>昭<sup>しょう</sup>は<sup>は</sup>家<sup>か</sup>を<sup>を</sup>亡<sup>な</sup>した<sup>した</sup>る<sup>る</sup>ほ<sup>ほ</sup>ど<sup>ど</sup>の<sup>の</sup>人<sup>ひと</sup>

にて<sup>て</sup>、も<sup>も</sup>と<sup>と</sup>よ<sup>よ</sup>り<sup>り</sup>將<sup>しやう</sup>軍<sup>ぐん</sup>た<sup>た</sup>る<sup>る</sup>伎<sup>ぎ</sup>倆<sup>りやう</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>け<sup>け</sup>れ<sup>れ</sup>ど<sup>ど</sup>、流<sup>りゅう</sup>石<sup>せき</sup>に<sup>に</sup>文<sup>ぶん</sup>化<sup>か</sup>の<sup>の</sup>餘<sup>あま</sup>徳<sup>とく</sup>、否<sup>いな</sup>

餘<sup>あま</sup>弊<sup>へい</sup>に<sup>に</sup>は<sup>は</sup>、天<sup>てん</sup>公<sup>こう</sup>亦<sup>また</sup>憫<sup>あは</sup>れ<sup>れ</sup>吾<sup>われ</sup>生<sup>せい</sup>否<sup>いな</sup>、月<sup>げつ</sup>白<sup>はく</sup>蘆<sup>あし</sup>花<sup>か</sup>淺<sup>せん</sup>水<sup>すい</sup>秋<sup>あき</sup>。など、詩<sup>し</sup>の<sup>の</sup>み<sup>み</sup>は<sup>は</sup>到<sup>たう</sup>底<sup>てい</sup>

當<sup>たう</sup>時<sup>じ</sup>の<sup>の</sup>武<sup>ぶ</sup>士<sup>し</sup>の<sup>の</sup>企<sup>き</sup>て<sup>て</sup>及<sup>およ</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>べ<sup>べ</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>ざ<sup>ざ</sup>る<sup>る</sup>ほ<sup>ほ</sup>ど<sup>ど</sup>の<sup>の</sup>妙<sup>めう</sup>手<sup>て</sup>な<sup>な</sup>り<sup>り</sup>き。

足利氏に代つて天下を取りし信長を見よ。彼は、三好の舊臣

の心を盡くして鹽梅したる第一等の料理の、その口に適せざり

しを怒り、第二等以下の料理に舌鼓を打ちて飽食せしまでに、都

人士の驕奢の味を知らざりし無骨漢なりしにあらずや。

徳川氏は草莽々たる武藏野に府を設けしが、當年の風流男の

言問ひし鳥の名の讖をなして、山奥ならねど、住めばこゝも都と

なりぬ。武勇儔なかりし三河武士も、その子孫は花の大江戸に

太平の春に酔ひ、遊樂に耽り、奢侈に流れ、金銀珠玉を鑲めて腰刀

の華美を誇るに至りては、また昔日の祖先が槍先の功名をも知

らざるもの如し。この際、朱鞘の大刀を帯び、衣、至、肝袖、至、腕、腰

間、秋水鐵可斷」と歌ひつゝ、短褐弊袴を穿ちて毫も意とせざり

し南海西海の武士、無骨はこの上もなければ、無骨なるだけに都

門の弊風に軟化せられず、豪氣の發するところ、勤王の魁首とな

風流男

在原業平。

言問ひし

名にし負はばいざ言

問はむ都鳥、我が思

ふ人はありやなしや

と、(伊勢物語)

衣ハ肝ニ至ル

衣ハ肝ニ至リ袖ハ腕

ニ至ル、腰間ノ秋水

鐵ヲモ斷ツ可シ、人

觸ルレバ人ヲ斬リ、

馬觸ルレバ馬ヲ斬リ、

十八交ヲ結ブ健兒ノ

社、北客能ク來ラバ

何ヲ以テカ酬イシ、

彈丸硝薬コレ勝羞、

客猶屬塵セズンバ、

好スルニ寶刀ヲ以テ

渠ガ頭ニ加ヘン。頼

山陽。(前兵兒語)

あまのまらや  
あまのまらや  
あまのまらや

陸梁

撫す

孤燈歌々

河野省三

りて、終によく幕府を倒ししにあらざや。  
漫りに文化といふ勿れ、漫りに開化といふ勿れ、文化開化はな  
ほ酒の如し。酒を飲むものは必ず酔ひ、文化開化に<sup>シ</sup>酒める國は  
必ず亡ぶ。歴史は正直なり、常に人間に向つてこれを語れども、  
おぞ<sup>や</sup>魚市に入りて<sup>腹</sup>腹きを知らず、太平の安きに押れて、人また  
危きを思はざるなり。嗚呼、國家昏亂して忠臣現れ、天下太平に  
して小人<sup>陸梁</sup>陸梁す。輕裘肥馬の間に醉生夢死するもの、ともに古  
今の興亡を語るに足らず。悠々たる世路、誰に向ひてか邦家百  
年の大計を説かん。一窓の夜雨そよりに古を<sup>撫</sup>撫し、慨然として  
眠ること能はず。案を拍ちて大息すれば、孤燈<sup>眺</sup>眺列として、三尺  
の秋水寒し。

(桂月全集第一卷)

河野省三

埼玉縣の人、明治五  
年生、國文學者、文  
學博士、國學院大學  
教授。

生活原理

生活原理

神道神道

二〇 日本民族の信念

河野 省 三

神道といふのは日本民族の傳統的信念のことである。日本  
民族の傳統的信念であるからして、それは正しく日本民族の傳  
統的情操<sup>情操</sup>即ち民族性に根ざしてゐる。それ故に、日本民族の傳  
統的の信念及び情操が、日本國民の生活原理乃至指導精神として  
展開して行くとき、そこに神道が成立する。又此の傳統的の信念  
及び情操が國家生活そのものとして發現するとき、そこに我が  
國體が形成され、又それが國防的乃至國民精神として躍動する  
場合に、そこに武士道としての發達が見られ、更にそれが文化的  
に現れては數島の道即ち和歌として精華を放ち、尙又それが日  
本民族の公共的生活意識の表現となつたものが神社である。  
かやうに、日本民族の傳統的情操の上に築かれた民族的信念が

吾郷如

改解  
我祖親恩心  
より

柿本人麿

柿本人麿  
持統・文武の二朝に  
仕ふ、天平元年(三六九)  
歿。

神道の本質をなし其の真髓をなしてゐる。換言すれば、神道の根本の力は、我が國體の精華を煥發し、我が日本民族の活動を指導し、我が國史の生命を展開し、又我が日本文化の特色を規定して往く所の日本民族の信念に外ならない。それが民族の歴史的经验によりて鍛へられ、民族の文化的形體によつて傳へられて行く所の日本精神の底力なのである。

然らば日本民族の信念とは何であるか。その最も傳統的なるもので、且最も本源的なものは、大君は神にしませばといふ民族的、國民的の信仰である。萬葉集卷三に、柿本人麿が

おほきみは神にし坐せば天雲の  
雷いかづちの上にいほりせるかも

と詠んでゐるやうに、天皇を天つ神の御子、即ち天照大御神の日の嗣の御子と仰ぎ、現御神として畏み戴きまつるところに、日本民

族の根本的な信念がある。而して此の根本的な信念は、正しく日本民族の傳統的情操として、我等日本人の心の底を流れてゐるのである。

日本書紀にも古事記にも、神武天皇が天神の御子として皇祖の威靈に依つて建國の大業を實現遊ばされたことを詳しく傳へてゐる。皇孫命たる天皇が「我は天神の御子なり」といふ深い御信念を以て、萬世一系の帝位を踐み、蒼生を愛撫し給ふ事實は、誠に歴代天皇の御信念であつた。此の天皇の天つ神の子としての御信念と、國民の天皇を現人神と仰ぐ信念とが相合體して我が國體觀念が形成されてゐるのである。かくて、皇祖と皇孫と相待ち、神宮と皇居と相並んで、神皇一體の明御神たる唯一つの日本國家の中心が天壤と共に確立し、此の中心に歸一し奉仕した億兆の國民が無限に發展する所に神國としての日本が存

立してゐるのである。

大君は神にしませばといふ此の強い神々しい信念が、神皇正統記の著者、北畠親房をして「大日本は神國也」と叫ばしめたのであつて、幕末の偉人藤田東湖は其の神國の底力としての日本民族の信念を天地正大の氣として感得したのである。此の信念即ち日本民族の生活を一貫する所の天地正大の氣こそ、全く日本民族が遠く祖先以來心の底に湛へてゐた信仰であつて、そこに神ながらの道としての神道の根柢があり、第一義が存するのである。

(日本精神研究)

北畠親房

吉野朝の忠臣、正平九年(1332)薨、年六十三。

藤田東湖

名は彪、水戸藩士、勤王家、安政二年(1849)薨、年五十。

神ながらの道

### 附 録

#### 近 古 文 學

編

者

近古時代は、源頼朝が鎌倉に覇府を開いた建久三年に起り、徳川家康が江戸に幕府を勅めた慶長八年に至る、約四百年を包含し、その間内亂につぐに内亂を以てし、恐らく本邦史上最も人心の騒然たりし時代であつたらう。しかもさうした兵亂のひまひまにも、文藝の華はなほ咲き匂うたのである。

平安朝四百年の太平の夢が、うちつゞく兵亂にさまされた時には、昨日までは存在を認められなかつた武家の手に政權は移つてゐた。貴族はなほ大臣であり、納言である。しかもそれは虚位であり、空名である。武家の府は傳統の都を捨て草莽の地

をトして起つた。かくて政治の中心は帝都を離れた。とり残された貴族は昔の花の香に憧れて、新しい境地を開拓する氣魄に缺けるところがあり、新興の武家は沐猴の冠するものに似て、一世の文運を左右するに足る底の教養に乏しい。そのいづれからも新時代の文學を期待することは、なほ木に縁つて魚を求め、るがやうに難い。

前代の末葉から動搖してゐた人心の機微を捉へて、前代未聞の活躍をしたものは佛教徒であつた。前代から既に擡頭しかけてゐた淨土教が、民衆の絶大な支持を得、既成宗派の彈壓を排して蔚然たる勢力を形成したのもその當代である。新に將來せられて、新興武家階級の直截果敢な思想と共鳴して、燎原の勢を以て弘布した禪宗、さては熱烈な信念と勇敢な布教法とを以て上下の尊信を鍾めた日蓮宗などが、相次いで人心に新しい力

を植ゑつけ、剛健な武家の氣風と相俟つて、眞率にして沈痛な新時代の思潮を形づくつて行く。

要するに、前代の遺風から全く蟬蛻することの出来ないものと、新しいあるものを追はうとするものと相並んで、この兩思潮が交錯しつゝ、漸次一つの坩堝の中に融けあつて行くところに、近古の一特徴があるのではないか。そして幾分でも新しい文藝は貴族の手で作られずして、緇衣の徒に俟つところが多く、これやがて次の時代に更にそれが庶民の手に委ねらるべきを教へてゐるかに感じられる。

近古時代は便宜上鎌倉室町の兩期に分けて見られる。前半鎌倉時代は、承久の變を経て、朝家は全く政治的圏外に去り、政權全く武家の手に歸し、一方幕府の制度も確立して、七百年間の武家政治の基礎が築かれた時代である。文學の方面では、新舊兩

思潮の交錯が特に目立ち、軍記文學が生まれ、説話文學が行はれ、歌は前代を受けて更に有終の美を濟したが、やがて萎靡振はずなりゆいた時代である。

鎌倉時代の初期約三十年、即ち承久までは、文學史的に嚴密にいへば中古の延長である。千載集で更生の途に上つた歌が、更に完成の域に至つた時代である。資性英邁にましく、て、王政復古の意氣に燃え給ふ後鳥羽院の御氣魄は、その聖作の上にもあらはれ、延いて一種いふべからざる清新の氣が當代の歌風の上にも、たゞようであることは否むべからざるところである。所謂幽玄といひ、たけ高しといふ當代の歌風はかくして生じたところのものであり、その結實したものが新古今和歌集で、その纖細な感覺と巧緻な技巧と相俟つて、實に本邦和歌史上の偉觀である。

新古今集以後の歌は再び沈衰の淵におちた。俊成から定家を経て爲家の時に至つて、平明にして他奇なき所謂二條家の歌風は樹立せられ、潑刺たる生氣は全く失せてしまつた。爲家の歿後、その三子各家風を立て、果ては兩皇統迭立のことと絡みあうて、相争ひつゝ、次期に入るのである。

次に軍記文學は、明らかに前代の歴史物語の系統をひくものである。たゞその描く所が、彼にあつては思ふだに倦怠を感じしめる平安朝貴族の生活であつたに對して、これにあつては目まぐるしく移りゆく動亂の世界であつただけの相違に過ぎぬ。かく取材の世界が異なると共に、そこに登場する人物も亦異なつて、こゝに活躍する者は所謂武士である。その空氣が全く相容れないものであることも容易に想像せられる。彼には現世の榮華に時めく者の驕傲さ、浮薄さが目立つに對して、これには

亡びゆく者の哀愁があると共に、寂滅の後に來るべき不斷の榮光に輝くを見る。しかも四百年昇平の情力の生む中古風の物語がその間に交錯して、快い諧調を保つところに當代軍記の價値がある。

既に中古時代に説話文學の巨擘今昔物語集のあることを述べたが、それは實に佛敎的色彩の饒かなものであつた。その系統をひいて、鎌倉時代に入つても、のされたものは隨分の數に上る。その多くは基調を佛敎におくものであり、作者も亦緇衣の徒であることも言を俟たぬ。中古のそれに比べて異なるところは、彼にありては敎訓布敎を標榜することのなかつたに對し、これはその旨を明らかに歌つてゐるところに存する。

以上の外、鎌倉時代に制作せられた文學としては、擬古的の物語、隨筆、日記、紀行等があるが、今すべてこれを省略して、直ちに室

町時代に瞥見を移さう。

後醍醐天皇の中興の御偉業の成つたと思つたのも一時で、それから五十餘年の間、至尊は或は吉野に、或は河内に、蒙塵の月日を送り給うた畏さ。しかも南風遂にきそはぬ中に、世は再び一統の天下となつたが、爾來室町將軍の世を通じて、また干戈屢、京洛の地を騒がし、その末世は羣雄所在に割據して天下寧日なく、所謂戰國時代を現出し、ついで織豊二氏を経て近世に接するのである。前後二百幾十年、その間現世の勢力は全くその權威を失墜して、下尅上のあさましい世の有様であつた。この時代に眞に安靜の地位を保つてゐたものは、即ち五山の禪僧達であつた。枯淡の底に無限の活力を藏する彼等の生活の中に、當代の藝術のはぐくまれたものが多い。

さて、歌に於ては爲家の三子がそれ／＼異を樹てて争うたこ



とは既に述べた。その中、嫡流たる二條家の勢の他を壓するものがあつたが、それも爲家の孫爲世の歿後、また家學を支へるに足る者が出なかつた。然るにその際に出て衰頹の間にこれを維持し發揚した者は僧頓阿であつた。時恰も從來二條家が夤緣し奉つてゐた大覺寺統の天子蒙塵の折からなので、彼は二條良基によつて持明院統の天子に仕へて、師家の風を後世に傳へたのである。爾後の歌は二條家の傳統以外に出るもの殆どなく、全く生彩に乏しいものとなつてしまつた。鎌倉時代からこの時代にかけて歌集の敕撰せられたものは多かつたが、その多くは様に依つて畫かれた葫蘆の何の奇もないものであつた。そして後花園天皇の御宇の新續古今和歌集を最後として、古今集以來五百五十年に二十一の歌集を遺した和歌敕撰のことが絶えたのである。なほ敕撰ではないが新葉和歌集は吉野朝君

臣の詠を集めて、逆境に處した作者達の洩らした眞情の側々として人を動かすもののあるのは注目に値する。かく歌道の門閥がその根柢を固め、傳統を重んじ師家を尙ぶに及んで、二條家の祖なる俊成・定家、なほ溯つて貫之等は全く偶像視せられ、その所説は一々に經典視せられるに至つたのは、怪しむに足らない。なほその所説を神祕化するや、こゝに傳授秘傳等盛んに行はれた。かうした風は必ずしも歌ばかりでなく、諸種の學藝にも見ることを得べく、自由討究の風、地を拂つて、沈滞の極に達したのである。

吉野朝の頃から室町時代にかけて、擬古物語・歴史文學・隨筆文學、さてはお伽草子の類の世に出たものは量に於ては非常に多いけれども、特にすぐれた作品に至つてはさして多くはない。そしてその多くには、前に鎌倉時代の諸作を品していつたやう

な新舊二思潮の交錯が隨所にうかゞはれ、また佛教的色彩の濃厚さが感じられるが、概して感興の稀薄なのを否むことが出来ない。

この時代の文學として特に注意すべきものは、謠曲と狂言とである。謠曲は猿樂の能に用ひる詞曲である。諸國の社寺に附屬してその傳を保つてゐた猿樂の能は、當代の初頭に觀阿彌世阿彌父子が出て新生面を開き、終にこれが武家の式樂と定められるに及んで、その盛を極めたのである。さて謠曲の現存するものは恐らく千の上に出るであらうが、そのすぐれたものは多く觀阿彌世阿彌のものでなければ、その時代を去ること遠からぬ時期の作と考へられる。

謠曲はその形式から、その主人公が前後一貫せる單式能と、始めに假の姿で出て來た主人公が、後段でその本來の姿をあらは

す複式能とに分けられ、その内容から見て、最も原始的のものらしい神事祝言能と、それらを除いた夢幻的結構を有する幽靈能と、現實的脚色を有する人事能との三種に歸納することが出来る。そしてその本領は幽靈能にあるべく、それはすべて複式能である。謠曲の中心思想は、いふまでもなく佛教思想で、現世に執するの餘りに妄執の鬼となり、會者定離の理を悟らないが故に、物に狂ふに至る。しかし佛陀の慈悲は廣大で、彼等も遂に光明の彼岸に到ることを得るといふ構想、比々皆然るのである。その詞章は地謠と對話とから成り、不完全ながら樂劇の形をもつて、本邦劇文學の第一聲を擧げてゐる點に於て注目すべきである。勿論その人物は類型的で、性格を書きわけるといつたこともなく、その文章は古典の縫綴を事として、必ずしも創作を念とせず、祝言・幽靈戀・述懷・望憶いろ／＼の縁によるべき詩歌の

言葉を能の風體によりて、とりあてがひて書くべし。」とて、ひたすらその引用の妥當ならむことを欲したのである。

能の中間に演じて、その嚴肅味を和らげようとするのが狂言で、古猿樂の面影を傳へてもとは單なる滑稽の演技であつたものに多少の脚色を加へたものである。現實の世の弱點を強調し、これを公衆の面前にさらけ出して、哄笑せしめ、その間まゝ諷刺の意を寓しようとするところに、狂言作者の意圖はあつたと考へられる。その詞章は對話のみからなり、その用語も全く當代の口語で、脚本の體をほゞ具へてゐる。

歌は室町時代に入つて傳統の埒内に閉ぢこもつて、祕事傳授に神祕化せられては、また容易に近づくことが出來ない。こゝに歌に代つて起つたのは連歌であつた。連歌もその起原は古いが、鎌倉時代になると、五十韻、百韻等が行はれ、専ら滑稽機智に

山をおいて想を練つたものであつた。そのため専門歌人はこれを蔑視したが、却つてそれが連歌をして地下の間に行はれる基となり、遂に室町時代の初頭二條良基これを嗜むに至り、更に中頃宗祇の出づるに及んで、連歌はその發達の極に達した。連歌は數句乃至數十百句が連鎖をなすところに變化が見られ、興味も饒かなのである。かくて、そのつゞけ様の法式が研究せられ、整備せられ、幾次の改訂を経て、ますます煩瑣となり、一方用語の方面では和歌に接近するに至つて、また革新の機に逢著した。戰國時代に山崎宗鑑と荒木田守武とは共に連歌から出て、遂にはその殻を破つて、奔放な世界に去つた人達である。彼等の連歌はあくまで滑稽諧謔を主としたが、二家の性格の差から前者は粗野にして露骨、後者は穩健にして醇雅、それゝその趣を異にしてゐる。この二人者の連歌を俳諧の連歌といふ。要す

るにこの二人者は斯界の陳吳である。その發展は次期をまたなければならなかつた。

なほこの時代に於て特に記すべきは五山の禪僧等の間に行はれた漢詩文である。戰亂相次いで寧日なかつた當代にあつて、その災禍の圏外にあつた者は僧徒であつた。しかも彼等の間に詩文練達の士出で、文學に堪能の客現れ、京師五山は實に藝文の淵藪であつた。五山の文學はほゞ應永の頃を以て二期に分つべく、前期は詩文發達の時代であり、後期は學問研究の時代であり、かくて一脈の學燈は維持せられて、次代大いに興るべき素地を築きつゝあるのであつた。

訂新日本讀本卷九 (終)

常用漢字

(大正十二年五月臨時國語調査會發表、昭和六年五月修正) (千八百五十八字)

- 【一】一丁七丈三上下不
  - 世丙並【一】中【一】丸主
  - 【一】之久乏乘【二】乙九
  - 乞也乳亂【一】了事【二】
  - 二五五井【一】亡交京亭
  - 亦【人】人仁仇今介仕他
  - 付代令以仰仲伴任伊伏
  - 伐休伯伴伺似位低住佐
  - 何余佛作伸使來佳例侍
  - 供依侮侯便係促俱俊
  - 俗保俠信修俳俵俸併倉
  - 個倍倒候借倫假俸偏停
  - 健側偶傍傑備催働傳債
  - 傷傾僅像僚偽僧價儀億
- 
- 儉價優【九】元兄充兆兎
  - 先光克兌免兒【八】入内
  - 全兩【八】八公六共兵具
  - 其典兼【一】冊再【一】元
  - 【一】冬冷涼准凍【九】
  - 凡【一】凶出【一】刀刃分
  - 切刊刑列初判別利到制
  - 刷券刺刻則削前剛副剩
  - 割創劇劍劑【九】力功加
  - 劣助努効勅勇勉勸勸務
  - 勝勞募勢勤勸勸勸【九】
  - 包【七】化北【一】區【十】
  - 十千升午半卑卒卓協南
  - 博【ト】占【一】印危却卯
- 
- 卷即【一】厄厘厚原厥
  - 【ム】去參【又】及友反叔
  - 取受【一】口古句叫召可
  - 史右司各合吉同名后吏
  - 吐向君吟否含呈吸吹告
  - 咸周味呼命和咽哀品員
  - 哲唐唯唱商問啓善喉喜
  - 喪喫單嗣嘉器噴嚴囁
  - 【一】囚四回因困固國圍
  - 園圍圖團【土】土在地坂
  - 均坊坑坪垂型埋城域執
  - 培基堀堂堅堤堪報場塔
  - 塗塵境墓塀增墨墮壁壇
  - 壓壤【土】士壯壹壽【又】
- 
- 夏【夕】夕外多夜夢【大】
  - 大天太夫央失奇奉奏契
  - 奔奢輿奪獎奮【女】女奴
  - 好如妃妊妥妙妨妹妻姉
  - 始姑姓委姦姪姪姻姿威
  - 娘娛娠媚婦婦婿媒嫁嫡
  - 嫌孃【子】子字存孝季孤
  - 孫學【一】宅守安宏完宗
  - 官定宜客宜室宮害宴家
  - 容宿寄密富寒察察寢實審
  - 寫寬寶【寸】寸寺封射將
  - 專尉尊尋對導【小】小少
  - 尙【尤】就【一】尺尼尾尿
  - 局居屈屈屋展層履屬

【山】山岡岩岳岸峙峯島  
峽崇崎崩【川】州巡集  
【工】工左巧巨差【已】已  
【巾】市布帆希帝帥師席  
帳帶常帽幅幕幣【干】干  
平年幸幹【幻】幼幾【床】  
床序底店府度座庫庭庶  
康廉靡廢廣廳【延】延廷  
建廻【弄】弄弊【式】式  
【弓】弓弔引弟弱張強彈  
【影】形影影影【役】役  
彼往征待律後徐徑徒得  
從御復徵微德徹【心】心  
必忌忍志忘忙忠快念怒  
思怠急性怨怪怯恐恥恨  
恩恭息悔悟悖患悲惟悼

情感惜惠惡情惱想愁愉  
意恩愛感慈慈慕慘慢慎  
憤慨慮慰慶欲憂憐憚恚  
憶憾憤懇應懲懷懸戀  
【戈】成我戒戰戲戴【戶】  
戶戾房所扇【手】手才打  
扱扶批承技抑投抗折抱  
抵押披抽拂拍拒拓拔拘  
捆招拜括拳拾持指振捕  
捧描捨掃授掌排掛採探  
控推揚接提換握揮搥揮  
援損搖搜摘携摩撫擇擊  
操擔據擬擴攝【支】支  
【支】收改攻放政故敍教  
敏救敗敢散敬敵敷數整  
【文】文【斗】斗料斜【斤】

斤斥斬新斷斯【方】方施  
旋族族旗【无】既【日】日  
且旨早旬旭昇昌明易昔  
星春昭昨是映時晚晝普  
景晴晶智暇暖暗暑暮暴  
曆曇曜【日】曲更書曹會  
替最會【月】月有朋服朕  
朗望朝期【木】木未末本  
札朱机朽杉材村束柿杯  
東松板枕林枚果枝枯架  
柄某染柔杏柩柱柳栗校  
株根格栽桃案桐桑梅條  
梨棧棄棋棒棟森棺植楠  
業極榮構概樂樓標樞模  
樣樹橋機橫檝檢櫻欄權  
【次】次欲款欺歌歡歐歡

【止】止正此步武歲歷歸  
【歹】死殊殉殖殘【段】段  
殺殿毀【母】母每毒【比】  
比【毛】毛【氏】氏民【氣】  
氣【水】水水永汙求汗汚  
江池決汽沈沒沖沙汰河  
沸油治沼沿沉泉泊法波  
泣泥注泰泳洋洗津洪活  
派流浦浪浮浴海浸消涉  
添減淵渡溫測港渴湖湧  
湯源準溢溶溺滅滋滑滯  
滴滿漁漂漆漏演漕濃漢  
漫漸潔潛湖澤激濁濃濕  
濟濱瀧灣【火】火灰災炊  
炎炭烈無然煉煮煙照煩

熟熱燃燈燒營燔爐【爪】  
爪爭爲爵【父】父【又】兩  
【片】片版牌【牙】牙【牛】  
牛牧物牲特犧【犬】犬犯  
狀狂狩狹猛貓猶獄獨獲  
獵獸獻【玄】玄率【玉】玉  
王玩珍珠班現球理琴環  
璽【瓦】瓦瓶【甘】甘  
甚【生】生產甥【用】用  
【田】田由甲申男町畷畏  
烟畜畝略番畫異雷當壘  
【疋】疋疎疑【疔】疫疲疾  
病症痘痛痢療癖【登】登  
發【白】白白的皆皇【皮】  
皮【皿】皿盆益盛盜盟盡  
監盤【目】目盲直相省眉

看真眠眼着睡督【矢】矢  
知短【石】石砂砲破研硬  
硯碁碎碑確磁磨礎【示】  
示社祈祀祖祝神票祭禁  
禍福禦禮【禾】秀私秋科  
秒租秩移稅程稚種稱稻  
稿穀積穗穩【穴】穴究空  
突窈窕窗窮【立】立章童  
端競【竹】竹竿笑笛符第  
筆等筋筒答策算管箱節  
範築篤簡簿籍【米】米粉  
粒粘粗粹精糖糞【糸】系  
紀約紅紋納純紙級紛素  
紡索紫累細紳紹紺終組  
結絕絡給統絲絹緞綠維  
綱網綴綻綿緊緒線縞絲

編緩緯練縛縣縫縮縱總  
績繁織繕繪繭線繼續  
【缶】缺【罽】罪置署罰罵  
罷羅【羊】羊美羣義【羽】  
羽翁翌習翼【老】老考者  
【而】耐【耒】耕【耳】耳聖  
聞聯聲職聽【聿】肅肇  
【肉】肉肖肝股肥肩育肺  
胃背胎胞胸能脅脈脊  
脚脫腐腕腦腰腸腹膚膜  
膝臙臙膺臙【臣】臣臥臨  
【自】自臭【至】至致臺  
【白】與興舉舊【舌】舌舍  
【舟】舞【舟】舟航般舵舩  
船艦【良】良【色】色【艸】  
芝花芽芳苑苗若苦莢茂

茶草荒荷莊菊菌菓菜華  
萬落葉著葬蒙蒸藎蔓薄  
藏藝藤藥【虜】虜虐處虛  
號【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融蟲  
蠶蠶【血】血衆【行】行術  
街衝衝衛【衣】衣表袂袋  
袖被裁裂裏裕補裝袂製  
復袞襲【西】西要覆【見】  
見規視親覺覽觀【角】角  
解觸【言】言訂計討訓託  
記訟訪設許訴診詐詔評  
詞詠試詩詰詰詳誇誌認  
誓誕誘語誠誤說課諒談  
請論諭諸諾謀諷諒講謝  
謠謹謬證識譜警譚議護  
譽讀變讓【谷】谷【豆】豆

豐【豕】豚象豪豫【貝】貝  
貞負財貧貨販貫責貯貳  
貴買貸費賈賤賦質賄資賤  
賓賜賞賢賈賤賦質賄資賤  
贈贊【赤】赤【走】走赴起  
超越趣【足】足距跡路踊  
躍【身】身【車】車軌軍軒  
軟軸較載輕輩輪輯輸輿  
轉【辛】辛辨辭辯【辰】辰  
農【走】込迎近返迫迭述  
迷追退送逃逆透逐途通

速造連週進逸遂遇遊運  
過道達達遙遞遠遠適遭  
遲遷選遺避還邊邊【邑】  
邦邗邗邗邗邗邗邗邗邗邗  
【酉】酌配酒酢酬酷酸醉  
醜醫【采】釋【里】里重野  
量【金】金釜針釣鈍鈴鉛  
鉢銀銃銅鉛銳鋒鋼錯錄  
錢鍋鎖鎖鏡鑄鑄鐵鐵鑑鏡  
【長】長【門】門閉開閉開  
開開關【阜】防附降限陞

院陣除陪陳陰陵陶陷陸  
陽隆隊階隔隙際障障隣隨  
險隱【隹】隻雀雄雅集雁  
雌雙雜離離【雨】雨雪雲  
零雷電雷震霜霧露露  
【青】青靜【非】非【面】面  
【革】革靴【音】音響【頁】  
頂項順頤頤頤頤頤頤頤  
額額額額額額額額額額  
【飛】飛翻【食】食飢飲飯  
飾養餓餘餅館餐【首】首

【香】香【馬】馬馳駁駁駐  
騎騰騷驅驗驚驛【骨】骨  
髓體【高】高【髟】髮【目】  
闕【鬼】鬼魂魔【魚】魚鮮  
鯉鯛【鳥】鳥鳴鳴鶴鶴  
【齒】齒【鹿】鹿麗【麥】麥  
【麻】麻【黃】黃【黑】黑獸  
點黨【鼓】鼓【鼻】鼻【齊】  
齋【齒】齒齡【龍】龍【龜】  
龜

注意

(一) 本表にない漢字は假名で書くこと (二) 固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、ただし外國(支那を除く)の人名地名は假名書とすること (三) 代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞 および助詞はなるべく假名で書くこと (四) 外來語は假名で書くこと。

略字表

(臨時國語調査會發表)

左の字體を本位として用ひること。  
(括弧内の小字は字典體)

勸(勸) 權(權) 灌(灌) 飲(飲) 觀(觀)  
沢(澤) 扞(擇) 訳(譯) 馭(驛) 积(釋)  
交(變) 恋(戀) 壘(壘) 湾(灣)  
莖(莖) 徑(徑) 經(經) 輕(輕)  
併(併) 塀(塀) 瓶(瓶) 餅(餅) 研(研)  
齊(齊) 齋(齋) 濟(濟) 劑(劑)  
殘(殘) 淺(淺) 賤(賤) 錢(錢)  
勞(勞) 營(營) 榮(榮) 學(學) 覺(覺)

举(舉) 譽(譽) 斷(斷) 繼(繼)  
齒(齒) 齡(齡) 濕(濕) 頭(顯)  
窓(窗) 総(總) 属(屬) 囁(囁)  
為(爲) 偽(偽) 帶(帶) 滯(滯)  
参(參) 慘(慘) 兩(兩) 滿(滿)  
発(發) 癢(癢) 胤(胤) 獵(獵)  
乱(亂) 辞(辭) 潜(潛) 贊(贊)  
走(走) 徒(徒) 位(從) 縱(縱)  
惱(惱) 腦(腦) 処(處) 拠(據)  
担(擔) 胆(膽) 耒(來) 麥(麥)  
寿(壽) 鑄(鑄) 數(數) 樓(樓)

楽(樂) 葉(藥) 讀(讀) 続(續)  
 竜(龍) 滝(瀧) 随(隨) 髓(髓)  
 麻(鹿) 籟(麗) 聽(聽) 廳(廳)  
 虚(虚) 戲(戲) 遲(遲) 解(解)  
 独(獨) 触(觸) 疊(疊) 撰(攝)  
 虫(蟲) 蚕(蠶) 仮(假) 兎(兎)  
 励(勵) 嘗(嘗) 国(國) 圀(圀)  
 田(圓) 凶(圖) 尅(壹) 実(實)  
 写(寫) 宝(寶) 扣(控) 叙(敘)  
 条(條) 様(様) 帰(歸) 気(氣)  
 炉(爐) 犧(犧) 猷(猷) 画(畫)

苗(畱) 尽(盡) 礼(禮) 称(稱)  
 糸(絲) 欠(缺) 声(聲) 台(臺)  
 旧(舊) 万(萬) 号(號) 証(證)  
 豊(豊) 弁(辯) 逶(遞) 辺(邊)  
 医(醫) 鉄(鐵) 関(關) 双(雙)  
 霊(靈) 余(餘) 館(館) 体(體)  
 塩(鹽) 点(點) 覚(覺) 龜(龜)  
 闕(闕) 刺(刺) 龜(龜)

略字表 終

吉澤義則氏

四六判 表紙グラビア版美本

訂五 新日本讀本自習書 全拾册

定價各金參拾八錢 送料各四錢

▼御註文は最寄の書店又は振替前金でお願いいたします

容内の特獨書本

- 一大 意 七 研究問題
  - 二文 段 一 豫習方法について
  - 三語 句 釋 二 豫習方法について
  - 四通 釋 三 豫習方法について
  - 五頭 註 四 豫習方法について
  - 六鑑 賞 五 豫習方法について
- 一 豫習方法について  
 二 豫習方法について  
 三 豫習方法について  
 四 豫習方法について  
 五 豫習方法について  
 六 豫習方法について

發行所 文教書院

發賣所

東京市神田區保町一ノ五(振替東京二六四番) 四六二(四)  
 大阪市東區博勞町五丁目六(振替大阪一七四)

修文館

澤 義 則	各金六拾錢	一丁目二五ノ一	木 政 雄	各金五拾五錢	五丁目五十六番地	木 常 松	各金五拾五錢	東京市神田區保町一ノ五(振替東京二六四番)	文 館	大阪府大正四番
-------	-------	---------	-------	--------	----------	-------	--------	-----------------------	-----	---------

五  
烟  
拓



# 日本文學年表

(訂五) 新日本讀本附錄

	近古 (代時町室・倉鎌)										古中 (代時朝安平)					古上 (代時和大)		種	類	作家																															
	自一八五三 至二二六二										自一四五五 至一八五二																																								
傳記的政治小説	假名草紙 浮世草紙 日本永代藏 世間胸算用 武傳來記 草雙紙 黃表紙 酒落本 讀月物語 雨月物語 椿説弓張月 里見八犬傳 合卷本 滑稽本 東海道中膝栗毛 浮世風呂										宇治拾遺物語 石清水物語 古今著聞集 十訓抄 水野拾遺鏡 吉野拾遺鏡 增元正統記 神皇正統記 保元物語 平家物語 源平盛衰記 太平盛衰記 義經記 曾我物語 小倉草紙					竹取物語 伊勢物語 宇津保物語 源氏物語 落衣物語 狹衣物語 堀中納言物語 今昔物語 榮華物語 今昔物語					祝詞 古事記 日本書紀		文學	種	類	作家																									
蓬生日記	嵯峨日記 花屋日記 七番日記 奧の細道 旅のなぐさ 菅笠日記										十六夜日記 東關道紀行					士佐日記 蜻蛉日記 紫式部日記 和泉式部日記					萬葉歌集 (長歌)	種					類	作家																							
短歌	賀茂真淵集 桂國一枝 狂歌 古今夷曲集 萬歲狂歌集 良寛和尚歌集										八新古今集 金槐和歌集 玉葉集 新葉集					一古後撰集 二古拾遺集 三古後撰集 四金葉集 五金葉集 六金葉集 七山家集							萬葉歌集 (長歌)	種	類	作家																									
日本派俳句	御傘 (松永貞徳) 宗因千句 芭蕉七部集 蕪村七部集 一茶發句集										俳諧 菟玖波集 大菟玖波集 新菟玖波集					連歌					種	類					作家																								
新體詩	流歌 長吟 歌行 常盤津 清元 御詠歌 松の落葉										舞曲 小歌					神樂歌 催馬樂 漢和朗詠集 新撰朗詠集 梁塵秘抄							種	類	作家																										
戲曲	淨瑠璃 國性爺合戰 曾我會稽山 (近松門左衛門) 折本 雲原傳 手習鑑 假名手本 忠臣藏 (竹田出雲) 本朝二十四孝 (近松半二) 脚										狂言 狂言曲										種	類				作家																									
隨筆	幻住庵記 風俗文選 鶉の衣 折本 雲原傳 手習鑑 假名手本 忠臣藏 (竹田出雲) 本朝二十四孝 (近松半二) 脚										徒然草 方丈草					枕草子 袋草子 文鏡秘府論							種	類	作家																										
漢詩文	羅山文集 藤樹先生文集 白石詩草 鳩巢文集 栗山詩集 山陽文集 山陽文集 言志四錄 正氣歌常陸帶 新氣歌常陸帶 星巖 拙堂文集										五山文學					懷風藻 凌雲集 文華秀麗集 經國粹 本朝文粹					種	類				作家																									
落合直文	賴山陽	坪内逍遙	中島廣足	三浦梅園	柴田鳩翁	清水濱臣	瀧澤馬樹	小林一茶	石原正明	松平定信	良寛	橘南	太田南畝	村田春海	加藤秋成	上田藤村	本居宣長	谷口燕村	横井也村	賀茂真淵			竹田出雲	柳澤淇園	室鳩巢		新井白石	森川許六	近松門左衛門	貝原益軒	松尾芭蕉	井原西鶴	北畠親房	吉田兼好	阿佛尼	藤原定家	鴨長行	西行	紫式部	清少納言	紀貫之	凡河内躬恒	紀原業平	海大山山柿太	大伴部上本	養家赤他人	岡麿持人良麿				
落合直	山陽	山陽	樞園	梅園	鳩翁	泊酒	南總里目	おら	年々	花月	良寛	東海	狂	琴	藤	鈴	玉	燕	岡	賀	雲	駿	折	會	益	燕	世	狂	東	太	增	神	徒	十六	源	平	保	新	方	山	大	榮	和	源	枕	土	古	伊	竹	萬	古

(代時戸江)

(明) 治 大 正

平家物語  
源平盛衰記  
太平記  
義經記  
曾我物語  
お伽草紙

假名草紙  
太古閣記  
浮世草紙  
日本永代蔵  
世間胸算用  
武道傳來記  
草雙紙  
黃表紙  
酒落本  
讀月物語  
雨月物語  
椿説弓張月  
里見八犬傳  
合卷本  
滑稽本  
東海道中膝栗毛  
浮世風呂

嵯峨日記  
花屋日記  
七番日記  
奥の細道  
旅のなぐさ  
菅笠日記

傳記的政治小説  
經國美談  
佳人奇遇  
雪中梅  
創作  
浮雲  
五重塔  
うたかたの記  
瀧口入道  
たけくらべ  
金色夜叉  
不如歸  
高野聖  
舞姫  
破戒  
運命  
春潮  
我輩は猫である  
草枕  
ふらんす物語  
鶉籠  
虞美人草  
平凡  
土生  
新瀨舟

蓬生日記  
亂れ髪  
竹の里歌  
萩の家歌集  
アラ、ギ  
啄木歌集  
長塚節歌集  
春泥集  
空穂歌集  
自選歌集叢書

御傘  
(松永貞徳)  
宗因千句  
芭蕉七部集  
蕪村七部集  
一茶發句集  
賀茂眞淵集  
桂園一枝  
狂歌  
古今夷曲集  
萬歳狂歌集  
良寛和尚歌集

日本派俳句  
春夏秋冬  
(子規等)  
日本俳句抄  
子規句集  
明治新題句集  
海紅  
新傾向句  
の研究  
春夏秋冬  
(虚子)  
井泉水句集  
筑波會・秋聲  
會其他  
新俳句帖  
紅葉句帳

新體詩  
孝女白菊の歌  
水沫集  
若菜集  
天地玄黃  
一葉舟  
夏草  
落梅集  
天地有情  
無弦弓  
泣菫詩集  
春鳥集  
海潮音  
白羊宮  
日本民謡全集  
邪宗門  
慶園  
啄木遺稿  
獨歩詩集  
舞ごころも  
日本象徴詩集  
白秋小唄集  
春月小曲集  
白秋詩集  
川路柳虹詩集  
明治大正詩選

淨瑠璃  
國性爺合戰  
曾我會稽山  
(近衛門)  
菅原傳授  
手習鑑  
假名手本  
忠臣藏  
(竹田出雲)  
本朝二十四孝  
(近松半二)  
脚本

幻住庵記  
風俗文選  
鳥衣春  
おらが柴の記  
折焚く柴の記  
駿臺雜話  
雲萍雜志  
閑田耕筆  
玉勝問  
花月草紙  
泊酒筆話  
梧窓漫筆  
松廼舍落葉  
年々隨筆  
藤篋冊子  
琴後集  
うけらが花

隨筆  
そらごと  
花紅葉  
雪月花  
黃菊白菊  
自然と人生  
武藏野  
病間錄  
仰臥漫錄  
墨什一滴  
潮待草  
萩之家遺稿  
筆のしづく  
み、ぎの  
たはごと  
筆のまに  
竹柏集  
斷腸亭雜藁  
偶像再興  
光あれ  
三太郎日記  
人生と趣味  
嵐の前  
小鳥の来る日  
洗心雜話  
山水巡禮  
飯倉だより

漢詩文  
蒼海全集  
藤公詩存  
春濤集  
槐南集  
評論  
小説神髓  
ニイチエ  
美的生活論  
囚はれたる  
文藝  
非自然主義  
近代文學十講  
文藝思潮論  
劇場最近十年  
心頭雜草  
宗教文學論  
文藝百科要義  
近代文藝  
十二講  
日本現代文學  
十二講

羅山文集  
藤樹先生文集  
白石詩草  
白鳥文集  
鳩巢文集  
栗山文集  
山陽詩集  
山陽文集  
言志四錄  
正氣歌常陸帶  
新氣歌  
星巖  
拙堂文集

井原西鶴  
松尾芭蕉  
貝原益軒  
近松門左衛門  
森川許六  
新井白石  
室鳩巢  
柳澤淇園  
竹田出雲  
賀茂眞淵  
横井也右  
谷口蕪村  
本居宣長  
上田秋成  
加藤千蔭  
村田春海  
太田南畝  
橘南畝  
良寛  
松平定信  
石原正明  
小林一茶  
瀧澤馬琴  
香川景樹  
清水濱臣  
柴田鳩翁  
三浦梅園  
中島廣足  
賴山陽  
坪内逍遙  
落合直文  
德富蘇峰  
二葉亭四迷  
夏目漱石  
芳賀矢一  
正岡子規  
尾崎紅葉  
幸田露伴  
上田萬年  
北村透谷  
徳富蘆花  
大町桂月  
藤岡東圃  
國木田獨步  
高山樗牛  
田山花袋  
土井晩翠  
樋口一葉  
島崎藤村  
岡本綺堂  
網島梁川  
佐佐木信綱  
高濱虛子

井原西鶴  
松尾芭蕉  
貝原益軒  
近松門左衛門  
森川許六  
新井白石  
室鳩巢  
柳澤淇園  
竹田出雲  
賀茂眞淵  
横井也右  
谷口蕪村  
本居宣長  
上田秋成  
加藤千蔭  
村田春海  
太田南畝  
橘南畝  
良寛  
松平定信  
石原正明  
小林一茶  
瀧澤馬琴  
香川景樹  
清水濱臣  
柴田鳩翁  
三浦梅園  
中島廣足  
賴山陽  
坪内逍遙  
落合直文  
德富蘇峰  
二葉亭四迷  
夏目漱石  
芳賀矢一  
正岡子規  
尾崎紅葉  
幸田露伴  
上田萬年  
北村透谷  
徳富蘆花  
大町桂月  
藤岡東圃  
國木田獨步  
高山樗牛  
田山花袋  
土井晩翠  
樋口一葉  
島崎藤村  
岡本綺堂  
網島梁川  
佐佐木信綱  
高濱虛子

近

代

自  
二五二八

(明治・大正・時代)

傳記的政治小説 經國美談 佳人奇遇 雪中梅 創作 浮雲 五重塔 うたかたの記 瀧口入道 たけくらべ 金色夜叉 不如歸 高野聖 舞姫 破戒 運命 春 我輩は 猫である 草枕 ふうん物語 鶉籠 虞美人草 平凡 土生 新潮 高瀬舟 宣言 暗夜行路 大衆文學

蓬生日記

短歌 亂れ髪 竹の里歌 萩の家歌集 アラ、ギ (雜誌) 啄木歌集 長塚節歌集 春泥集 空穂歌集 自選歌集叢書

日本派俳句 春夏秋冬 (子規等) 日本俳句抄 子規句集 明治新題句集 海紅 新傾向句の研究 春夏秋冬 (虛子) 井泉水句集 筑波會・秋聲會其他 新俳句帖 紅葉句帳

新體詩 孝女白菊の歌 水沫集 若菜集 天地玄黃 一葉舟 夏草 落梅集 天地有情 無弦弓 泣菫詩集 春鳥集 海潮音 白羊宮 日本民謡全集 邪宗門 廢園 啄木遺稿 獨歩詩集 舞ごころも 日本象徴詩集 白秋小唄集 春月小曲集 白秋詩集 川路柳虹詩集 明治大正詩選 童謡 日本童謡集

戯曲 黃門記 童幼講釋 夜討會 狩場曙 勸善懲惡 硯機關 桐一葉 杳手鳥 孤城落月 牧の方 俠客春雨傘 日蓮上人 辻説法 新曲浦島 義民甚兵衛 井伊大老の死 修善寺物語

隨筆 そらごと 花紅葉 雪月花 黃菊白菊 自然と人生 武藏野 病間録 仰臥漫録 墨什一滴 湖待草 萩之家遺稿 筆のしづく み、ずの たはごと 筆のまに、

漢詩文 蒼海全集 藤公詩存 春濤集 槐南集 評 小説神髓 ニイチエ 美的生活論 囚はれたる 文藝 非自然主義 近代文學十講 文藝思潮論 劇場最近十年 心頭雜草 宗教文學論 文藝百科叢書 近代文藝 十二講 日本現代文學 十二講

續冬彥集 樹下石上 水菫 茶話抄 草木蟲魚 芥川龍之介集 感想小品 生田春月全集 洗心録 靜と動との間 若き自然 旅と歌と 野を歩む者 季節の窓 樹木とその葉 春を待ちつゝ 七寶の柱 山中雜記 靜思餘錄 生命の微光 三都物語 藪柑子集 飯倉だより 山水巡禮 洗心雜話 小鳥の來る日 風の前 人生と趣味 三太郎日記 光あれ 偶像再興 斷腸亭雜稟 竹柏集 筆のまに、

賴山陽 坪内逍遙 落合直文 德富蘇峰 二葉亭四迷 夏目漱石 芳賀矢一 正岡子規 尾崎紅葉 幸田露伴 上田萬年 北村透谷 德富蘆花 大町桂月 藤岡東圃 國木田獨步 高山樗牛 田山花袋 土井晩翠 樋口一葉 島崎藤村 岡本綺堂 綱島梁川 佐佐木信綱 高濱虛子 五十嵐力 姉崎嘲風 河井醉茗 金子薫園 尾上柴舟 島木赤彦 沼波瓊音 近松秋江 薄田泣菫 長塚節 吉江喬松 正富汪洋 相馬御風 萩原井泉水 山村暮鳥 若山牧水 土岐善麿 北原白秋 石川啄木 吉田紘二郎 川路柳虹 三木露風 芥川龍之介 西條八十 生田春月

山陽 逍遙 落合直 蘇峰 二葉亭 漱石 國民性 筆のまに 紅葉 露伴 國語の 透谷 蘆花 桂月 獨歩 國文學 花袋 天地 一葉 藤村 綺堂 病問 旅と 虛子 八重 水國語 新國語の 光あ 醉茗 金子薫 尾上柴 赤彦 凡人に 都會と 茶樂 獨樂 自然 汪洋新 靜と動 野を歩 砂に坐し 山水川 風は草 やきり 春やきり 啄木 吉田紘二 川路柳 露風 芥川龍之 少年 日本 生田春月









總編

會  
自然  
在  
也

現象

奧  
田  
總

神戶市兵庫區入江

元今星 角迄二丁目三

大陽平車院山古

廣嶋市字子乃三丁目三六



日本文部省

上古	中古	新	古	漢	晉	唐	宋	元	明	清
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

總論

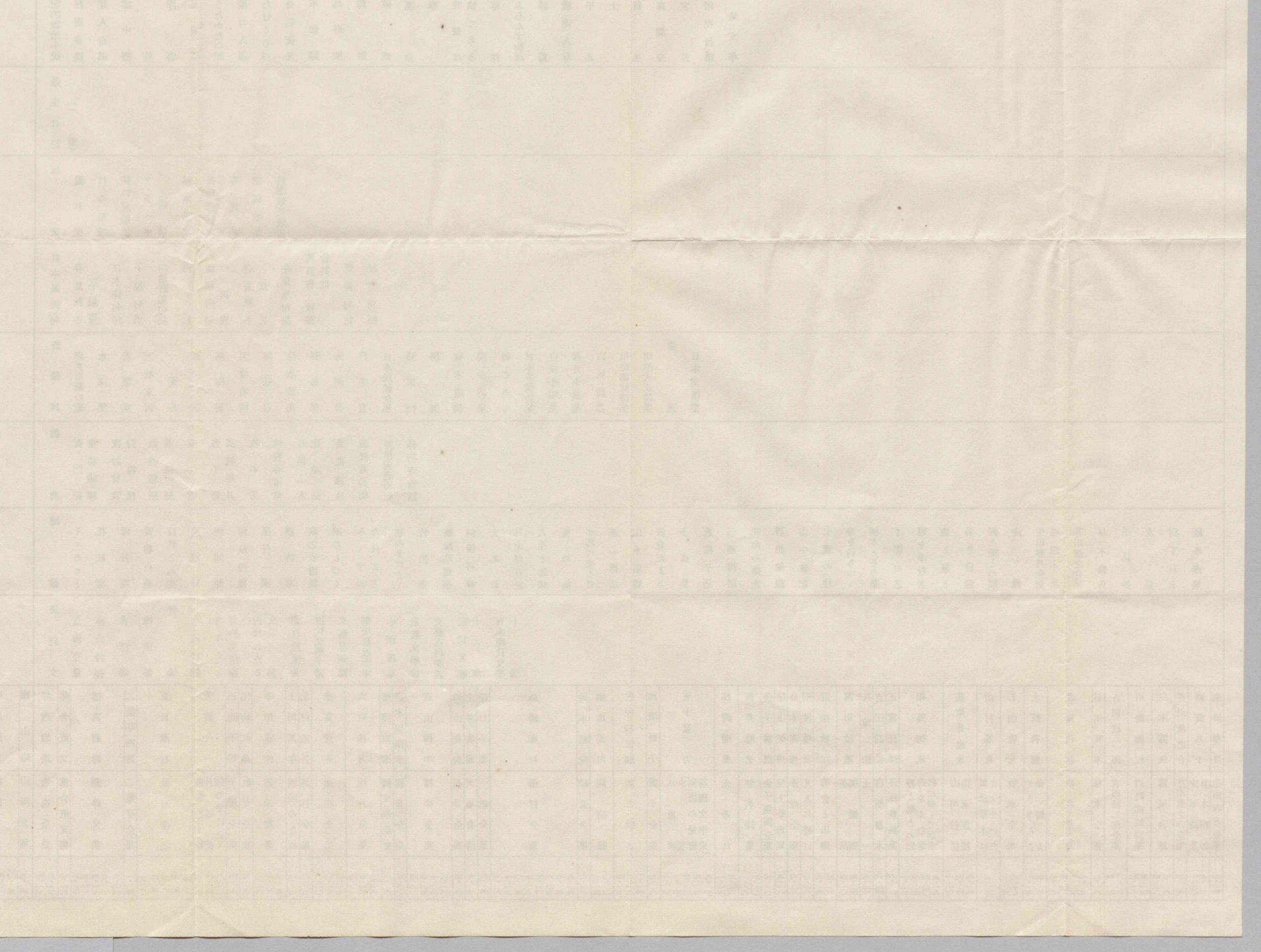
- 1. 自然
- 1. 社會
- 1. 文化
- 1. 藝術

現象

神戶市立第一中學校  
奥田 穂

大陽堂印刷  
元今里 角邊三丁目三

廣嶋市字子町三丁目三



廣嶋市字子乃三丁目三六

大陽平車陰山古

元今星 角之迄二丁目三

現像

神戶市兵庫區入江通八丁目

六六、白

隨筆

會  
自然  
古  
在  
自

奧  
田  
總  
樣

日本  
文  
字  
表

贈

- 5 金
- 1 自然
- 1 七
- 1 女

現

奥  
田  
穂  
様

神戶市兵庫区入江通八丁目  
六六〇白

大陽平車屋  
元今里 角辺三丁目三

廣嶋市字子町三丁目三九